

財団法人ライフ・プランニング・センター

年報 2008

平成20年度
(2008.4~2009.3)

事業報告書

36

目次 (2008年度年報)

はしがき	日野原 重明 ... 1
ライフ・プランニング・センターのあゆみ	3
健康教育活動	7
1 ■ 第35回財団設立記念講演会「エイジズムを超えて - 年齢によって差別しない社会を」	7
2 ■ いのちの教室活動	8
3 ■ 専門職セミナー・講演会	9
4 ■ 一般セミナー	11
5 ■ ホームヘルパー 2 級養成講座	13
6 ■ 電話による相談	14
7 ■ ハーベイ教室	14
8 ■ 血圧自己測定講習会	14
9 ■ 資料・備品の整備	14
10 ■ 出版・広報活動	15
11 ■ 厚生労働省委託事業「がん患者に対するリハビリテーションに関する研修事業」	16
「新老人運動」と「新老人の会」の運営	20
1 ■ 世話人会の開催	21
2 ■ 拡大世話人会の開催	21
3 ■ 地方支部の設立	24
4 ■ 地方支部規約の制定	24
5 ■ 地方支部の運営と活動	24
6 ■ 海外講演会ツアー	27
7 ■ 「新老人の会」設立 8 周年フォーラム	29
8 ■ 第 2 回「新老人の会」ジャンボリーの開催	30
9 ■ 「新老人の会」本部サークル活動	31
10 ■ 本部主催の催しものなど	35
11 ■ 「新老人の会」ヘルス・リサーチ・ボランティア	35
ヘルスボランティアの育成と活動	42
1 ■ ヘルスボランティアの育成	42
2 ■ 血圧測定ボランティアの養成と活動	43
3 ■ SP ボランティアの活動	44
4 ■ 第 3 回全国模擬患者学研究大会	46
カウンセリング 臨床心理ファミリー相談室	48
1 ■ 当センターの個別カウンセリングについて	48
2 ■ 聖路加看護大学の学生、職員を対象にしたカウンセリング	48
3 ■ 企業におけるメンタルヘルス対策への取り組み	49
4 ■ 聖路加国際病院カウンセリング	49
5 ■ 新老人のためのコンサルテーション	49
国際フォーラム&ワークショップ	50
1 ■ LPC 国際フォーラム2008	50
2 ■ 健康座禅ワークショップ	52
海外医療事情調査	53
1 ■ 社会福祉法人救済会憩の園	53
2 ■ 日伯友好病院	53
3 ■ オスピタル・デ・コラソン	53
4 ■ ロンドリーナ画像診断センター	54
5 ■ イピランガ総合病院	54
教育的健康管理の実践 (ライフ・プランニング・クリニック)	55
1 ■ クリニックの目指すもの	55
2 ■ 診療の概要	57
3 ■ 各種検査数の推移	58
4 ■ 総合健診 (人間ドック)	59
5 ■ 集団の健康管理	60
6 ■ 健康管理担当者セミナー	61

7 ■ クリニックにおけるドックの特徴と看護師の役割・62	
8 ■ システム開発・62	
9 ■ 食事栄養相談・63	
10 ■ 禁煙外来・64	
ピースハウス病院 (ホスピス)	65
1 ■ 診療・65	
2 ■ ケア・66	
3 ■ ボランティア活動・67	
ピースハウスホスピス教育研究所	70
1 ■ 活動の全体像・70	
2 ■ 教育研究活動の実際・71	
3 ■ 学会等参加活動・73	
4 ■ 「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として・74	
訪問看護ステーション千代田	75
1 ■ 看護師人員とその影響・75	
2 ■ 訪問看護業務・76	
訪問看護ステーション中井	80
1 ■ 訪問看護利用者の状況と利用状況・80	
2 ■ がん末期の利用者について・82	
3 ■ 居宅介護支援・82	
4 ■ その他・82	
学会参加活動	83
会 員	84
1 ■ 健康教育サービスセンター会員・84	
2 ■ 健康教育サービスセンター団体会員・84	
3 ■ 団体維持会員・84	
4 ■ 個人維持会員・84	
5 ■ 2008年度「維持会員の集い」から・85	
6 ■ 「新老人の会」会員の動向・86	
役 員	87
財団報告	88
1 ■ 評議員会・理事会報告・88	
2 ■ 寄附・89	
3 ■ ピースハウス友の会・89	
4 ■ 第23回 LPC バザー・89	
5 ■ 第25回 LPC 美術展・90	
6 ■ 『研究業績年報(2007)』(28) の発行・90	
7 ■ memento mori 2008の開催・90	
8 ■ ボランティアグループの活動・91	
9 ■ LPC ボランティア研修会・92	
10 ■ ボランティア表彰式・93	

はしがき

理事長 日野原 重明

当財団の活動拠点は、それぞれ三田の笹川記念会館に「本部」と「クリニック」、平河町の砂防会館に「健康教育サービスセンター」「新老人の会」と「訪問看護ステーション千代田」が、そして神奈川県中井町に「ピースハウス病院」と「訪問看護ステーション中井」というように3カ所に分散しており、その活動内容もそれぞれです。それが財団（＝ライフ）という一本の木の幹の枝葉として豊かに繁茂することを頭に描きつつ、私は理事長として設立以来35年間を牽引してきました。財団のそれぞれの活動は、毎月一度早朝にもたれる各部門の代表者からなる「連絡会議」によって討議が行われ、同じく毎月発行される『コミュニケーション』と題する財団機関紙によって互いに情報を確認しあいます。具体的な事業の推進はそれぞれの部門の責任者とそのスタッフに大幅に委任していますが、職員スタッフが財団のめざすところをよく理解して日々取り組んでいることを、2008年度の『年報』からお読み取りいただければ幸いです。

さて、2008年度は、ピースハウス病院が設立15年を迎えた年でもありました。先の『コミュニケーション』に掲載される「ピースハウス病院通信」や「訪問看護中井通信」には、周辺を彩る美しい自然描写が書き添えられています。4月は「花桃」、6月は「ケヤキとエノキ」、11月は「紅葉した木々や黄色い菊やパンジー」、そして「キッチン富士見」からの眺め……。ビルの建ち並んだ「三田」や「砂防」の職員は、その一文から四季の変化を感じ取ります。1993年の開設当時には耳新しかった「ホスピス」や「緩和ケア」という言葉もすっかり定着した観があります。2008年度、健康教育サービスセンターが実施した「LPC 国際フォーラム」で取り上げた「終末期医療・介護の倫理問題にどう取り組むのか」の場で論じられたように、ホスピスや緩和ケア病棟がケアの対象とする疾病は「終末期のQOL」として広く扱われるべきであって、今後、ピースハウス病院のみならずクリニックや健康教育の場においてもその視点を含めて展開していかなければならないと考えています。

「健康教育サービスセンター」の事業として、2008年度もブラジルのサンパウロ日本人学校、台湾の日本人小学校を含め、30校で「いのちの授業」を行いました。このたび2007年度に東京・世田谷区立八幡小学校での授業の様様を中心にDVD『十歳のきみへ - いのちの授業』がまとめられました。これは企画制作した私どもの姉妹財団笹川医学医療研究財団から希望されるところには無料でレンタルされることになっていますし、また私どもの財団から実費で頒布しています。

また、「新老人の会」も「実験的取り組み」を提言する当財団のあり方に即して、軌道修正を加えつつ2008年10月から9年目の足跡を刻み始めました。全国に順調に地方支部も誕生し、各支部主催の記念フォーラムも盛大に開催され、全国31カ所で開催された講演会には3万2,892名もの方々がお集まりくださいました。会員も8,424名。年齢層もサポート会員、ジュニア会員、シニア会員と各層がそれぞれ厚みを増し、今後の活動の展開が期待されます。

なお、1999年8月より日本財団主催のホスピスセミナー「memento mori（死を思え）」を笹川医学医療研究財団との共催で今年度まで10年間にわたり全国30カ所まで延べ30回

実施してきました。私はいずれの回も多彩なゲストとともに講演をいたしました。この10年間の成果はいずれ何かの形で報告したいと考えております。

財団の一つひとつの事業は、このように「よりよく生きる」という財団の掲げる目標に収斂されていきます。

今後、なお一層それぞれの部署の連携を強くし、地中深くしっかりと根を張った太い幹から伸びる枝葉がひと周りもふた周りも大きく育ち繁るように、関係者のみなさまのお力添えをぜひともお願いしたいと思います。

2009年 5月

ライフ・プランニング・センターのあゆみ

* 1973年度から2003年度までの年表は「財団法人ライフ・プランニング・センター30年の軌跡 - 私たちは何を指して歩んできたか」に詳述しましたので、本年報ではその間のあゆみを略記しました。

年	月 日	事 項
1973	4. 3	財団法人ライフ・プランニング・センターが厚生省より公益法人として認可取得
	4. 19	附属診療所アイピーシークリニック，東京都麹町保健所より開設許可取得
1974	4. 20	財団設立1周年記念講演会開催（以降毎年開催）
1975	5. 24	アイピーシークリニックを笹川記念会館に移転
	7. 3 - 5	第1回「医療と教育に関する国際セミナー」を開催（以降1996年まで毎年開催）
	10. 1	砂防会館に健康教育サービスセンターを開設
	12.	機関誌「教育医療」発行開始
1976	7. 5 - 16	第1回「国際ワークショップ」を開催（以降毎年開催，1997年より国際セミナーと統合）
	9. 20	平塚富士見カントリークラブ内にフジカントリークリニックを開設
1977	7. 1	アイピーシークリニックをライフ・プランニング・クリニックと改称
	8. 24	第1回「LP会員の集い」を開催（以降毎年開催）
1979	2. 18	第1回「医療におけるPOSシンポジウム」を開催（「日本POS医療学会」として独立）
	3. 3	「たばこをやめよう会」スタート
1980	2. 2	米国で開発されたハーベイシミュレーターを日本で初めて設置，心音教育プログラムスタート（1999年5月に新しいハーベイシミュレーターを設置）
1981	9. 10	血圧測定師範コースを開講
	10. 16	「健康ダイヤルプロジェクト事業部」発足
1982	4. 1	「医療におけるボランティアの育成指導」事業開始
1983	11. 7	WHO事務総長ハーフダン・マラー博士を招聘，「生命・保健・医療シンポジウム」を開催
1984	3. 1	笹川記念会館10階にLP健康教育センターを新設，運動療法の指導を開始
1985	12. 1	「ピースハウス（ホスピス）準備室」を設置
1986	2. 5	第1回「ボランティア総会」開催
1987	10. 1	笹川記念会館の11階を拡張，10階のLP健康教育センターを移転
1989	4. 20	ピースハウス後援会解散，募金2億5,989万円をピースハウス建設資金として財団が継承
1991	9. 15	神奈川県中井町にピースハウス建設予定地約2,000坪の賃貸借契約締結
1992	2. 3	神奈川県医療審議会，ピースハウス建設を了承
	3. 31	ピースハウス開設にかかわる寄付行為を改正，厚生省の認可取得
	6. 24	ピースハウス病院，神奈川県の開設許可取得
	11. 2	ピースハウス病院，建築確認取得・着工
1993	4. 19	ライフ・プランニング・クリニック，新コンピュータシステムテストラン開始，5月6日，本稼働開始
	5. 15	財団設立20周年記念講演会「心とからだの健康問題のカギ」をシェーンバッハ砂防で開催
	8. 27	ピースハウス病院竣工式
	9. 23	ピースハウス病院開院式および創立20周年記念式典をピースハウス病院で開催
	12. 28 - 30	第1回ホスピス国際ワークショップ「末期癌患者の疼痛緩和および症状のコントロール」をピースハウスホスピス教育研究所で開催（以降毎年開催）
1994	1. 18	創立20周年記念職員祝賀会を笹川記念会館で開催

年	月 日	事 項
	2 . 1	ピースハウス病院, 厚生省より緩和ケア病棟認可, 神奈川県より基準看護, 基準給食, 基準寝具承認取得
	4 . 16	第20回財団設立記念講演会「人間理解とコミュニケーション」をシェーンバツハ砂防で開催
	9 . 23	ピースハウスホスピス開院 1周年記念式典開催
1995	3 . 3 - 5	第1回アジア・太平洋地域ホスピス連絡協議会を国際連合大学で開催
	5 . 13	第21回財団設立記念講演会「患者は医療者から何を学び, 医療者は患者から何を学ぶべきか」をシェーンバツハ砂防で開催
1996	5 . 18	第22回財団設立記念講演会「医療と福祉の接点」をシェーンバツハ砂防で開催
1997	5 . 17	第23回財団設立記念講演会「今日を鮮かに生きぬく」を聖路加看護大学で開催
	11 . 13	砂防会館内に「訪問看護ステーション千代田」を開設
1998	5 . 16	第24回財団設立記念講演会「私たちが伝えたいこと, 遺したいこと」を千代田区公会堂で開催
1999	4 . 1	神奈川県足柄上郡中井町に「訪問看護ステーション中井」を開設
	5 . 15	第25回財団設立記念講演会「老いの季節...魂の輝きのとき」を千代田区公会堂で開催
	8 . 21	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 長崎1999」を長崎ブリックホールで笹川医学医療研究財団と共催
2000	5 . 20	第26回財団設立記念講演会「明日をつくる介護」を千代田区公会堂で開催
	9 . 24	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 香川2000」を高松市民会館で笹川医学医療研究財団と共催
	9 . 30	「新老人の会」発足。発足記念講演会「輝きのある人生をどのようにして獲得するか」を聖路加看護大学で開催
	10 . 17	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 静岡2000」を浜名湖競艇場で笹川医学医療研究財団と共催
2001	2 . 23	厚生労働省から評議員会の設置が認可された評議員会設置等に係る寄附行為変更について, 厚生労働省の認可を取得
	5 . 19	第27回財団設立記念講演会「伝えたい日本人の文化と心」を千代田区公会堂で開催
	8 . 9	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 三重2001 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を津競艇場「ツッキードーム」で笹川医学医療研究財団と共催
	8 . 18 - 19	音楽劇「2001フレディ - いのちの旅 -」東京公演を五反田ゆうぼうとで開催
	8 . 22	音楽劇「2001フレディ - いのちの旅 -」大阪公演を大阪フェスティバルホールで開催
	10 . 7	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 宮城2001 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を仙台国際センターで笹川医学医療研究財団と共催
	10 . 8	「新老人の会」設立 1周年フォーラム「『いのち』を謳う」を千代田区公会堂で開催
2002	6 . 2	日本財団主催セミナー「memento mori 北海道2002 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を旭川市民文化会館で笹川医学医療研究財団と共催
	6 . 22	日本財団主催セミナー「memento mori 広島2002 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を宮島競艇場イベントホールで笹川医学医療研究財団と共催
	6 . 29	第28回財団設立記念講演会「いのちを語る——生と死をささえて語り継ぎたいもの」を千代田区公会堂で開催
	9 . 29	「新老人の会」設立 2周年フォーラム
2003	3 . 31	フジカントリークリニックを閉鎖
	6 . 7	ホスピスセミナー「memento mori 島根 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を松江市総合文化センターで日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	6 . 11	財団設立30周年記念講演会「魂の健康・からだの健康」並びに30周年記念式典・感謝会を笹川記念会館で開催
	7 . 6	ホスピスセミナー「memento mori 埼玉 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を戸田市戸田競艇場で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催

年	月 日	事 項
	8. 9 - 10	LPC 国際フォーラム「高齢者医療の新しい展開 - 健康の維持, 増進から終末期医療まで -」を聖路加看護大学で開催
	8. 31	ホスピスセミナー「memento mori 富山 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を富山国際会議場で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	9. 13	「新老人の会」設立3周年フォーラム「21世紀を“いのちの時代”へ」を千代田区公会堂で開催
	9. 20	ホスピスセミナー「memento mori 山口 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を下関市下関競艇場で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	10. 5	ピースハウスホスピス開設10周年記念講演会をラディアン(二宮町生涯学習センター)で開催
2004	2. 14 - 15	第11回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケア その実践と教育 - ニュージーランドとの交流 -」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 29	財団設立記念講演会「心に響く日本の言葉と音楽」を千代田区公会堂で開催
	6. 19	セミナー「memento mori 青森 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」をぱ・る・るプラザ青森で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	7. 4	セミナー「memento mori 福岡 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を若松競艇場で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	8. 28 - 29	LPC 国際フォーラム「ナースによるフィジカルアセスメントの実践」を聖路加看護大学で開催
	9. 11	第2回全国模擬患者学研究大会「模擬患者学の目指すもの」を聖路加看護大学で開催
	9. 19	セミナー「memento mori 滋賀 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を滋賀会館で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	10. 30	セミナー「memento mori 新潟 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を新潟テルサで日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	11. 16	「新老人の会」設立4周年秋季特別フォーラムを赤坂区民センターで開催
2005	2. 11 - 12	第12回ホスピス国際ワークショップをピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 8	財団設立記念講演会「今こそいのちの問題を考えよう」を銀座プロッサム(中央会館)で開催
	6. 26	セミナー「memento mori 福井 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を福井県民会館で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	7. 23	セミナー「memento mori 宮崎 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を宮崎市民プラザで日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	8. 6	LPC 国際フォーラム・全国模擬患者研究大会合同企画「医学・看護教育における模擬患者の活用」を聖路加看護大学で開催
	9. 17	セミナー「memento mori 徳島 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を鳴門市文化会館で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	10. 9	セミナー「memento mori 山梨 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を山梨県民文化ホールで日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	10. 15	「新老人の会」設立5周年フォーラムを銀座プロッサム(中央会館)で開催
2006	2. 4 - 5	第13回ホスピス国際ワークショップ「緩和ケアの可能性 - 特別な場所・対象を越えて -」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 27	財団設立記念講演会「私たちが, いま呼びかけるおとなから子供たちへ——いのちの循環へのメッセージ」を銀座プロッサム(中央会館)で開催
	6. 17	セミナー「memento mori 岩手 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を岩手教育会館で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	7. 8 - 9	LPC 国際フォーラム「マックマスター大学に学ぶ医師, 看護師, 医療従事者のための臨床実践能力の教育方略と評価」を女性と仕事の未来館ホールで開催
	7. 22	セミナー「memento mori 岡山 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を倉敷市児島文化センターで日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	9. 23	セミナー「memento mori 兵庫 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる -」を兵庫県看護協会と日本

年	月 日	事 項
	10. 7	財団、笹川医学医療研究財団と共催 セミナー「memento mori 栃木 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を栃木県教育会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	10. 22	「新老人の会」設立6周年フォーラムをシェーンバッハ砂防で開催
2007	2. 3 - 4	第14回ホスピス国際ワークショップ「エンドオブライフケアと尊厳」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	3. 22	ホスピスデイケアセンター竣工式を執り行う
	4. 22	日本財団主催セミナー「memento mori 広島 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を広島エリザベト音楽大学セシリアホールで笹川医学医療研究財団、「新老人の会」山陽支部、広島女学院、シュバイツァー日本友の会と共催
	6. 2	財団設立記念講演会「いのちの語らい - 生かされて今を生きる」を日本財団主催セミナー「memento mori 東京」を兼ねて東京国際フォーラムC会場で笹川医学医療研究財団と共催
	6. 16	日本財団主催セミナー「memento mori 埼玉 - 『今』を生きる～いのちを学び、いのちを伝える～」を秩父市歴史文化伝承館で笹川医学医療研究財団と共催
	7. 18 - 19	「新老人の会・あがたの森ジャンボリー」を松本市で開催
	7. 21	日本財団主催セミナー「memento mori 石川 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を金沢市文化ホールで笹川医学医療研究財団と共催
	8. 10 - 11	LPC 国際フォーラム「いのちの畏敬と生命倫理 - 医療・看護の現場で求められるもの -」を女性と仕事の未来館で開催
	10. 14	日本財団主催セミナー「memento mori 秋田 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を秋田市文化会館で笹川医学医療研究財団と共催
	11. 11	「新老人の会」設立7周年フォーラムをシェーンバッハ砂防で開催
2008	2. 2 - 3	第15回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケア 東洋と西洋の対話 - スピリチュアリティと倫理に焦点をあてて -」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 11	日本財団主催セミナー「memento mori 鳥取 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を鳥取市民会館で笹川医学医療研究財団と共催
	5. 31	第35回財団設立記念講演会「豊かに老いを生きる」を笹川記念会館国際会議場で開催
	7. 4 - 5	「新老人の会」第2回ジャンボリー静岡大会「新老人が若い人とどう手をつなぐか」を浜松市で開催
	8. 2 - 3	LPC 国際フォーラム「終末期医療の倫理問題にどう取り組むか - 看護・介護・医療におけるQOL -」を女性と仕事の未来館で開催
	10. 12	日本財団主催セミナー「memento mori 長崎 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を長崎・浦上天主堂で笹川医学医療研究財団と共催
	10. 18	「新老人の会」設立8周年フォーラム「共に力を合わせて生きるために」をシェーンバッハ砂防で開催
2009	2. 7 - 8	第16回ホスピス国際ワークショップ「エンド・オブ・ライフ（終末期）ケアの実践」をピースハウスホスピス教育研究所で開催

健康教育活動

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

当財団の大きな活動の柱の一つは健康教育の分野である。財団が発足した1973年当時、血圧測定はまだ医師の手にまかされており、一般の人が自分の血圧とはいえ、聴診器を使いながら血圧を測定するなどは考えられないことであった。医療関係者の賛同が得られないまま、「健康の自主管理」を掲げる当財団にとって、自分で自分の身体情報を入手し、それに基づいて自分の健康を管理するのは当然のことであった。

財団設立時の1973年当時は、健康の維持・管理、あるいは疾患の予防や治療は、行政や医療専門家に任せておけばよいことで、医療知識のない一般の人たちが自主的に関わることなどは考えられないことであった。しかし、今や健康づくりは「人びとが自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである」というオタワ憲章（第1回ヘルスプロモーション世界会議・1986年）に定められたように、個人が健康的な生活を送ることができるスキルや能力を高めることは各自の務めとされるようになった。その間、わが国においても数々の健康施策が提出されたが、新世紀を迎えるに当たって国によって策定された「21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）」は、まさに当財団が設立時に掲げた「がん・心臓病・脳卒中・糖尿病などの生活習慣病に関する」個人レベルで健康づくりに取り組むことを掲げたものといえよう。

また、近年、ヘルスリテラシー（Health Literacy = 一般の人々が健康に関する適切な決断をする際に必要とする基本的な健康情報や種々の健康サービスについて理解する能力）の概念が、ヘルスプロモーションの分野で浸透してきた。この新しい考え方によると、「情報を得るための選択をし、健康リスクを減少させ、生活の質を向上させるための健康情報と考え方を探し、理解し、評価して利用できる、生涯を通して発達する幅広い範囲のスキルと能力」というように、さらに個人に求める能力の範囲は広がっている。

当財団の健康教育サービスセンターにおいて行ってきた活動は、専門家による血圧の測定法の指導から、ホーム・ケア・アソシエイト（家庭看護）講座で行ってきた家族や自分の健康管理や看護・介護ケアなどの専門知識や技術の教育、さらに高齢者自身が意欲的に自分の人生をデザインする「リビングウィル・ワークショップ」

「エンド・オブ・ライフのための講座」などへと広がってきた。1987年から始められた日野原理事長による主として小学生を対象とした「いのちの授業」の実施に加え、新老人世代が自分たちのエンド・オブ・ライフをデザインするなど、高齢社会と対峙するための健康サポートを行うなど、これからもヘルスプロモーション活動の先導的な役割を担っていきたい。

I 第35回財団設立記念講演会 エイジズムを超えて - 年齢によって差別しない社会を

日時 5月31日(土) 13時30分～16時30分

会場 笹川記念会館国際会議場

参加者数 862名

プログラム

開会のことば

.....道場 信孝 (LPC 健康教育部最高顧問)

講演 生涯現役社会の条件

.....清家 篤 (慶応大学商学部教授)

講演 心と体のすこやかさを保つために

.....日野原重明 (当財団理事長)

ミニコンサート ハンドベル演奏

.....ハンドベルサークル・メイリリイ

清家篤先生講演要旨

「生涯現役」というのは、年齢を重ねても自立しており、他の人からも頼りにされる存在であるということが出来る。しかし、そのように生きるためには社会や私たちの行動の仕組みを変えていくことを考えなければならない。また、若いときよりの蓄えも大切である。収入やお金など経済的な蓄えも重要だが、趣味や健康など自分自身の中に蓄えを持つこと、人と人のつながりの中に蓄えを持つことで、長距離人生を豊かに生き抜くことができると思われる。

日野原重明理事長講演要旨

「自分と家族の健康を守ること」「生涯を通じて心身ともに健康であること」が財団設立時のテーマであるが、一方で、ひとは生まれた時より死の遺伝子を持っている存在である。完全な健康などは誰にも望めないことで、



講師の清家篤先生に
花束を渡す日野原理
事長

病や障害を持っていても、よりよく生きることは可能である。それを生み出すためにどのように自らの環境を整えていくかを考えていきたい。

2 いのちの教室活動

本年度も国内外をあわせて30回、延べ7,149名の小学校高学年の生徒を中心に「いのちの授業」を行った。

4月には、四国の3カ所の会場で日野原理事長が2008年1月より活動を展開しているジョン万次郎が住んだ米国フェアヘブーンにある旧宅の保存のための活動にテーマを得て、土佐清水市・宿毛市・高知市安芸中学高等学校など、万次郎ゆかりの地域での小中高生1,600人を越える生徒に、「郷土の偉人である万次郎に学べ」と題した「いのちの講演会」を行った。

海外では、台湾の日本人小学校、ブラジルの日本人小学校の在校生を対象に授業を行った。

ブラジルおよび台湾の日本人学校でのいのちの授業

台湾・台北日本人学校120名、およびサンパウロ市内にある日本人学校の全校生160名とその保護者に「いのちの授業」を行った。生徒たちから日常の時間の使い方を聞き出し、自分の持っている時間を他人のために使えるかなどと、生徒たちと対話しながら「いのちの大切さ」と「その大切ないのちをどう使うか」について対話を進めた。

メメント・モリ 「いのちの授業」ワークショップ

2007年度のメメント・モリ事業の一環として日野原重明理事長の「いのちの授業」がDVD（文部科学省選定）に収録された。これを契機に、このDVDを介して、「いのちの授業」が多くの方々の手に渡り広まっていくことを目的として、「いのちの授業」ワークショップが下記の内容で開催された。

日 時 2008年6月7日(土) 10時30分～17時

会 場 日本財団ビル（東京都港区赤坂）

対 象 小学校教育関係者（教諭・教員養成大学教育者）

受講者数 47名

プログラム

講演 いのちのリレー - こどもたちにいのちの形をつたえる -

.....日野原重明（聖路加国際病院理事長）

映像鑑賞 いのちの授業 - 十歳の君へ

講演 教育の現場で伝えるいのちのこと

.....中村 洋志（元鹿児島市立田上小学校校長）

グループワーク

いのちの授業づくり・学びづくりについて共に考えよう

いのちの授業を素材にしてあなたならば

ファシリテータ：浅川 陽子（お茶の水女子大学附属小学校教諭 5年生担任）

グループワーク・ファシリテータ：

荻宿 俊文（青山学院大学）

ディスカッション

1987年にはじめて「いのちの授業」を行って以来、100校近い全国の小学校で「いのち」について授業をしてこられた日野原重明理事長の講演を中心に、教育現場にいる教師の参加を募り学習会を持った。都内を中心とした全国から関係者が集まり、グループワークでは熱心なディスカッションも交わされた。ファシリテータを務めた浅川陽子教諭は、「いのちの大切さを考える上で避けて通れないのは死であり、生と死を教育現場でどう伝えていくかに教師は苦慮している。生と死を子どもたちに教えていくについては決まった答えはなく、それぞれの立場からのアプローチによってなされていくものである。かつては家庭や地域の中で人の死に遭遇しながら自然に死に触れ、受け入れていったが、現在ではそれは難しい。このテーマは祖父母、親、教師が連携しながら取り組んでいかなければならない」とワークショップを締めくくった。

（財）ライフ・プランニング・センターが企画制作協力した「十歳のきみへ - いのちの授業」

監督 今泉文子

制作 U. N. Limited 2007年 / 17分

本作品は、平成20年度（第6回）文化庁文化記録映画部門で文化記録映画優秀賞を受賞した。

2008年度「いのちの授業」訪問学校一覧

No.	学校名	都市・地方名								海外	受講生数	保護者
		九州	中国	四国	近畿	中部	関東	東北	北海道	国名		
1	土佐清水市小中高生			高知							864	
2	宿毛市小中高生			高知							800	市民
3	高知県立安芸中学・高校			高知							500	
4	台北日本人学校									台湾	120	
5	弘前市立大成小学校							青森			70	若干
6	萩市立明倫小学校		山口								141	講演会
7	学校法人昇華学園小学校						東京				80	
8	金沢市立浅野小学校					石川					60	
9	恵庭市立恵み野旭小学校								恵庭		95	全校
10	四日市市立内部小学校					三重					100	
11	チャリティー文化講演会						千葉				200	
12	アカマ学院・サンパウロ日本人学校									ブラジル	150	
13	仙台市立杉山通小学校							宮城			130	32
14	福島市立森合小学校							福島			179	
15	江東区立平久小学校						東京				70	100
16	目黒区立烏森小学校						東京				153	50
17	江戸川学園中学高校						千葉				1,200	
18	佐世保市立早岐小学校	長崎									112	
19	岡崎市立六名小学校					愛知					709	300
20	東京女学館小学校						東京				130	
21	京田辺市立大住小学校				京都						60	30
22	世田谷区立玉川小学校						東京				60	200
23	川崎市立桜本小学校						神奈川				128	80
24	目黒区立中根小学校						東京				394	80
25	八王子市立山田小学校						東京				99	
26	世田谷区立深沢小学校						東京				120	200
27	福岡市立能古小学校	福岡									40	30
28	中央区立日本橋小学校						東京				235	100
29	杉並区立四宮小学校						東京				120	100
30	宮城県北部小学生							宮城			30	30

30校延べ受講生7,149名

3 専門職セミナー・講演会

1) 講座「基礎から学ぶフィジカルアセスメント」(連続8回)

第1回：バイタルサインの異常からアセスメントできること

日時 2008年6月14日(土) 10時～16時

講師 徳田 安春 (聖路加国際病院内科, 聖ルカライフサイエンス研究所副所長)

受講者数 60名

第2回：主な呼吸器症状からアセスメントできること

日時 6月28日(土) 10時～16時

講師 馬島 徹 (化研病院呼吸器センター長, 国際医療福祉大学教授)

受講者数 59名

第3回：基礎から学ぶ循環器

日時 10月25日(土) 10時～16時

講師 富山 博 (東京医科大学病院循環器科助教授)

受講者数 53名

第4回：看護カウンセリングとカウンセリング実践

日時 11月 8日(土) 10時～16時

講師 広瀬 寛子 (戸田中央病院看護カウンセリング室)

講師 宮本 真巳 (東京医科歯科大学)

受講者数 37名

第5回：認知症高齢者の理解と認知症ケア

日時 11月15日(土) 10時～16時

講師 吉井 文均 (東海大学医学部教授)

竹中 星郎 (元浴風会病院副院長)

受講者数 66名

第6回：医療リンパドレナージ

日時 2009年1月17日 10時～16時

講師 佐藤 佳代子 (後藤学園)

受講者数 66名

日野原重明理事長は既に30年前よりこれからのナースに必要なのはフィジカルアセスメント能力であり、ナースがもっと積極的に診断に参加すべきであると提唱してきた。しかしながらナースの教育にフィジカルアセスメントが取り上げられるようになったのは1980年代に入り、在宅医療や臨床の現場でナース独自の判断を専門家として問われるようになってからである。在宅医療の現場でナースは主治医や介護者、家族などとチームを組んでケアにあたり、患者の病態の変化に臨機応変に対応しなければならないからである。

フィジカルアセスメント能力はインタビュー、身体所見などから得られた情報を統合して分析査定する知識と技術であり、そのようなフィジカルアセスメントに基づくナースの判断能力は患者によりよいケアを提供するためには不可欠である。

当センターでは1996年にナースのフィジカルアセスメント能力の向上を目標に「在宅ケアに必要なフィジカルアセスメントとケアの実際」と題して訪問看護に携わるナースや臨床ナース向けに平日の夜間の講座を7年間継続実施してきた。開講当初はナースのための継続教育が行われているところも少なかったために受講生も多く集まったが、現在は日本看護協会などがさまざまな教育プログラムをナースに提供しており、2004年度以降徐々に当講座への参加者は減少してきているようになった。そこで内容を変更し、疾患中心の講義から、症候中心の講義にする、体験的学習ができるように前半を講義、後半を実習にする、開催を夜間ではなく土・日に行う、などとし、タイトルも新しく「基礎から学ぶフィジカルアセスメント」として開講した。

2008年度は春の講座として5月に3回、秋の講座として11月に2回、冬の講座として1月に1回、計6回開催した。いずれも土・日の開催としたため、参加者も多く、またどの講座も前半を講義、後半を模擬患者やハーベイなどシミュレーターを駆使しての実習を中心とした学習形態とし、受講生にとって満足度の高い内容となった。

講師陣は毎年臨床の第一線で活躍中の医師を揃え、どの講師も独自の資料を用意されるなど、熱心に講義、指導していただいた。

2) 地方看護セミナー

テーマ 新時代のナースに求められるフィジカルアセスメント

日時 2009年2月14日(土) 13時～16時30分

会場 ナースプラザ福岡

講師 日野原重明、徳田 安春

受講者数 463名

看護職を対象にした上記セミナーを福岡市で開催した。昨年度好評であった日野原重明理事長と徳田安春先生のセミナーを継続して行った。

日野原理事長は、現在の看護は誤った固定概念がブレーキとなって非合理的な教育が続いており、早急に革新されなければならないと力説された。基礎看護学がまだに古い非効率的な方法で教えられていること、先輩から古い知識や技術が再検討されることなく若手に伝授されていることは大きな問題であると指摘された。一例として「死後の処置」について挙げ、亡くなった方の鼻孔に綿をつめたりする習慣は日本だけのものであること、また「安静の害」についても言及され、風邪を引いたら入浴を控えさせたりするのはエビデンスのないことで、病気の間に使わなかった諸器官によってかえって病気の治癒を遅らせていることが少なくないと述べられた。いかに日常行われている看護が古い概念のまま訂正されずに今日まで続いているかを指摘された。受講生の1人は今まで疑問にも思わないことなので「目からうろこが落ちた」「看護の役割を自分なりにもう一度考えてみたい」などの感想が寄せられた。また、現在社会問題となっている医師不足についても触れ、ナースがフィジカルアセスメント能力を身に付け、診断に参加して小児科の専門ナースとして働いたり、助産師が主体的に出産に携わることで医師不足を解消されるのではないかと看護師の診断技能の向上を期待すると述べられた。

聖路加国際病院内科副医長の徳田安春先生は「バイタルサインの異常からアセスメントできること」について講義した。クエスチョン・アンド・アンサーで日常的に遭遇する血圧の異常、体温の上昇、脈拍の異常などから何がアセスメントできるか、何を観察したらよいかなどを学習した。受講生から「バイタルサインからのアセスメントの大切さがわかりました。日々努めていきたいと思います」などの評価を受けた。

両講師から多くの刺激を受けたセミナーであった。

4 一般セミナー

1) 脳梗塞を葉酸で防ぎましょう

日 時 2008年4月8日(火) 13時30分～15時30分
講 師 香川 靖雄 (女子栄養大学副学長)
受講者数 66名

香川靖雄先生講義要旨

日本の寝たきり高齢者の最大の原因は脳梗塞で、これに認知症が伴うことが多い。米国では10年前から穀類に葉酸を強制的に添加するようになって、この間3億人も脳卒中死亡者が減少している。米国の成功例に見習い、各国では葉酸の推奨量を日本の約2倍の400 μ gに増加させる葉酸摂取の強化対策をとり始めた。日本では葉酸の供給源の葉菜の摂取が減った上に、人口の15%に特に脳梗塞、認知症を起ししやすい遺伝子の多型者がみられる。

また、香川講師は、特別に葉酸の推奨量を400 μ gに上げ、葉酸の入った食品の摂取によって市民の血清葉酸を安全なレベルに改善した坂戸市の例も紹介された。

2) 脳を知り、脳を鍛える

日 時 2008年5月14日(水) 13時～15時
講 師 板倉 徹 (和歌山県立医科大学脳神経外科教授)
日野原重明 (当財団理事長)
受講者数 66名

板倉徹先生講義要旨

若々しい脳を保つには、固定観念にとらわれず活動的かつ積極的な生活が大切である。健康高齢者の生活に学ぶと、1) よく歩く。エレベーターやエスカレーターを使わない、2) よく本を読む、3) 食べ過ぎない、4) 常に前向き、5) 過ぎ去ったことにくよくよしない、6) 芸術に親しむ、などがあげられる。

脳を鍛える方法としては、1) 語想起、2) ひらがなパラパラ、3) 漢字パラパラなどの方法がある。また成人の脳にも万能細胞があり、刺激を与えることでその部分の脳細胞が増える可能性があるといわれている。

3) 新しい自己発見 - あなたはどのような人にみられたいですか

日 時 2008年6月13日(金) 13時30分～16時
講 師 丸屋 真也 (IIMF 家族・結婚研究所相談室長)

受講者数 68名

丸屋真也先生講義要旨

私たちは誰もセルフイメージを持っており、その一方で人からどう見られたいかも意識している。また、これまでの生き方を変えるには今までの自己を解き放ち、新しい自己を作り上げなければならない。しかし、その障害となるのは、他人からの承認を期待し、完璧な行いを望んだり、常に自分の思うようにことが運ぶことを望む自分の信念である。新しい自己形成のためには、その傾向に自分自身が気づくことが必要であり、これには体験によって心と頭の認識のギャップを埋めることである。真の自己に気づくことにより、人はいきいきと生きることができる。

4) あなたの最期の想いを残しておきませんか

日 時 2008年7月18日(金) 13時30分～15時30分
講 師 鶴若 麻理 (聖路加看護大学助教)
受講者数 59名

鶴若麻理先生講義要旨

本ワークショップでは、リビングウィルについての疑問や問題点を出し合い、既存のリビングウィルの形式にこだわることなく、よりよいリビングウィルのあり方を共に考えることを目的とした。参加者には、個人ワークとして、1) 残しておきたい想い(終末期医療への希望以外)、2) 延命治療をしてほしくない状態、3) 延命治療をしてほしくない理由、4) 延命治療とは、を考えてもらった。その後、5) 『尊厳死の宣言書』(日本尊厳死協会)書式で検討すべき点、6) リビングウィルを残すメリットや問題点、7) リビングウィルを残す上で悩むこと、についてグループワークをした。

個人ワークやグループワークから、多くの人々が自分の終末期医療がどのような形で行われるのかについて関心を抱き、自分の意思で選択決定をしたい意向が強いことがうかがわれた。また、財産分与、葬儀、墓のこと、終末期の医療の希望ばかりでなく、残された人々へ感謝の気持ちを伝えること、自分の生き様を残すことへの関心も高い。その一方、誰に相談し、どのように残したらいいのか、家族と話し合うことの躊躇や不十分さ、延命治療を具体的に想像する難しさが浮き彫りになった。

超高齢社会を迎えた日本の終末期医療において、リビングウィルはもろろんのこと、本人の意思を代理する人

を委任する法律や手続きの整備が望まれる。

5) いのちの源それは農業です

日 時 9月29日(月) 14時~16時
講 師 加藤 達人 (日本農業実践学園学園長)
受講者数 26名

加藤達人先生講演要旨

農業者の育成に30年以上も関わってきた加藤講師が、命と直結する農業の現状について話された。加藤講師は自分の命に繋がる食べ物が、どこで、誰が、どのように作っているのかについてもっと国民が関心を払い、食物を海外に頼るわが国の危うさを自覚してほしいと力説された。

6) ブラークコントロールで守るトータルな健康

日 時 2008年10月8日(水) 13時30分~15時30分
講 師 辰巳 順一 (明海大学歯学部教授)
受講者数 25名

辰巳順一先生講演要旨

成人の10人に8人は「歯周病」に罹患しているといわれ、歯を失う最大の原因とされながら、その予防については意外と知られていない。歯周病の原因はプラークという細菌の塊であり、それ以外には全身的な問題である内科的疾患、ホルモンのアンバランス、薬物、喫煙、栄養状態などがある。そのほか社会的要因である健康意識や経済状況も関わっている。歯周病を放置すると心臓病になったりすることもあり、また、糖尿病を放置することで歯周病が悪化するなど、全身症状との関係が深いと指摘された。

7) 怒りのセルフコントロール

日 時 2008年11月21日(金) 13時30分~16時
講 師 丸屋 真也 (IIMF 家族・結婚研究所相談室長)
受講者数 45名

丸屋真也先生講演要旨

私たちの社会で起こっている事件の多くが感情の暴発が関係しているといわれる。身近な人に向けられがちな感情の爆発の前に、これらをコントロールする方法について、丸屋講師は怒りの原因、怒りが及ぼす影響、怒りの経路、怒りのコントロールの必要性について系統的に

話された。怒りのレベルの第一段階は困惑として現れる。第二段階はイライラ感であり。第三段階では怒りあるいは感情の爆発として現れる。最後は激怒というところまでいくが、怒りの予防策としては、怒りは「芽」の段階で対処することである。

しかし、怒りの感情は大切なことでもあり正常な情動と認めなければならないということも覚えておかなければならない。

8) 健康生活スタイルの向上に私たちができること

日 時 2009年3月11日(水) 14時~16時
講 師 徳田 安春 (聖路加国際病院内科医長)
受講者数 46名

徳田安春先生講演要旨

沖縄県は男性・女性ともに世界1位の長寿を記録したことがあったが、男性は2000年には26位に転落した。調査によると戦後生まれの54歳未満の男女が全国の同世代よりも死亡率が高く、生活習慣病死亡率・罹患率がすべて全国ワースト10に入ることが明らかになった。

その原因は、沖縄における生活習慣、車社会による運動不足と欧米型食生活による脂肪とカロリーの過剰摂取で肥満になり、それらに高血圧も伴ってメタボリックシンドロームが増え、糖尿病・心臓病・脳卒中が発症する結果といわれている。

対策としては、1) 外食・加工食品のカロリー表示・減塩の義務化、2) 深夜12時以降スナックの営業禁止、3) タバコ税の引き上げ、4) タバコの自動販売機の禁止、5) 公共施設と飲食店内は禁煙、6) 消費者金融やギャンブルの規制などの社会的な戦略が考えられる。

9) 健やかな食と生活を考える勉強会(4回連続)

実施日 2008年5月23日・7月25日・9月19日・11月28日の4回 13時30分~15時30分

テーマ

- ・葉酸を多く取るための食事
- ・機能性食品の理解
- ・アンチエイジングとは
- ・食事・バランスガイドを使って
- ・国際栄養士学会でのトピックス
- ・食事が長寿と健康に及ぼす研究について
- ・世界健康フォーラム2008・横浜フォーラム「健康長寿は自らつくる」参加報告

世話人 松原 博義 (LPC 研究員)
富澤 淳子 (LP クリニック管理栄養士)
平野 真澄 (LPC 管理栄養士)
延べ参加者数 48名

勉強会要旨

食は私たちの身体を健全に保ちあるいは人生に彩りを与えてくれる存在でもある。新老人世代にとっての食生活は、それぞれの生き方を映すように多様で多彩なものであるとの考えのもと、ワークショップ形式で互いの経験や実践を語り合いながら、最新の栄養学から実生活での食事の摂りかたの工夫、食と人生などについて考える会を持った。

10) 健康講座「終末期 (End of Life=EOL) と健康」(6回連続, 延べ参加者数396名) 13時30分～15時30分
講師 道場 信孝 (LPC 研究教育部最高顧問)

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 9月30日 | 心身の機能低下と死への軌跡 (参加者数75名) |
| 10月14日 | 機能の低下はどのように評価されるか (参加者数60名) |
| 11月11日 | 機能低下の予防: その意義と問題点 (参加人数67名) |
| 12月16日 | EOL と医療: 高齢者の緩和ケア (参加者数64名) |
| 1月20日 | EOL と医療: 高齢者の終末期ケア (参加者数64名) |
| 2月17日 | EOL における医の倫理の問題: 経管栄養を中心にして (参加者数66名) |

講座要旨

2005年度と2007年度の2回にわたり高齢者の健康の維持・増進に関わる問題について、各10回の健康講座を行ってきた。

2008年度は終末期における健康の問題を6回の講座にまとめ、新しい視点で終末期 (End of Life=EOL) と健康について道場信孝講師が講義を持った。かつては、高齢者においては、発病と共に死が訪れることはまれではなかったが、21世紀の今日では死に至る軌跡は多様で、そのプロセスにおいては治癒を目的とする最先端の医療技術が施され、それとともに安らかな死を目指す緩和ケアも同時に開始されるなど、終末期のケアの内容は複雑で多様になってきている。そして、どのように健康評価

を受け、どのような治療を選択し、どのような死を迎えるのかの決断は、本人の自律性と尊厳性に基づき行われなければならない。そのためには死へのプロセスを理解し、そこで行われるケアの実態を知り、そして、どのような選択をするのが適切なかを個々人が考えておくことが大切である。

これらの問題の解決には正解はなく、安らかな良い死を求めるのであれば、それなりに周到な準備が必要である。そのような意味から、この講座の各単元で触れられた内容はきわめて先進的であり、受講生からも好評であった。

5 ホームヘルパー 2 級養成講座

本講座は、1976年にホームケア・アソシエイト (協働者) 養成講座として、家族の健康管理や家庭介護を担う人を養成する目的でスタートしたものである。その後、社会の変革に対応して、1993年からは内容の一部改訂を行い、厚生労働省の定めるホームヘルパー養成研修2級課程の指定が取得できるようにした。今年で32年目を終えた。

講師は、医療・介護・福祉の専門領域を代表する講師が担当している。

講座内容は『生涯を通してヘルスプランしそれを実行する』という従来のホームケア・アソシエイトの趣旨と精神を生かした独自のプログラムとして、「自己血圧測定」や「救急法」などを厚生労働省の定めるカリキュラムに加えた講義を実施した。

本年度の全課程は142.5時間 (施設実習30時間含む) であった。施設実習は例年通り、「練馬のキングスガーデン」で特別養護老人ホームとデイサービスのケアの体験を、「葉っぱのフレディヘルパーセンター」でヘルパーとの同行訪問が行われた。

本講座で修得する知識と技術は、訪問介護員として広く社会に活用できるばかりでなく、家族のためにも大いに役立つものと好評を得ている。

2008年度は定員20名の受講生でスタートした。そのうち男性3名、女性17名で、平均年齢53.75歳であった。

受講生の居住地は12名が東京都区内で、他は神奈川、埼玉、茨城からであった。

受講動機は「将来、家族・近親者の介護に携わっていただくため」が50%と一番高く、「介護ヘルパーとして働きたい」は17%であった。その他「ボランティアをするた

めに介護能力を身につけたい」「高齢者・福祉・介護に関心があり自分の教養のために」「家族・近親者の健康管理のために」というのが主な受講動機として挙げられた。本講座の特徴は、実習施設に恵まれているため、受講生1人1人にていねいな実習を受けられるのが特徴である。

受講後のアンケートからは「特別養護老人ホームや葉っぱのフレディヘルパーステーションなど多くの方々の出会いで自分が大きく変わったように思われた。これから一人でも多くの人の役に立てよう努力していきたい」「自分自身がしっかり健康を守った上でお世話することが結果として自分も長く生きる秘訣だと思った」「この講座で学んだことは自分の宝物になった。一緒に学んだ人たちとの出会いを通じて少し自分が大きくなったような気もするので、自信を持って1人でも多くの方の手助けができるように努力したい」などと、当講座がホームヘルパーの知識・技能を修得するのみでなく、受講生の生き方にも影響を与える内容であった。

20名全員が東京都よりホームヘルパー2級の資格が授与され、そのうち1名が修了後すぐにヘルパーとして活動を始めている。その他ホスピスでのボランティア活動を始めた方が2名いた。

講座内容については18ページに掲載した。

6 電話による相談

当センターでは会員を対象に電話による健康相談を実施している。

本年度は5件のLPC会員からの相談があった。リピーターで相談内容は「向精神薬の問い合わせ」「白内障について」「聴力検査などについて」など身体的な老化に伴う相談であった。事情を聞くと、一人暮らしで不安が強いことから電話をしている様子もうかがえる。インターネットの普及で医療情報が簡単に手に入る昨今、電話相談の役割も時代とともに縮小してきている。

7 ハーベイ教室

2008年度は、日本大学医学部6学年生を対象にした「ハーベイドールを用いた心音聴取実習」を5回(延べ133名参加)、駿河台日本大学病院看護部がハーベイドールを用いた「専門コース循環」の研修を1回(33名参加)、自衛隊中央高等看護学院3学年生を対象にした「ハーベ

イドールを用いた心音聴取と基本的技術習得の実習」を計2回(52名参加)実施した。

講師は、久代登志男先生(日本大学医学部教授)と高橋敦彦先生(日本大学医学部総合健診センター医長)が担当した。

8 血圧自己測定講習会

当センターでは1976年から一般の人を対象に聴診法で血圧の測り方を指導してきた。これまでに7,791名が受講された。最近では自動血圧計のめざましい普及により、聴診法による血圧の測り方を習得しようという人は少なくなっている。しかし、血圧について関心はあるが、血圧についての理解や血圧計の正しい取り扱い方を知らないうちに、自動血圧計を購入したにもかかわらず活用されていないことが多い。

本講座では、聴診器を用いた血圧の測り方のみではなく、血圧についての理解や自己管理の方法までも指導するため、自動血圧計を用いる場合であっても非常に有用である。

指導法は個別的で2時間を要するが、二十数年前から血圧の測り方を指導できるボランティアを養成し、その方々にマニュアルに沿って技術指導を依頼している。指導法は、マンツーマンで技術指導を行い、測定した血圧値を健康管理に活用できるように個別的に自己管理の方法についても指導している。

本年度は中野市保健補導員の研修75名、「ホームヘルパー2級養成講座」受講者20名を含めた95名に対して指導を行った。

9 資料・備品の整備

健康、看護、栄養、医療、教育等に関する専門月刊誌4種を定期購読したほか、関係図書を28冊購入し、健康教育サービスセンターの図書コーナーに整備した。また、購入図書以外に寄贈図書16冊を受け入れた。

今年度はロビーを雑誌閲覧コーナーとしてリニューアルし、教育用に購入したものと寄贈を受けたもののみならず、「新老人の会」会員の寄贈図書620冊コーナーも整備した。「新老人の会」会員の寄贈図書は閲覧・貸出しができるなど利用しやすくなった。また、自費出版等で大部数の寄贈を受けたものについては自由に持ち帰れるコーナーを設置した。詳細は19ページに掲載した。

10 出版・広報活動

1) 月刊『教育医療』(各号8,000部/12頁)

財団の各施設の活動やトピックス、またセミナーや講習会などの案内と報告を主に掲載している。また、「地域医療と福祉のトピックス」では、財団の活動以外の活動なども紹介している。2009年1月からは誌面をA4サイズに変更し、8頁で発行している。

本年度掲載した主な内容

- ・「地域医療と福祉のトピックス」...社会福祉法人「東京光の家」(視聴覚障害者の総合福祉施設)/よりよい医療への道(日本オスラー協会ツアー報告)/
- ・セミナー報告...「新老人のための健康講座6回~10回」/葉酸で脳梗塞を防ぎましょう/元気で長生き長寿の脳とは/財団設立35周年記念講演会から/いのちの授業ワークショップ/リビングウィル・ワークショップ/2008国際ワークショップ/memento mori10周年/命の源それは農業です/ブランクコントロールによるトータルな健康/健やかな食と生活を考える/全国模擬患者大会に参加して
- ・訪問看護ステーション中井から
- ・歴史と医療

2) 月刊『新老人の会』会報(各号6,900部/8頁)

本部の活動をはじめ「新老人の会」の動向を随時報告している。

- ・「支部NEWS」では、全国27支部が発行している会報の中からトピックスをご紹介している。
- ・特集記事としては、第9回拡大世話人会報告、台湾講演会ツアー報告、第2回ジャンボリー・静岡大会、日本人ブラジル移民100周年記念行事「ブラジル講演会ツアー」、 「新老人の会」設立8周年フォーラムから、世界の長寿食に学ぶ、などを掲載した。
- ・会員からのお便りを紹介する「輝く新老人」欄では、全国43人の近況や意見などを紹介した。
- ・本部で開催している「サークル活動の報告と予告」は毎月掲載した。
- ・隔月で、俳句の会では木下星城先生、短歌では川合千鶴子先生、川柳では大野風柳先生に添削をお願いし、会員の作品を掲載した。

2009年1月号からは、A4サイズに変更し発行している。

3) 小冊子『2009最新版/高血圧と降圧療法-よりよい血圧管理と個別治療のために』(久代登志男著)800部

高血圧は、脳卒中、心臓病、あるいは大動脈などの心血管系に障害をもたらす疾患であり、血圧の適正な管理がその主眼とされている。2009年1月に出された日本高血圧学会の「高血圧治療ガイドライン」の最新データを取り入れた血圧管理のためのテキストを発行した。本書は、医師、看護師などの医療関係者のみならず、自分で血圧をコントロールする人にとっても理解を助ける参考書として大いに活用を図りたい。

4) ライフ・プランニング・センターのボランティア活動『ひとりひとりの思いを込めて共に生きるということ』2,000部

当財団のボランティア活動のあゆみを日野原重明理事長に語っていただき、また当財団のボランティア養成講座で話をしていただいた野村祐之・賀来周一両講師のボランティア観を小冊子としてまとめた。本誌をボランティア教育および活動の参考に供したい。

5) 2008年度LPC国際フォーラム『看護・介護・高齢者医療におけるQOLの確立-終末期医療・介護の倫理問題にどう取り組むか』500部

2008年8月2日・3日の両日にわたり行われた上記LPC国際フォーラムの記録をまとめた。米国・ハーバード大学関連病院から招聘したラックラン・フォロー、ジュリー・ノップ両講師の講演を日本語に翻訳して掲載したほか、恒藤暁(大阪大学大学院医学系研究科緩和医療学教授)、長谷川栄美子(東札幌病院看護部長)の両講師に日本の実情を報告いただいたものとあわせ、終末期医療および介護に関する日米の倫理的問題の現状を理解できるようにまとめた。

6) 『健康ダイヤル』の発行

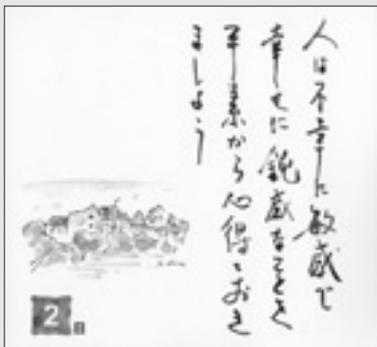
『健康ダイヤル』2008年首都圏版を2008年8月、「更年期をすこやかに-新しい人生の門出のために」をキャンペーンテーマとして当財団の健康ダイヤルプロジェクトから刊行した。

7) 「新老人の会」オリジナルカレンダーの発行

日野原会長が選んだご自身の31の言葉を一枚ごとに筆で書き、「新老人の会」絵画サークルの指導者、茅野玲子さんのスケッチを入れて日めくりのカレンダーを作製

「新老人の会」オリジナル日めくりカレンダーは、希望者に頒布するほか、「新老人の会」フォーラムで新しく入会した方にプレゼントされる。

日野原理事長の一日ごとのメッセージに茅野玲子さんのスケッチが添えられている。



した。印刷部数6,000部。一部1,200円で販売するほか、入会促進のために「新老人の会」の地方のフォーラム会場で入会した人へは無料で手渡した。

熊本県の池上俊邦さん（74歳）は次のような感想を寄せられた。

「今日をよく生きるために」と題された日野原重明会長の毛筆によるメッセージで始まる「新老人の会」オリジナル日めくりカレンダーを、毎日めくりその言葉を吟味しております。日野原会長の長い人生経験から生まれた、貴重な意義深い言葉が次々と書かれ、言葉の重みを心に受けとめているところです。私なりに共感しながら、肝に命じ挑戦したいと思いますが、凡人の私にすべての言葉をクリアすることは無理なので、「新老人の会」の3つのモットー、愛し愛されること・創めること・耐えること、の一つ、創めることを日々の生活の心構えとして実践に努めることにしました。

11 厚生労働省委託事業

がん患者に対するリハビリテーションに関する研修事業

2007年4月1日に「がん対策基本法」が施行され、基本計画の目標の一つに「すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上」が定められた。当財団は「がんのリハビリテーションセミナー」実施事務局として厚生労働省からの委託を受けがん診療連携拠点病院研修を実施した。

がんのリハビリテーションには、がん医療全般の知識が必要とされると同時に、運動麻痺、摂食・嚥下障害、浮腫、呼吸障害、骨折、切断、精神心理など多分野にわたる高い専門性が要求されるが、リハビリテーション専門職に対する研修プログラムや、看護の立場からのがん患者に対するリハビリテーション・ナーシングに関する専門的な教育がなされていないのが現状であった。そこで2007年度より多職種を対象とした「がんのリハビリテーション」の実践的な研修やワークショップを開催してきた。

本研修も2年目となり、より効果的な内容にするため研修内容を再構築した。まず研修受講後に各施設で教育・啓蒙ができるように、一施設多職種、リーダークラスの

チーム参加を条件とした。また、最も密接に患者をケアする立場である看護師を対象としたプログラムを新たに企画し、より実践的な内容で研修を行った。さらに、がんのリハビリテーションをより広めるための講演会を開催し、がん専門病院でのリハビリテーションの取り組みを紹介しながら、心身両面での支援の方法なども紹介した。

2008年度の実施内容は以下の通りである。

2) 講演会

がん医療変革の時代 - QOL と尊厳を支えるリハビリテーション チームケアにおける看護師の役割

日 時 2008年12月13日(土) 10時30分～16時

会 場 聖路加看護大学講堂

参加者数 382名

プログラム

・開会挨拶

.....道場 信孝 (ライフ・プランニング・センター理事)

・がんのリハビリテーション最前線

.....辻 哲也 (慶応義塾大学医学部講師)

・がんのリハビリテーションにおける看護師の役割

.....栗原 美穂 (国立がんセンター東病院がん性疼痛看護認定看護師)

・より良いチーム医療実践のために

.....岡山 太郎 (静岡県立静岡がんセンター理学療法士)

・セルフケアや日常生活関連活動へのアプローチ

.....田尻 寿子 (静岡県立静岡がんセンター作業療法士)

・より安全に食べるために何ができるのか

.....安藤 牧子 (慶応義塾大学病院言語聴覚士)

・進行がん患者へのリハビリテーションのポイント

.....安部 能成 (千葉県がんセンター作業療法士)

・患者ひとりひとりが持つ「内なる力」の支援

.....栗原 幸江 (静岡県立静岡がんセンター心理療法士)

・パネルディスカッション

「がん医療におけるチームケアのあり方」

座長辻 哲也 (慶応義塾大学医学部講師)

パネリスト講演者全員

3) 2008年度報告書

2008年12月13日に実施した講演内容をもとに演者に加筆していただいたものを報告書 (A4版138頁) として作成し、全国のがん診療連携拠点病院に無料配布した。

1) 研修

名 称	日 時	参加人数・参加構成	会 場
第一回 研修 がんのリハビリテーション研修 ワークショップ - QOL の向上を目指して -	2008年 6月28日(土) 8:50～18:00 6月29日(日) 9:00～17:00	参加人数: 72名 医 師: 10 看 護 師: 26 理学療法士: 22 作業療法士: 11 言語聴覚士: 3	国立看護大学校 (東京都清瀬市)
第一回 研修 がんのリハビリテーション研修 ワークショップ - QOL の向上を目指して -	2008年 9月27日(土) 8:50～18:00 9月28日(日) 9:00～17:00	参加人数: 79名 医 師: 7 看 護 師: 29 理学療法士: 28 作業療法士: 9 言語聴覚士: 6	神戸看護協会 (兵庫県神戸市)
第一回 看護師対象研修 明日のベッドサイドでいかなるがんのリハビリテーション スキルアップセミナー	2009年 1月24日(土) 9:00～17:00 1月25日(日) 9:20～15:00	看 護 師: 64名	国立看護大学校 (東京都清瀬市)

報告 / 平野 真澄 (健康教育サービスセンター所長)

2008年度 ホームヘルパー 2級講座

講習日	時 間	科 目	講 師
4 / 22(火)	13:00~17:00	オリエンテーション・開講式	日野原 重 明 福 井 みどり
4 / 24(木)	13:30~16:30	ホームヘルプサービス概論	上 静 子
5 / 8(木)	9:30~12:30	サービス提供の基本視点	石 井 康 久
	13:30~16:30	ホームヘルパーの職業倫理	小 原 和 代
5 / 13(火)	9:30~12:30	福祉理念とケアサービスの意義	中 村 敏 秀
	13:30~15:30	障害者・福祉の制度サービス	中 村 敏 秀
5 / 15(木)	10:00~12:00	高齢者保健福祉の制度とサービス	石 井 康 久
	13:30~16:30	医学の基礎知識Ⅰ	和 田 忠 志
5 / 20(火)	10:00~12:00	在宅看護の基礎知識Ⅰ 高齢者・障害者(児)の心理	中 村 洋 子 福 井 みどり
	9:30~12:30	高齢者・障害者(児)家族の理解	福 井 みどり
5 / 22(木)	13:30~15:30	介護概論	井 上 千 津 子
	9:30~12:30	食事管理の基礎知識	平 野 真 澄
5 / 27(火)	13:30~16:30	介護・事例検討(1) 障害者・児介護の特徴と留意点	中 村 敏 秀
	9:30~11:30	住宅・福祉用具に関する知識	長 尾 邦 彦
13:30~15:00			
6 / 3(火)	10:00~12:00	共感的理解と基本的態度の形成	福 井 みどり
	13:30~16:30		
6 / 5(木)	10:00~12:00	リハビリテーション医療の基礎知識	森 倉 三 男
	13:30~16:30	視覚障害者の歩行時の介護	雷 坂 浩 之
6 / 10(火)	10:00~12:00	障害・疾病の理解(1) からだの成り立ちと機能	本 多 虎 夫
	13:30~15:30	家事援助の方法(1)	平 野 真 澄
6 / 12(木)	10:00~12:00	家事援助の方法(2) 車椅子への移乗, 移動の介護	小 原 和 代
	13:30~15:30	寝具の整え方ベットメイキングの方法	石清水 由紀子
6 / 17(火)	10:00~12:00	血圧自己測定(1)	石清水 由紀子
	13:30~15:30	障害・疾病の理解(2) からだの成り立ちと機能	道 場 信 孝
6 / 19(木)	10:00~12:00	血圧自己測定(2)	石清水 由紀子
	13:30~16:30	介護事例検討(2) 高齢者介護の特徴と留意点	片 山 蘭 子
6 / 24(火)	10:00~12:00	レクリエーション体験学習	山 崎 律 子
	13:30~16:30	障害・疾病の理解(3)	道 場 信 孝
6 / 26(木)	9:30~12:00	介護の心構え	大 串 佐 江 子
	13:30~16:00	相談援助とケア計画の方法	東 奈 美
7 / 1(火)	9:30~12:30	家具・車いすの移乗の介護/車いすでの移乗	小 沼 美 奈 子
	13:30~15:30	肢体不自由者の歩行	
7 / 3(木)	9:30~12:00	身体の清潔(細部の清拭・清潔)	加 藤 敬 子
	13:30~15:30	入浴の介護	
7 / 8(火)	9:30~12:30	食事の介護(口腔排泄・尿失禁の介護)	荻 野 文
	13:30~16:00	体位・姿勢の交換の介護 褥瘡対応	
7 / 10(木)	10:00~12:00	介護者の健康管理	小 沼 美 奈 子
	13:30~15:30	救急法	
7 / 15(火)	10:00~12:00	尿失禁・排泄の介護	加 藤 敬 子
	13:30~15:30	緊急時の対応	
7 / 17(木)	10:00~12:00	身だしなみ・衣服着脱の介助	荻 野 文
	13:30~16:30	身体の清潔(洗髪)	
7 / 22(火)	10:00~12:00	訪問介護計画の作成と記録報告の技術	白 井 幸 久
	13:00~16:00		
7 / 24(木)	13:00~15:00	施設実習オリエンテーション	福 井 みどり
8 / 1(金)~8 / 31(日)	8:00~17:00	介護実習	特別養護老人ホーム職員
8 / 9(月)~10 / 8(金) のうち2日間	9:00~13:00	ホームヘルパーサービス同行訪問	葉っぱのフレディヘルパーセンター所長 ヘルパー
	13:00~17:00		
9 / 1(月)~9 / 30(金) のうち2日間	9:00~17:00	在宅サービス提供現場見学	在宅サービスセンター職員
	10 / 2(木)	13:30~16:00	修了式 日野原 重 明 福 井 みどり

2008年度 展示・貸し出し資料購入一覧

新聞・雑誌

NHK きょうの健康	日本放送協会出版
看護	日本看護協会出版
臨床栄養	医歯薬出版
教育医事新聞	教育医事新聞社

教育図書 (28冊)

労働者の疲労・過労と健康 働く者の労働安全衛生入門シリーズ3	福地 保馬	かもがわ出版
やさしく学ぶ 認知症のケア	長谷川和夫	永井書店
感性を磨く技法Ⅰ 看護場面の再編成	宮本 真巳	日本看護協会出版会
感性を磨く技法Ⅱ セルフケアを援助する	宮本 真巳	日本看護協会出版会
いのちの輝き	中村 洋志	高城書房
この子らを世の光に 近江学園二十年の願い	糸賀 一雄	NHK 出版
殺人という病 人格障害・脳・鑑定	福島 章	金剛出版
鬱の力	五木 寛之・香山 リカ	幻冬舎新書
わかりやすい人体の仕組み 主な疾患へのアプローチ	田所 衛 監修	日本医学館
家で死ぬのはわがままですか 訪問看護婦が20年実践した介護の現場から	宮崎和加子	ちくま文庫
あたらしい介護技術の提案 歩行介助・移動介助編	貝塚誠一郎 編著	日本医療企画
ブラジル百年にみる日本人の力	丸山 康則	モラルジー研究所
目でみるブラジル日本移民の百年	ブラジル日本移民資料館	風響社
老年医学 update 2008 - 09	日本老年医学会雑誌編集委員会	メジカルビュー社
改訂第3版 老年医学テキスト	社団法人日本老年医学会編	メジカルビュー社
エンド オブ ライフ・ケア 終末期の臨床指針	K. K. キューブラ, P. H. ベリー, D. E. ハイドリッヒ	医学書院
栄養管理からみたがん緩和治療	新津洋司郎・監修	真興交易(株)医書出版部
小野田寛郎 わがルパン島の30年戦争	小野田寛郎	日本図書センター
私は戦友になれたかしら 小野田寛郎とブラジルに命をかけた30年	小野田町枝	清流出版
心の病は脳の傷 うつ病・統合失調症・認知症が治る	田辺 功	西村書店
自己評価メソッド 自分とうまくつきあうための心理学	クリストフ・アンドレ	紀伊国屋書店
あなたは「ひとり」で最期まで生きられますか?	栗原 道子	講談社
「愛」なき国 介護の人材が逃げていく	NHKスペシャル取材班・佐々木とく子	阪急コミュニケーションズ
国民衛生の動向 2008年 (第55巻第9号)	(財)厚生統計協会集計部	(財)厚生統計協会
老いる準備	上野千鶴子	朝日文庫
いまをどう生きるのか	松原 泰道・五木 寛之	致知出版社
君たちどうする?	小野田寛郎	新潮社
「いのちの授業」をもう一度	山田 泉	高文研

寄贈図書 (16冊)

ジョン万次郎に学ぶ 「自立と共生」の理念に生きた男	平野 貞男	イブシロン出版企画
中濱万次郎 「アメリカ」を初めて伝えた日本人	中濱 博	富山房インターナショナル
ジョン万次郎物語	ウェルカム ジョン万次郎の会	富山房インターナショナル
ホームヘルパー養成研修テキスト3級課程2006年版	ホームヘルパー養成研修テキスト 作成委員会1巻・2巻	(財)長寿社会開発センター
ホームヘルパー養成研修テキスト2級課程2006年版	ホームヘルパー養成研修テキスト 作成委員会4巻	(財)長寿社会開発センター
ホームヘルパー養成研修テキスト1級課程2006年版	ホームヘルパー養成研修テキスト 作成委員会4巻	(財)長寿社会開発センター
「がんに効く」民間療法のホント・ウソ	住吉 義光・大野 智	中央法規
母乳育児の3ポイント	袖原 健男・吉田 幸子・三石 里絵	オーエムエス出版
広辞苑 第6版	新村 出	岩波書店
堂本暁子と考える 医療革命 性差医療が日本を変える	堂本 暁子・天野 恵子	中央法規
高齢化社会をどうとらえるか 医療社会学からのアプローチ	ウィリアム C. コッケルハイム	ミネルヴァ書房
24時間先生	荒井 裕司	メディアファクトリー
ひきこもり・不登校からの自立	荒井 裕司	マガジンハウス
「学校に行きたくない」って誰にも言えなかった	荒井 裕司	登進研情報センター
エイズ感染爆発とSAFE SEXについて話します	本田美和子	朝日出版社
神様、ボクをもとの世界に戻してください 高次脳機能障害になった息子・郷	鈴木 真弓	河出書房新社

「新老人運動」と「新老人の会」の運営

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

ライフ・プランニング・センターの日野原重明理事長が提唱された「新老人運動」に賛同する方々の集まりとして2000年9月に「新老人の会」が発足し、当財団の日野原重明理事長が会長に就任した。

当財団は設立以来、日本の医学医療改革と生活習慣病の予防を目的に“自分の健康は自分で守る”“賢い患者になる”という運動を提唱し、さまざまな啓発活動を続けてきた。これらの延長線上に「新老人運動」を位置づけ、新たな事業として展開していくことになった。

「新老人運動」とは世界一の長寿国となった日本の高齢者が、健やかで生きがいを感じられる生き方をしていくための具体的な提案である。設立当時は、21世紀を目前にして少子高齢化がにわかに社会問題とされ、増えすぎる老人が社会の活性化を阻み、ひいては医療保険や年金の破綻をもたらす存在として、次世代の人々の夢を砕くかのような社会の論調がみられた。しかし、高齢になっても自立して、これまでの人生で培った知恵や経験を社会に還元できる老人は大勢いる。また、日野原会長はかねてより、半世紀前にWHOが老人の定義を65歳以上としたことはすでに実態に合わなくなっており、10年底上げすべきだと主張していた。そして75歳以上を「新老人」と名づけ、全く新しい老人像を創出しようと設立したのが「新老人の会」である。

これらのことが新聞、雑誌、テレビなどに数多く紹介されたことで全国的な反響を呼び、全国から大勢の賛同者を得ることになった。その当時の反響の一つとして、「新老人」および「新老人の会」が2002年版『現代用語の基礎知識』に収録されたこと、また、日野原会長が「新しい老人文化の構築に貢献した」として2003年度朝日社会福祉賞を受賞されたことなどが挙げられる。

発足から8年半を経た2008年度、これらの反響はますます全国的な広がりを見せ、会員数は2009年3月31日現在8,424名、地方支部は27カ所に増加した。

「新老人の会」の目標を実現するためのさまざまな活動を推進する中で、設立当初75歳以上を正会員、それより若い方々を準会員とした会員の分類を、2005年度から75歳以上を「シニア会員」、75歳より若い方々を「ジュニア会員」とし、合わせて会員とした。しかし、会の目指すべき方向が明確になるにつれて、「新老人運動」はもっと広い視野をもって活動すべきとの合意に立って、

2006年度より20歳以上60歳未満の若い人たちを「サポート会員」とし、当会の趣旨に賛同する方々の入会を勧め、活動の下支えを担っていただくことにした。ジュニア会員、サポート会員にはシニア会員と共に活動することで、10年先、20年先の自分のモデルを見つけていただくことができ、年齢を重ねなければわからないことを、先輩会員を通して体得していただくことができると考えたのである。また、合わせて「夫婦会員」の制度も設定した。

現在、シニア会員53%、ジュニア・サポート会員合わせて47%という割合であるが、活動を活発にするためにも、ジュニア会員、サポート会員の加入を積極的に呼びかけている。

「新老人運動」の趣旨

少子高齢化の道をまっしぐらに突き進んでいる日本において、高齢者はどのような生き方をすればよいかを、「新老人の会」設立前の1999年にリーフレット「新老人 - 実りある第三の人生のために - 」を作成し、世に問いかけた。そして、翌2000年9月の「新老人の会」設立に至った。

「新老人運動」とは、日野原会長が長年にわたり日本の医学医療界を革新するリーダーとして培ってきたものをベースに、日本の高齢者が健やかで幸せな生涯を送ることができるよう願ったものである。

高齢者が自立して、この年代でなければならない社会貢献をし、生きがいを感じられる生活を送っていただくために次のような「生き甲斐の3原則」と、「一つの使命」「5項目の行動目標」を掲げている。

生き甲斐の3原則（ヴィクトール・フランクルの哲学より）

と一つの使命

愛すること (to love)

創めること (be creative)

耐えること (to endure)

そして2006年度から、上記に加え、一つの使命として、「子どもに平和といのちの大切さを伝えること (To give children messages to appreciate Peace and Life of All on Earth)」を策定した。

5つの行動目標 (2006年3月一部訂正)

自立：自立とよき生活習慣や我が国のよき文化の継承
本会は、75歳以上をシニア会員、75歳未満をジュニア

会員、60歳未満をサポート会員とし、老後の生き方を自ら勇気をもって選択し、自立とよき生活習慣をそれぞれの家庭医や社会に伝達するとともに、次の世代をより健やかにする役割を担う。

世界平和：戦争体験を生かし、世界平和の実現を図る
20世紀の負の遺産である戦争を通じて貧しさの中から学んだ体験と人類愛を忘れた生き方の反省から得られた教訓を次の子どもや孫の世代に伝え、世界平和の実現に寄与する。

自分を研究に：自分の健康情報を研究に活用（ヘルス・リサーチ・ボランティアの志願）

自らの健康情報（身体的、精神的及び習慣的情報）をヘルス・リサーチ・ボランティアとなって研究団体に提供し、老年医学、医療の発展に寄与する。

会員の交流：会員がお互いの中に新しい友を求め、会員の全国的な交流を図る

健やかな第三の人生を感謝して生きる人々が、さらに新しい自己実現を期して交流し、心豊かな老年期を過ごす。

自然に感謝：自然への感謝とよき生き方の普及

過度に成長した不健全な文明に歯止めをかけ、与えられた自然を愛し、その恩恵に感謝し、その中によき生き方の普及を図る。

「新老人の会」とは、これらの趣旨に賛同する方々を会員として、広く社会に啓発活動を展開していこうとするものであり、会則、地方支部規約に基づいて運営されている。

2008年度は、地方支部に新たに北東北、山口、群馬、石川、沖縄の5支部が加わり全国27支部となった。海外支部はメキシコ支部に加えてオーストラリア支部が設立された。

また、海外講演会も台湾、ブラジルの2カ国で日野原会長講演会を開催したが、台湾ではこの機会に「台湾新老人の会」が発足した。これら海外での講演会には多くの会員有志が同行参加し、現地の方々と親しく交流することができた。

地方支部の躍進はめざましく、27カ所ある支部においても毎年趣向をこらしたフォーラムを開催し、1,000名を超える大会場にいっぱいの聴衆を集めることが恒例となり、地域に「新老人運動」を啓発・普及する絶好の機会となっている。

さらに、小・中学校での「いのちの大切さを伝える授

業」、市民を対象にした「戦争体験を語り継ぐ会」の開催、会員の戦中戦後の手記の出版など精力的に取り組んでいる支部もある。

各支部が発行する『支部ニュース』は隔月から年1～2回発行までさまざまであるが、支部活動が反映された充実した内容となっており、支部同士の情報交換と交流の資源ともなっている。これらの詳細を以下に報告する。

1 世話人会の開催

本部では事業の遂行に関する重要な事項を検討し決定する機関として本部世話人会を年間5回と拡大世話人会を1回開催している。世話人会のメンバーは日野原重明会長、道場信孝財団最高顧問、朝子芳松財団常務理事、15名の本部世話人、事務局から3～4名が出席している。

2008年度は5月23日、7月16日、9月25日、11月13日、2009年1月28日の5回開催、3月24日・25日は「第10回拡大世話人会」を東京の本部において開催した。

本部世話人の吾郷慶一氏、土居荘助氏が辞任され、新たに伊藤瑛位子氏、太田垣宏子氏が就任された。

本部世話人は次の15名である。（五十音順）

伊藤瑛位子	江崎 正直	太田垣宏子
儀我壮一郎	黒田 薫	佐伯 正博
鈴木 章弘	玉木 恕乎	寺岡美由紀
丹羽 茂久	橋本 美也	藤田 貞
藤野 貞子	松原 博義	宮川ユリ子

2 拡大世話人会の開催

拡大世話人会は1年に1回、会則に則って本部の世話人会を拡大し、地方支部の世話人代表を交えて研修・交流するものである。その目的は、会の目標、活動方針を確認し合い共有する、支部の活動、運営について問題点を分かち合い、解決に向けて話し合う、今後の課題を明確にし、共有すること、である。

本年度は、新たに5支部が設立され全国27支部となったため、地方からの世話人代表、世話人は41名の参加となった。

第10回拡大世話人会

日 時：2009年3月24日・25日

場 所：ライフ・プランニング・センター健康教育
サービスセンター（砂防会館）



拡大世話人会は全国支部の代表が集まり、全体の方針を確認し、共通意識を高める。
左はグループディスカッション、右は夜の懇親会



宿泊・懇親会 ホテル・ラポール麹町
レストラン・ラブリコ

- ・グループワーク（前日に挙げられたテーマについて）
- ・報告（グループワークのまとめ）と意見交換
- ・昼食懇親会・解散

プログラム

3月24日(火) 13時～

- ・会長挨拶
- ・本部からの報告と提案
- ・会計の実績と予算
- ・会員の動向
- ・「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」開設募金について
- ・意見交換
- ・支部報告……支部活動報告と活動・運営上の問題点、懸案事項、課題など事前に書面で報告されている中から、特に強調したいことを5分以内で発表していただいた。
- ・まとめ
- ・懇親会（ホテル・ラポール麹町、18時～）

ピアノ演奏・今野尚美さん、
詩の朗読・能祖将夫さん
地方支部世話人代表は宿泊

3月25日(水) 9時30分～13時

参加者は本部世話人15名、地方支部世話人代表・世話人41名、本部7名、合わせて63名であった。24支部（3支部欠席）、4 brunchの代表が一堂に会して親交を深め、各支部、brunchの現状と抱えている問題点について報告し、話し合うことができた。

全国に先駆けて設立され7年半を経過した九州支部から、まだ設立半年に満たない沖縄支部まで、お互いの問題をシェアすることができる上に、さまざまなヒントを得ることができる機会として活用されている。

討議の内容

本部からの「2009年度の行動目標」の提示

会員増強：2009年10月の9周年までに会員1万名を達成する

活動の活性化、会員交流を推進する

「新老人の会」としてふさわしい活動を展開する

また、支部運営についてのお願いとして、地方活動助成金は年度内に有効に使っていただくこと。本部と支部

との連絡、情報交換にEメールを使えるように、支部でパソコンを購入、専用アドレスをもっといただきたい。支部ニュース、フォーラムちらし、プログラムなど支部の印刷物は一括して本部にお送りいただき、これをまとめて各支部に送付しているので活用していただきたい。会費未入者の回収率アップに協力いただきたい。

支部世話人の任期は地方支部規約でも規定していないので、必要であれば支部の実情に合わせて「支部規約」として付け加えて運用していただきたい。

その他、会員の動向、会計報告、ヘルス・リサーチ・ボランティアの報告がなされた。

各支部からの報告：

支部からは 支部の概要、支部ニュースの発行、世話人会の開催、活動の紹介、運営上の問題点、今後の課題を書面で報告していただいたものを元に、特に伝えたいこと、トピックスなどを口頭で報告していただいた。各支部共通の問題点としては、新入会が増えても退会者も多いため、いかにして魅力ある活動を展開し退会者を減らすか。会の理念を次世代にどのように引き継ぐか、会のフィロソフィーが大切であること。また、ある代表から「自分の内面に目標となる年齢を意識して生きていくこと」の大切さを述べられ、報告を聞くことがよい学習となるレベルの高い報告会であった。

グループワーク

今回は、会の発足から8年半を経た現在、全国の会員数8,424名から当面1万名を目指していくこと。今回は、全国に支部がほぼ網羅されたため、地域性が共通する近隣支部同士が抱えている問題点を率直に開示し、情報交換するために全国を6グループに分けてグループワークを行った。テーマを 会員増強対策、退会者を減らし、いかに新入会を増やすか、会の趣旨に添った活動をいかに展開するか、支部運営上の事務局の維持、世話人会の活性化、として熱心に話し合いがもたれた。

最後に、これらのまとめを報告し合い、意見交換を行った。なかでも会員増強、退会者を減らす方策が最も共通する問題として熱心に話し合われた。また、会の理念を会員のみではなく次世代を担う子どもたちへ伝えることに本気で取り組みたいということ、当会が既存の他の団体と異なり、日野原会長が提唱された理念を実現するところに特徴があることなどが再確認された。また、関連して会員が名刺を作成する際にロゴマークがあるとよいとの提案があり、今後1年くらいかけて公募し、よいものを制定することにした。

地域性が共通する中での具体的な話し合いは、すぐにも取り入れられるヒントに満ちており、たいへん有意義であった。

日野原会長の「閉会のことば」から

私はこの会をつくった時、「老人」の定義を75歳以上にしようと提唱しました。高齢化社会において、新しい老人の生き方を示そうと訴えたのです。アメリカでは老人を“The Elderly”と尊敬語で表現しています。中国の「老」というのも尊敬語です。高齢者という年齢で差別するような呼び方ではなく、尊敬語としての「老人」にふさわしい生き方をし、そのモデルとなる人たちが「新老人の会」シニア会員なのです。さらに私たちの意思を受け継いでくれる若い人たちを巻き込んでいこうと、ジュニア会員、サポート会員制度をつくり、下からの推進力で火山が噴火するような勢いで活動を展開していこうと考えたのです。

私たちの運動というのは、人間として与えられた「いのち」に感謝して、その感謝に利子をつけて社会にお返ししようということが根本にあります。与えられた「いのち」を自分のために使うのではなく、他のために何ができるかを考えようという運動です。私たちが子どもたちのためによい環境をつくっていく。それはつまり、「いのち」を大切にしようという思いを広めていくことです。これは「新生命運動(ネオ・バイタリズム)」です。

ロンドンで1938年にフランク・ブックマン牧師が始めたMRI(道徳再武装)運動というのがあります。戦争のように武器をもって戦うのではなく、道徳、倫理という新しい武器で世の中を変えようという運動です。「まず自分から変わる」ことなしに、世の中は変わりません。大きなビジョンを描き、勇気ある行動をすれば、必ず後に続く人が出てきます。生まれてきたことに感謝して、その感謝を次の時代を築く子どもたちに捧げよう、ひとり一人が行動目標をもって実行しようというのが「新老人運動」なのです。

*

日野原会長の新たなメッセージを、拡大世話人会に出席されたみなさんも力強く同意されていた。

会を重ねるごとに支部の数も増え、参加人数も多くなったため、内容も一段と充実して実りの多い会であった。この学びを各支部に持ち帰り、支部活動がますます充実し発展することが期待される。

3 地方支部の設立

設立当初から全国に10ブロックくらいの支部を設立することを謳ってきたが、支部の単位が大きすぎると、活動の中心地から遠隔地に在住する会員は活動に参加しにくいという問題が起り、数年前から県単位くらいまで支部を小さく分割する方針をとっている。そのため、今年度は4月に山口支部、5月に北東北支部、7月に群馬支部、9月に石川支部と沖縄支部が設立され、国内は27支部となった。

これらの支部は他の支部と同様、「会則」「地方支部規約」に基づいて運営されている。

支部の財政は、本部より会員数に応じて年会費の50%を「地方活動助成金」として交付し、これをもとに運営される。支部を設立することによって、支部主催のフォーラムを開催し、地域の人々に日野原会長の講演を聞いていただくことができ、新入会員の獲得に繋がっている。また、地域に根ざした活動を催したり、参加できること、会員自らが周辺の人々を勧誘することの効果表れているものと思われる。今後、いかにして会の目標に沿った支部活動を展開し、会員の満足度を高めていくかが課題であるが、そのためにも「拡大世話人会」は有意義な機会となっている。

4 地方支部規約の制定

全8カ条からなる規約は、地方世話人会の設立、地方支部設立後の地方世話人会の権限、義務、財政などについて定めるものである。条項の主なものは下記の通りである。

第3条

地方世話人代表1名を会長が任命する。

地方世話人は地方世話人代表が10～20名の範囲で選出し、会長の承認を得る。

第4条

一つの管轄地域には一つの地方支部のみ設立することができる。

第6条

重要な業務執行に関して、会長の承認を得る。

1年に1回、会長に活動報告と会計の報告を行うこと。

1年に1回、地方支部世話人代表が本部における拡大世話人会に参加すること。

第7条

本部からの地方活動助成金を4月、10月の2回に分けて交付する。

地方支部によっては、これらをもとに支部の事情を考慮した支部規約を制定し運用しているところもある。

5 地方支部の運営と活動(表1)

地方支部は規模、交通の利便性、地域の特性が異なり一概に論じることができないが、運営は地方世話人会で相談し、会員のアンケートなどから得られたニーズ、本部における活動を参考に会員が主体的に運営すること。また、会の趣旨に添った社会に働きかける大きな活動に取り組んでいる支部もいくつか生まれている。これらには九州支部の「樹人千年の会」、信州支部の「いのちと平和の森」の活動、熊本支部の舞台劇「医聖宗巴は立ち上がる」の公演などが上げられる。

また、支部主催で会員による「いのちの授業」を小学校に出向いて行っている支部もある(信州支部、宮崎支部など)。また、「戦争体験を伝える活動」を小・中学生、あるいは一般市民を対象に開催している支部もある(兵庫支部、岡山支部、熊本支部など)。

サークル活動としては、地域性のあるユニークな活動を展開している支部が多くなっている。都市型の会員数が多い支部ではサークル活動が成立し、有効な活動となっているが、会員数が多くない支部、会員が散在する支部ではサークル活動が難しい反面、小講演会や会員の集い、小旅行など全会員を対象にした活動が行われている。

最近では各支部が情報伝達、会員交流のために『支部ニュース』を発行することが通例となっている。隔月発行から年1～2回発行までとさまざまであるが、地域の特色がよく反映されており、支部活動の様子が読み取れる内容になっている。発行されたニュースは数十部を本部に送付していただき、本部から各支部に再配送するシステムをとっており、支部同士の情報交換と交流の資源ともなっている。

支部活動の活性化のために、支部をいくつかのブロックに分け、地区会を組織して地区会をもっている支部(兵庫支部)は退会者が少ないという傾向が現れており、お互いの顔と名前がわかるグループは「支え合う」仲間になっていると思われる。

また、神奈川ランチでは、地域に出向いて地区集会を開催、会員の中から講師を選出して「講演と会員交流

支部主催のフォーラムはどこの会場も満員の盛況
左は三重フォーラム、右は和歌山フォーラム



の会」を開催するなど、好評を得ている。

1) 地方支部フォーラムの開催(表2)

年1回は「周年記念フォーラム」として日野原会長講演会を支部主催で開催しているが、講演のみではなくアトラクションに管弦楽演奏、楽器演奏、独唱、合唱などの催しを組み合わせるなど、格調高く感動を与えるプログラムが実施されている。2008年度に開催された地方でのフォーラムはいずれも1,000名を超える大会場にいっぱい参加者を集め、大盛況に開催された。

2008年度は、地域の合唱団の公演が多かったが、最近ではレベルの高い合唱団を招き聴衆との大合唱も組み入れることで参加意識を高め、感動を与えている。新潟支部フォーラムのソプラノ歌手・雨谷真夜さんのコンサート、石川支部フォーラムの菅原洋一さん親子のコンサート、神奈川ランチ横浜フォーラム恒例の日野原祝祭管弦楽団の演奏会などのほか、鹿児島支部フォーラムでは熊本支部の演劇「医聖宋巴は立ち上がる」ダイジェスト版の公演がユニークであった。沖縄支部フォーラムでは「かぎやで風」で幕を開け、「カチャーシー」で閉じるという沖縄情緒豊かな開催であった。

参加者数は、東北支部の1,900名を最高に、三重支部1,800名、岡山支部の1,600名と続き、また、三重支部は締め切り後もチケットを求める電話が引きも切らなかったというほど地域の前評判が高かった。

フォーラム会場で、日野原会長の講演後に入会受付をすると、入会希望者が殺到し一挙に会員増を図ることができる。会員増強の方策として、会場で入会される場合

に限り「オリジナル日めくりカレンダー」をプレゼントすることにした(2008年10月より)。そのためもあるが沖縄支部フォーラムでの新入会員163名が本年度の最高記録となった。

本年度の延べ開催数は31回、延べ参加者数3万2,892名であった。

2) 子どもたちに「いのちの大切さ」を伝える

先にも触れたように、3年前から「生き甲斐の3原則」に加え、一つの使命として「子どもに平和といのちの大切さを伝えること」を付け加えた。日野原会長はこれまでも増して全国各地の小学校で精力的に「いのちの授業」を行った。地方支部においても地方支部フォーラムの前後に「いのちの授業」を企画されるところが多くなった。2008年度は、5月に弘前市立大成小学校、6月に萩市立明倫小学校、金沢市立浅野町小学校、8月に四日市市立内部小学校、10月に仙台市立上杉山通小学校、福島市立森合小学校、2009年1月に京田辺市立大住小学校、2月に福岡市立能古小学校、3月に延岡市内の小中学生を対象に行うなど9回にわたり実施した。この「いのちの授業」はマスメディアの関心が高く、地域の新聞、テレビなどで報道されることが多かった。これにより「新老人の会」日野原会長の活動を地域にアピールすることができた。

また、これらをモデルに、支部活動として独自の「いのちの授業」を展開することを計画している支部もある。既に実施している支部は、兵庫支部、信州支部、岡山支部、宮崎支部などであるが、医師が中心になり聴診器を



左は九州支部「樹人千年の会」での植樹，中は群馬フォーラムで新支部を設立

熊本支部「医聖宗巴は立ち上がる」の上演

用いた方法，戦争体験を中心にした方法など，支部会員が工夫を凝らして数人のチームをつくり展開している。

3) 戦争体験を伝える

兵庫支部で，7年前からサークル活動の一つとして「戦争体験を伝える」活動を展開している。平和学習の一環として6年生の修学旅行の1カ月前に行われているが，メンバーの戦争体験を通して「平和といのちの大切さ」を伝え，その後，子どもたちがグループワークで話し合いをし，これを発表するという学習である。本年度は神戸市内の小学校3校でこの活動を行った。

熊本支部では，一般市民を対象にした「戦争を語り継ぐ会」を開催している。また，会員の手記を募り支部ニュースに掲載することを継続して行っている。

北東北支部では，世話人代表の吉田豊氏を中心に会員の戦争体験を手記にして『我らの日々 - 戦前・戦中の子どもたち -』を出版されたが，会員15名の手記を収録し1,500部を刊行，完売した。これが好評につき，現在，続編出版を計画し執筆中とのことである。

4) 演劇公演

熊本支部が2年がかりで計画してきた舞台劇「医聖宗巴は立ち上がる」を上演，2008年5月6日，熊本市市民会館に満員の聴衆を集めて大成功に開催された。

2008年は熊本城築城400年祭にあたり，記念事業に指定されいくつかの団体から助成金を受けることができ実現に至った。西南戦争で敵味方なく傷兵の治療に当たった医師団の物語であるが，会員の一人が地元でも忘れ去

られていた事実を掘り起こしてシナリオを執筆。何とか演劇公演ができないかと熱心に世話人会で訴えたことから取り組みが始まった。当初は尻込みする人が多い中，話し合いを重ねとうとう実現にこぎ着けた。それには，「この公演を通して『いのちの尊さ』『敵味方のない人類愛』『悠久の世界平和』を今日の人々と次の世代に伝えなければならないという使命感に突き動かされたから」と小山世話人代表は述べておられる。支部のメンバーがシナリオ，演出，役者，裏方まですべてを分担し，幼稚園児の子役，剣詩舞，大太鼓の出演協力を得て成し遂げることができた。これこそ「創めること」，つまりやったことのない初めてのことへの挑戦であるが，感動を分かち合い結束力が大いに高まった。公演を見た方々から賛辞の投書があり「『新老人の会』に拍手をおくる」「感動を呼んだ宗巴の舞台劇」の見出しで熊本日々新聞に掲載された。

5) 「樹人千年の会」と「いのちと平和の森」の活動

数年前に九州支部が自然環境保護を目的に「お墓の代わりに樹を植えよう」と始めた活動が「樹人千年の会」である。会員を対象に福岡市郊外の地に約200本の樹が植えられ，会員たちの手で管理されている。

これに触発された信州支部の会員が中心になって「いのちと平和の森」構想に取り組んで3年余りになる。松本市郊外の北アルプス連峰を背景に，美しい安曇野平野を見下ろす松本市アルプス公園近くの市有地を借り上げ，ここを中心に自分たちが生きた証として「いのちの樹」を植えて森をつくり，次の世代に継承していこうという

ものである。これを長野県に特定非営利活動法人(NPO)として申請し、2007年5月1日認証登記された。

土地整備のために林野庁、その他の助成金を受け、樹寿会員を募集して資金を集めるなど、「新老人の会」信州支部としては経済規模が大きいためNPO法人として独立した組織にした。日野原会長は特定非営利法人「いのちと平和の森」の名誉会長として、「新老人の会」と協力し合うことを協定している。地域の方々の理解と協力を得ながら周辺の土地を求め、広く樹寿会員を募り、趣旨に賛同するボランティアの応援を得ながら、会員が自分たちの手で運営を進めている。

これらに加えて、2007年から熊本支部では「飯田山山桜植樹」を活動の一つとして取り組んでいる。会員の知人が所有する山を「何とか活用できないか」と相談を受けたのがきっかけとなって、山桜を植える計画が持ち上がった。1本植えるのに1万円かかるが、これまでに140本を植えることができた。5年、10年先が楽しみとのことである。

6) 地方支部世話人代表(設立順)

1. 九州 支部：原 寛
2. 兵庫 支部：富永 純男(阪神支部を改め)
3. 京滋 支部：森 忠三
4. 広島 支部：二宮 義人(山陽支部を改め)
5. 東海 支部：榊 米一郎
6. 北海道支部：松本 脩三
7. 阪奈和支部：阿部 裕
(11月まで。以後は会長が代行)
8. 信州 支部：横内祐一郎
9. 東北 支部：阿部 圭志
10. 山梨 支部：小林 茂
11. 島根 支部：森山 勝利
12. 四国 支部：内田 康史
13. 鳥取 支部：入江 伸二
14. 新潟 支部：笹川 力
15. 福島 支部：佐藤 勝美
16. 熊本 支部：小山 和作
17. 静岡 支部：室久敏三郎
18. 宮崎 支部：青木 賢児
19. 鹿児島支部：鹿島 友義
20. 富山 支部：前田 昭治
21. 岡山 支部：河田 幸男
22. 三重 支部：鈴木 司郎

23. 北東北支部：吉田 豊
24. 山口 支部：林 三雄
25. 群馬 支部：臼井 龍
26. 石川 支部：井上 良彦
27. 沖縄 支部：鈴木 信

6 海外講演会ツアー

「新老人の会」日野原会長海外講演会も、これまでに7回を重ねてきたが、2008年度は、4月に台湾講演会ツアー、9月にブラジル講演会ツアーの2回にわたり開催し、全国から合わせて200名余もの会員が同行参加された。台湾では、この機会に「台湾新老人の会」が設立され、日野原会長が提唱された「新老人運動」の趣旨を共有する会が国外でも発足したことになる。ブラジルでは、本年がブラジル日本移民100周年記念の年にあたり、記念事業としての講演会に日野原会長が招聘された。

このような意義のある開催に、全国の会員有志が同行され、現地の同年代の方々と親しく交流する機会をもつことができた。それぞれの詳細を以下に記す。

1) 台湾講演会ツアー

- 日 程：2008年4月25日(金)～4月28日(月)
- 4月25日(金) 桃園空港より「台北101」観光のあとグラントフォールモサリージェントホテルへ。
全国支部からの参加者との夕食会
 - 4月26日(土) 市内観光の後、「台湾新老人の会」設立記念講演会、台・日の方々の交流会
 - 4月27日(日) 濱江市場でのショッピング、故宮博物館の見学
台北輝雄診療所主催講演会
日野原会長の講演と「新老人の会」サークル「詩吟」「フラダンス」披露
 - 4月28日(月) 忠烈祠衛兵の交代見学
日野原会長が台北日本人学校において「いのちの授業」

台湾は隣国で日本語が通じるという親近感があり、全国から172名の会員が参加され、大きなツアーとなった。参加者の最高齢は96歳で、日野原会長ともども90代3名、80代57名、70代70名とツアー参加者の平均年齢は75.3歳であった。

26日(土)の「台湾新老人の会」設立記念講演会は台、日、



ブラジルでも台湾でも日本から大勢の会員が同行し、
現地の方々と親しく交歓した



合わせて500名に及ぶ参加者で大盛況に開催された。日野原会長の日本語の講演は同時通訳され、台湾の参加者の共感を得ることができ、283名もの台湾の人々が入会された。「台湾新老人の会」は「新老人の会」海外支部ではなく、「新老人運動」の趣旨を共有し、台湾の法制度のもとで当局の認可を得て、台湾の会員で運営されるものとして日野原会長が名誉会長に就任した。会長には87歳の曹劉金花さんが就任され「余生は楽しく過ごしたい。いきいき生きることで若い人達の目標となるように、そして『新老人の会』が世界の『新老人の会』となることを心から願っています」と挨拶された。

終了後には、主催者のご配慮によるお茶とお菓子でもてなしいただき、同年代の両国の参加者が日本語で親しく交流することができた。

27日(日)の台北輝雄診療所主催講演会では300名近い台湾在住の日系の方々が日野原会長の講演会に参集された。また、本部の「新老人の会」の詩吟とフラダンスサークルのメンバーがそれぞれ練習の成果を披露され、楽しい交流の時をもつことができた。台湾の方々のあたたかい親日的な国民性に触れられたことが何よりの成果で、今後の「新老人の会」海外展開に新しい1ページを加えることとなった。今後の台湾での活動が期待される。

2) ブラジル講演会ツアー

日 程：2008年9月3日(水)～9月17日(水)

2008年度「日本ブラジル移住100周年記念事業」としてブラジル政府の公式招聘を受けて「新老人の会」日野原重明会長ブラジル講演会旅行・交流ツアーが全国から64名の会員の参加を得て14日間の日程で行われた。

日野原会長が講演をされた場所は、リオデジャネイロ、ロンドリーナ、モジ・ダス・クルーゼスの3都市でもとに日系人が多く居住している地域である。わが国の23倍の広い国土をもつブラジルでもあり、参加者の中には遠くからバスを乗り継いで講演に駆けつけた方々もおられた。今回の合計5回の講演会（一般講演3回・いのちの授業1回・教会での講演1回）の延べ参加者は2,000名余になり、一、二世世代だけでなく、ポルトガル語しか解さない三世世代も、そして、日本語学校の小学生までも含む幅広い年代に日野原会長の96歳の力強いメッセージが届けられた。

最初の訪問地南米最大の都市サンパウロから500キロのところにあるロンドリーナは日系人が2万人（人口約50万人）在住しており、コーヒーの栽培地としても知られ、青空と木々の緑と赤土のコントラストが美しい都市であった。ここでの講演会で日野原会長は「ジャングルの奥地に入植し、大人から子どもまで、一家でご苦労された様を昨日移民資料館で学ばせていただいた。運命

は与えられたものであるが、仮に日本が豊かであったら、100年前に笠戸丸で791名の人たちはブラジルには来なかったかもしれない。当時耕作できる畑はない、疫病もある、労働はきつい。そのような環境で朝から晩まで働き、時には日本人同士団結し協力して、窮地をしのぎ成功を得た人も多い。その一世・二世の努力のおかげで子孫は豊かな生活を享受できている。そのことは喜ばしいことではある。しかし、感謝の気持ちをどう表すか、受けた方にその恩を返すこと以外により困っている人に返す考え方や物で返すのではなく、自分の時間を差し出すと言うことを考えてほしい。自分の時間を使って私たちは働き、楽しみ、寝る。どんな人にも共通に時間は与えられており、時間はいのちともいえると思う。今から60年前までは人生は50年であった。それ以後の人生を余生と表現することもあるが、余りの人生でない。平均余命が延びて50歳になってもまだ31年もある。この与えられた時間をどう使うかに挑戦し、皆さんは次世代のモデルになってください」と訴えられた。

さらに、パラナ州（北海道の約2.4倍の面積）の各地から参集した19もの団体の方々が健康体操やコーラス、和太鼓を披露され、日本から参加した会員にも何か披露してほしいとの声がかかり、急遽、即興の伴奏をお願いして日野原会長の指揮のもと「花」「新老人の歌」を合唱して、お集まりの方々から盛大な拍手をいただいた。

この旅で、100年前に渡った日本人たちが異国の地で語りつくせない辛酸ののちに信頼を得、尊敬を集めるようになった歴史の流れの重さに感動し、日本人として誇りに思うと同時に、ブラジル人さらには地球人として、生きていこうとする若い世代に、日本人の持つ「誠実・勤勉・努力」という遺伝子をいかに伝えるべきかを考える次世代の使命感にも心を打たれた。それはグローバル化の進む国際社会にあって、地球に暮らすいかなる国の人々も考えるべきことであり、自己のアイデンティティーを保ちながら争いのない調和のある平和な社会をつくる責務を個々人が背負っていることを感じさせられた旅でもあった。

7 「新老人の会」設立8周年フォーラム

テーマ 共に力をあわせて生きるために
日時 2008年10月18日(土) 13時～16時30分
会場 シェーンバツハ砂防

プログラム

オープニング 「新老人の会」とは

・活動紹介

・第2回表彰式 22支部の活動から 静岡支部、熊本支部

講演 心が大人になる

香山リカ 精神科医

講演 心の若さを保つには

日野原重明 「新老人の会」会長

エンディング 「ミニコンサート」 日野原重明祝祭
管弦楽団

8周年イベント

・サークル発表会・詩吟とフラダンス

・ソフトボール、テニス、ゴルフに
日野原杯を設け授与した

・場内展示

・本部サークル活動の展示

・山梨支部が日野原会長のラベル付きワインを販売

石清水由紀子事務局長の「新老人の会」の活動紹介から始まり、続いてこの1年間に顕著な活動があった支部を表彰した。今回は静岡支部と熊本支部の下記の活動が受賞の理由となった。

静岡支部 ・第2回「新老人の会」ジャンボリーの開催

熊本支部 ・自主制作演劇「医聖宗巴は立ち上がる」の企画と上演

講演およびミニコンサート

心が大人になる 香山リカ先生

香山先生は、体が成長しても心が大人になりきれない若者や「おじんギャル」など現代社会の現象を捉えて、現代に生きる人たちのさまざまな精神構造を分析された。そして「人はもともと一人のなかにさまざまな年齢の要素があり、現代人はそれを年代に関係なく自由に発動している」ことを指摘された。「私たちはこのような社会

設立8周年フォーラム



日野原会長からの熱いメッセージと日野原杯（中）および日野原重明祝祭管弦楽団による記念コンサート（下）



現象にとらわれず、自分の感情を上手に自分にリスペクトしながら、『新老人の会』の目的にあるような大きな目標を持って前向きに生きていきましょう」と語られた。

心の若さを保つには 日野原重明先生

若さの秘訣は新しいことを創めること。日本は現在75歳以上の方が2,017万人、総人口の15.8%を占める。この人たちがいきいきと次世代のモデルとなるような生き方を示していくための秘訣を語られた。

ミニコンサート 日野原重明祝祭管弦楽団

神奈川 brunch の発足を祝して結成された『日野原重明祝祭管弦楽団』。この日はソリストに清水知子さんをお招きし、モーツァルトの歌劇『フィガロの結婚』より「序曲」「伯爵夫人のカパティーナ」などの祝い曲で華やかさを添えてくださった。

8 第2回「新老人の会」ジャンボリーの開催（表3）

新老人が若い人とどう手を結ぶか

日時：7月4日(金)・5日(土)

会場：1日目 グランドホテル浜松 参加者1,291名

2日目 浜松市内観光 参加者98名

第1部

- ・開会挨拶 室久敏三郎 静岡支部世話人代表
- ・祝辞 鈴木康友 浜松市長
- ・講演 新老人が若い人とどう手を結ぶか
日野原重明会長

- ・「新老人の会」とは 石清水由紀子事務局長

- ・合唱「ふるさと」

第2部 全国支部のユニークな活動から（参加者数203名）

本部からの活動報告

「新老人の会」発展のための展望と1年後の目標会員数を得るための戦略

「結果的に会員数増加に」……兵庫支部の取り組み
兵庫支部には、会員相互の連携を深めるために始めた「地区交流会」について報告をしていただいた。「地区」は30分くらいで集まれる地域と限定し、地区ごとに4～5名の世話人をおいて、地区集会を開催している。この活動が定着することで「支え合う仲間」ができ、結果的に退会者が減り、また地区の会員が友人知人を伴って参加することで会員増加へとつながっている。

「認知症予防のためのボランティア活動」……静岡支部

老人性の認知症は、人間の脳の最高次機能である全頭前野の機能低下であることに注目し、賦活実地調査を進めていると報告された。今までに「新老人の会」会員約100名、全体では約1,000名の調査を終えている。

「地球緑化への取り組み」……九州支部

2004年4月に『樹人千年の会』を発足させ、美しい里山を後世に残そうと始めた取り組みは、同年ノーベル平和賞を受けたワンガリー・マータイ女史の影響を受け、南半球にユーカリを植える活動へと視野を広げている。2010年までに1,000本の植樹を目標に活動を展開中である。

ジャンボリーの講演会と
当日のプログラム



「いのちと平和の森」活動……信州支部

九州支部が発案した緑化運動への取り組みを受けて、信州支部では松本市と協力関係を持ちながら荒れ果てた里山を再生して、NPO 法人「いのちと平和の森」を設立し活動を展開している。また、ここで生じる間伐材は、信州支部が進めている「いのちの出前授業」で教材として活用している。

『われらの日々 - 戦前・戦中のこどもたち』出版活動……北東北支部

日中戦争・太平洋戦争時の青森県の子もたちがどのような生活をしてきたかを語った記録集を出版。1,500部を「企画集団ぶりずむ」から刊行し完売した。

「燃える思いを演劇に」 - 医聖宗巴を演劇に - ……熊本支部

「かくれた郷土の偉人を発掘し、世に伝えよう」と会員の手づくりで始めた演劇上映企画は、このことを成し遂げたことで会員の親睦が深まったという象徴的な例が紹介された。

「いのちの授業」の実例報告……岡山支部

教育委員会に働きかけ、教育委員会主催の小学校校長会でPRの場をもらうことに成功し、これを契機に会員による「いのちの授業」が実施された。またこの活動が基となり、「戦争体験を語る」授業も実現した。

第3部 懇親会 (参加者数 214名)

全国から集まった約200人の会員が親睦を深めた。

アトラクションには「遠山詠一とゴールドンスターズ」の軽快なブラスバンドの演奏が会場の雰囲気盛り上げ、楽しい会となった。

7月5日 市内観光 「静岡支部」の地元、浜松の地域性を他支部の方々に理解してもらうことを目的に、会員による案内で市内見学が実施された。参加者は98名

であった。

9 「新老人の会」本部サークル活動

「新老人の会」本部でのユニークな活動の1つに、30種類にもおよぶサークル活動がある。活動の大半が会員からの提案であり、主宰者は本部事務局と運営方法について相談し活動へと進めてきた。また日野原会長自らの経験を生かしたオリジナルのアンチエイジングのためのサークルも、大変好評を博している。以下発足順に本年度の活動について報告する。()内は主宰者。

1. 俳句の会 (木下星城さん)

本部の活動に参加できない地方の方や外出のできない方のために会報の誌面で活動に参加していただいている。句会を持たずに形式にもこだわらず、俳句を通して人生百歳を生き抜く知恵を楽しく修得しようという木下先生の方針のもと、全国から俳句が寄せられている。ハガキでご投句いただき、木下先生の添削後、隔月で会報に掲載している。毎回好評で、50名以上が参加している。

本年は発足7年を記念して、5句以上の出句者を対象に総勢66名の合同句集『百歳青春』を出版した。

2. パソコン教室

第2・第4金曜日に開催。初心者を対象に、健康教育サービスセンターで養成されたパソコンボランティアの有志がマンツーマンで指導にあたる。1回2時間、500円(機材使用料として)。

3. テニス愛好会 (玉木恕乎さん)

長年慣れ親しんできたテニスを年齢に合わせて生涯楽しもうと愛好家が集まった。本年は設立8周年フォーラムにあわせて全国大会を企画。「日野原杯」を授与した。偶数月の第二金曜日、国立競技場西コートで開催。それぞれが他のシニア大会で活躍するなど実力者が揃っている。登録者15名。

4. コーラス

指導者 桑原妙子さん(指揮)、ピアノ伴奏 鴛田恵さん
毎月2回、原則として第2・第4火曜日に、聖路加国際病院のトイスラーホールで練習している。登録メンバー87名と最も人気の高い活動である。現在ソプラノが47名、アルト31名、テノール・バリトン9名という構成である。

11月8日には横浜みなとみらいホールで開催された恒例の「ヴィザン（人生百歳）・ジョイント・コーラスフェスティバル」に参加した。

5. スローピッチソフトボール（小泉清昭さん）

スローピッチソフトボール（SPSB）を楽しみ「健康と生きがい」をモットーとして親睦を深めている。恒例の『日野原カップ争奪戦』は第4回となり、9月20日・21日に東京の大田スタジアムにて開催されたが、21日は雨天中止となった。本年度は女性メンバー3名も加わり活気づいている。登録者は7名。現在会員募集中である。

練習日 毎週水曜日 10時～12時 本郷台球場にて

6. 共に語ろう会（実行委員）

毎月1回、テーマを決めて、気軽に自由に話し合いをもっている。

今年度は設立8周年フォーラムにあわせて「戦前、戦中、戦後を生き抜いてきた智慧をどう伝えていくべきか」をテーマに全国大会も開催した。毎月のテーマは「身の整理」「後期高齢者について」「愛する、創める、耐えること」など。毎回15名程度が参加。

7. クラシック音楽を楽しむ会（井上太郎さん）

毎回モーツァルト愛好家の井上さんが、テーマを選び選曲と曲にまつわるエピソードをご紹介くださっている。また、ピアノ伴奏にあわせて小島亮一さんのバイオリン演奏、二期会のバス歌手として活躍されている新保堯司さんの歌声もお楽しみいただいている。毎回10名程度が参加。

5月12日（月）「フルートとハーブの美しい音色」

7月14日（月）「名旋律をさぐる - イタリアの音楽から」

なお、以降は会場の都合で休会となっている。

8. 詩吟の会

指導者 古田優龍さん

日本吟導学院の古田先生の指導のもと開催している。当初は初心者を対象に開催していたが、発足6年となりひとり一人のレベルも上がっている。4月の台湾講演会ツアーでは、日野原会長の講演会の後、有志が舞台に立った。また設立8周年フォーラムでは会員が「偶成」「古城」を、古田ご夫妻が「白鷺」を披露。詩吟の醍醐味をPRした。毎月第1第3金曜日に開催。登録者16名。

9. 山の会（藤田貞さん）

高齢者でも無理のない山登りを楽しんでもらおうと山好きの経験者が企画している。隔月に開催。最高齢の参加者は92歳の男性。毎回10～15名程度で開催している。

5月28日（水）「奥日光・切込刈込湖」

7月23・24日（水・木）「尾瀬沼・沼山峠ルート」

9月3・4日（水・木）「木曽駒ヶ岳」

11月12日（水）「陣馬山」

1月21日（水）「南房総・花ハイク（高塚山）」

10. 生け花を楽しむ会（峯岸千栄子さん）

峯岸さんが稽古場を開放して開催している。稽古場での練習以外にも、自然散策や花展などの見学などを行っている。現在3名が参加。

稽古場 世田谷区世田谷教室・大泉教室

月2回第2・第4木曜日に実施

11. 漢字書道を楽しむ会（加藤良行さん）

書を通して穏やかな時間を共有する仲間づくりが育まれてきた。本年度は日野原会長も大作に挑まれ、現在その成果が健康教育サービスセンターのロビーに飾られている。

毎月第1・第3木曜日の午後。登録者10名

12. 朗読の会

指導者 榎部妙有さん

榎部先生の指導のもと毎月第2・第4月曜日に開催。ひとり一人がご自分の好きな題材を選び個々に指導を受けている。日本語を大切に、言葉のもつ意味を考えながらどう伝えるかというレベルの高い目標に妥協をせずに取り組んでいる。登録者10名。

13. 英語の会

初級、中級に分かれて開催。初級は中学生程度の英語力に合わせて会話を主に学んでいる。中級は持ち回りで毎回違うテーマをフリートーキングする。また発音はネイティブ・スピーカーの藤野貞子さんから指導を受けている。毎月第1・第3水曜日午前中に開催。初級登録者10名。中級登録者15名。

14. 数学の会（宮川ユリ子さん）

元数学教師の宮川ユリ子さんが「頭の体操」として数学の会を主宰している。会では中学の初歩程度に焦点を

本部サークル活動もますます活発に



フラダンスと詩吟
は8周年フォーラムで舞台上に登場



上からバレエ・ストレッチ、
健康体操、丹田呼吸法



絞り、プラスマイナスの数の計算や数学に関する面白い話などを紹介している。

第3月曜日午後

15. 前向きに考える集い (津村和男さん)

不定期でテーマを決めて会合を持ち勉強会を開催。

4月23日(水) 「新老人」の老後を考えてみませんか
葉っぱのフレディヘルパーセンター

7月29日(火) 「介護保険の利用の仕方」を理解できますか

12月10日(水) 「私たちが日常の暮らしの中でいつも明るく暮らすには」 江見明夫さん

世話人8名。毎回参加者は20～40名。

16. 歴史探訪の会 (荒木金四郎さん)

身近な歴史、風土を再確認する。現地のシルバーボランティアガイドの解説により学識を深めている。隔月開催。毎回参加者は20名程度。

4月25日(金) 横浜のシンボル三つの塔を巡る

6月27日(金) 新装の氷川丸と日本郵船歴史博物館を見学

10月31日(金) 目黒不動尊から五百羅漢を訪ねる

12月12日(金) 旧東海道・品川宿界隈を訪れる

2月20日(金) 世田谷代官跡・豪徳寺界隈を訪ねる

17. 新老人が世界を語り合おう (吾郷慶一さん・儀我壮一郎さん)

毎月1回開催し、内外情報を交換し合ってきた。本年は発案者であり、主宰を務めてきた吾郷さんから儀我さんへとバトンタッチされた。

18. フラダンスの会 (宮川ユリ子さん)

現在60名以上の方が登録されている。台湾講演会ツアーや「新老人の会」8周年記念講演会などで練習の成果を披露した。また山梨支部とのフラダンス交流も実現した。今年には日野原会長がフラダンスのために作詞した『待ち望む平和の島』に、宮川先生が振り付けをして初披露した。

19. 中高年からのスキー教室 (高橋巖さん)

長野県妙高高原・池の平スキー教室は2月6日から8日開催。スキーシーズンを前に11月12日には会員有志が集まり会食し交流を深めた。

20. 丹田呼吸法 (櫻井忠敬さん)

いつでも無理なくできる軽い動作・操作を繰り返し、普段使っていない呼吸筋を鍛錬しながら、正しい呼吸からだにより呼吸法を身につける。日常生活の中に組み込む法を学ぶ。丹田呼吸法は、自然治癒力、免疫力を高



テニス同好会

山の会



め、心のリフレッシュになると好評である。月2回2・4火曜日。

21. 中国生まれの諺 (山口左熊さん)

毎月1回第2木曜日に開催。本年は2005年からはじめた本サークルの集大成として、山口先生92歳の誕生日にあわせて『中国生まれの諺 その源を探る』を発行した。

22. 水彩画教室

指導者 茅野玲子さん

「誰でも手軽に描けて楽しめる」そんな絵画の会を持ちたいという思いを受けてくださる適任の指導者を得て開催した。茅野さんは「絵にはうまいへたはありません。それぞれの個性と生き方が感じられる豊かなもの」といわれる。この教室ではその個性を表現するコツを学ぶことができる。1コース6回。1回1,500円。本年は3回開催した。

23. 短歌の会 (川合千鶴子さん)

川合さんは、短歌を作ることは自分の心を見つめること。季節に触れて、自分の心に触れて「存命の喜び」を知ることだとおっしゃいます。年齢を重ねて、外に自由に出かけられなくなったとしても、歌づくりは心の糧とな

ります。誌面を通しての全国交流の場として、毎回30名ほどの人が参加している。

24. 川柳の会 (大野風柳さん)

ご自分の川柳結社「柳都」が60周年を迎えた大野さんは、新潟支部に属する。誌面を通して全国交流に取り組んでいる。毎回30～40名の方々が個性豊かな川柳を寄せている。会員に作品を投稿していただき、添削後、隔月の会報にて発表。

25. 皆で唄いましょう

今まで挑戦したことのない「自ら作詞・作曲し自分で唄う」ことを実行し、あちこちの介護ホームに慰問している。ピアノ伴奏はプロとして活躍している東京音楽大学を首席で卒業された宇井優先生が担当。参加者は毎回20～30名程度。1回2,000円(会場費、講師謝金等)

26. さっそうクラブ

指導者 本田愛子さん

日野原会長発案による。歩き方ひとつで気持ちも若々しくなってくるという日野原会長の持論がかたちとなった。

モデル出身の本田さんが、美しく安全な歩き方と姿勢、立ち居振る舞いを取り入れながら、最終日にはテーブル

マナーも学ぶ。1コース6回。1回500円。年4回開催。

27. 源氏物語購読会 (竹田照子さん)

日本古典文学の最高峰とされる源氏物語の原文を、声を出して読んでみる。原文には主語も句読点もなく、言葉の切り方で意味が違ってしまふこと、敬語の使い方、主人公を知るなどを学んでいる。目標は自分流の訳本をつくること。

毎回10名程度が集まり声に出して読み解くことで、日本語の美しさを再発見している。

28. パレエ・ストレッチ (井上みどりさん)

これも「新老人」ならではの企画。音楽に合わせて、呼吸をしながら身体を動かすことで、身体のしなやかな動きを取り戻します。普段意識しない小さな筋肉を動かすことで、骨盤の周りの筋肉などがしっかりと鍛えられ、歩くことも楽になります。

これより本年度から開催

29. いきいき健康体操 (小林貴子さん)

今の自分の体力を少しでも長く保持します。いろいろな音楽に合わせて、ストレッチ体操・ゴムチューブなどを使って脚力強化、やさしいダンス、指遊びなどをします。本年度(2008年度)より開催、月2回実施

30. 囲碁を楽しむ会 (宮下久吉さん)

頭脳活性化のために提案。毎月第4月曜日に池袋の『西池袋囲碁サロン』にて開催。1回700円

31. 紅茶を楽しむ会

6年にわたるインドでの生活で紅茶に魅了されたという会員の川岸邦江さんが提案され、2回にわたって開催し延べ31名の参加であった。

1回目：6月11日(水) ダージリンティーの魅力

2回目：6月25日(水) インドのティータイムとイギリスのアフタヌーンティ

10 本部主催の催しものなど

1. 「対馬藩にみる鎖国時代の国際交流」ビデオ上映
波多野勝彦さん

一般の歴史からは抹殺されている江戸時代の対馬藩と朝鮮との国際交流を追ったドキュメンタリー映画の上映。脚本・監督を手がけた波多野さんの解説をもとに質疑応答を交えてお話をうかがった。参加者5名

2. 「みんなで日本に理想を掲げよう」 野村昇平さん

昨年『国の理想と憲法 - 国際環境平和国家への道』を出版された野村先生に、あらためて平和についての提言をお聞きした。先生は「日本ではここ数年、政治の混迷と、かつてない不況に陥っています。この間、憲法改正問題はどこかへ行ってしまったような雰囲気か漂っています。しかしながら、2010年5月18日には国民投票法が施行されることを考えると、いずれ再び憲法改正への動きが活発になることが予想されます。今、こういう時期だからこそ、私たちは真剣に考えていきましょう」と話された。参加者32名

11 「新老人の会」ヘルス・リサーチ・ボランティア

2002年11月に本格的に調査が開始されて以来、2008年11月に5年目を迎えた研究である。この間、2005年には調査の中間報告をまとめて冊子を発行したほか、関連学会への報告や学術雑誌への投稿などに実績をあげてきた。本年度は、130名が該当し、5年後の再調査のために種々の調査用紙による健康調査のほか、前回とほぼ同様の検査(新老人ドック)を港区三田のライフ・プランニング・クリニックで遺伝子検査を除く検査項目に、中心静脈圧検査、心臓ホルモン(BNP)の検査を加えた検査を実施した。

報告 / 石清水由紀子(「新老人の会」事務局長)

表1 地方支部の運営と活動

支部名	人数 (男/女)	主な活動	サークル
九州支部	391 (152/23)	定例会, 樹人千年の会, 模擬患者の会, オーストラリア植樹	コーラス, 英会話, 韓国語, 能古語ろう会, 傾聴, スケッチ, 博多踊り, 旅
広島支部	266 (115/151)	新緑・山菜を楽しむ, 観劇, リンゴ狩り, 腹臥位療法セミナー	折り紙, コーラス
兵庫支部	411 (142/269)	会員懇親会, イキイキ講座, 地区交流会	戦争体験, コーラス, 写真, オペラ鑑賞, 散策, パソコン, 朗読, エッセイ, 英語, 気功, ヨガ
京滋支部	216 (83/133)	年6回の定例会	パソコン, コーラス, プリザーブドフラワー, ハーブ, 史跡探訪, 医療を語ろう会
阪奈和支部	387 (141/246)	懇親会	コーラス
東海支部	255 (74/136)	定例会, プチ集会	英語, 世界の窓, 俳句, 回想クラブ, 頭の体操, コーラス, 自分史朗読, 料理教室, 話題の広場, ガイドツアー他
信州支部	205 (92/113)	いのちの出前授業, 日野原先生の生き方に学ぶ会, 「いのちと平和の森」事業	エルダーサロン会, 緑体法講習会, プランチ例会
北海道支部	258 (95/163)	例会, バスツアー, 札幌大通公園清掃ウォーキング	歴史を学ぶ会, お話交流会, パークゴルフ
東北支部	186 (88/98)	会員の集い, 講演会	アフタヌーンティ, ビューティウォーキング, ハーブ
山梨支部	88 (48/40)	定期総会, ゴルフコンペ, 親睦交流サロン	自然・歴史探訪, 雑学塾, 光輝健康いのちの会, 読み語り, ベタンク, ハワイアンダンス, ゴルフ
島根支部	55 (31/24)	年2回講演と音楽	健康文化研究会, 健康音楽研究会, 俳句・短歌研究会
四国支部	186 (73/113)	講演会, 花火大会, 会員の集い, 脳ドック, アクアクリニック	コーラス
鳥取支部	107 (52/55)	健康増進運動, 認知症予防, 会員の集い, 健康講座	
新潟支部	117 (81/95)	会員の集い	
福島支部	444 (213/221)	研修旅行, 「道しるべ」フォーラム, 賀詞交換会	フラダンス
熊本支部	219 (84/135)	植樹, 演劇活動	オカリナ, ビーズジュエリー, 南京玉すだれ, ゴルフ, 唱歌・童謡, 戦争を語り継ぐ
静岡支部	276 (118/158)	ジャンボリー共催, 輝きサロン, 毎月のサロン, 輝句会	
宮崎支部	77 (31/46)	いのちの授業	
鹿児島支部	160 (52/108)	郊外研修	コーラス, お話会, 介護施設でのボランティア
富山支部	42 (29/13)	北陸連合会議	
岡山支部	168 (70/98)	月例会, 旅行, 忘年会	くれない句会, 絵手紙の会, グループひととき
三重支部	258 (104/154)	月例会, 会員による小講演会	コーラス, リズム体操
山口支部	305 (157/148)	月例会, 読書会, 卓話, 日野原文庫設置	
北東北支部	116 (54/62)	研修旅行, 戦前・戦後の子どもたち続編計画	
群馬支部	131 (41/90)	黄色いピアノ活動	
石川支部	230 (90/141)	会員の集い	
沖縄支部	215 (79/136)	総会, 老人施設の慰問, チャリティコンサート	カラオケ

表2 地方支部フォーラム

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
4	2	水	信州支部5周年記念フォーラム 上田市民会館 13:00~17:00 ・講演:「若くさわやかに生きる」 若者は新老人を目標に,新老人は若いスピリットを ・手話ダンス:曲目「たのしいね」「ピリブ(信じる)」 ・コーラス:曲目「花」「世界に一つだけの花」 ・コーラス:曲目「おさななじみストーリー」 ・コーラス:曲目「新老人の歌」 ・みんなで一緒に歌いましょう!:曲目「ふるさと」	日野原 重明 サンフラワーズ 上田少年少女合唱団 コールド・デュ・ クラージュ 合唱団と有志 指揮:日野原 重明	1400
	5	土	神奈川ランチフォーラム 関内ホール 13:30~16:30 ・講演:「連れ立ってさわやかに生きる生き方」 すべての年代の方々に ・対談:「生きがいをもたらすものは何か」 中田宏 VS 日野原重明 ・コンサート:曲目「ヴィヴァルディ バイオリン協奏曲「四季」より春・夏」 「愛の歌」	日野原 重明 中田 宏 日野原重明 祝祭管弦楽団 指揮:日野原 重明	1060
	17	金	四国支部3周年記念フォーラム 高知県立県民文化ホール 14:00~16:30 ・記念講演:「人生の新しい生き方」 土佐出身の中濱万次郎に刺激されて ・ミニコンサート 曲目:「さくら」「ロマンチストの豚」「星に願いを」「踊り明かそう」 「神よ,平和を与えたまえ」「青い空は」「千の風になって」「新老人の歌」	日野原 重明 青い空合唱団 ソプラノソロ: 岡本 知高, 寿美 玲子 ピアノ:榎本 潤, 川野 尚子 フルート:筒井 明子	1500
	19	土	新潟支部3周年記念フォーラム 新潟テルサホール 13:00~16:30 ・ミニコンサート 曲目:「アヴェ・マリア」「チューランドットより誰も寝てはならぬ」 「エターナリー」「ジュリーにくちづけ」「コンドルは飛んでいく」 ・講演:「生き方の選択 さわやかに生きる」	ソプラノ:雨谷 麻世 日野原 重明	1176
5	10	土	九州支部7周年記念フォーラム 電気ホール 13:00~16:00 新老人の生き方が未来を創る ・「101歳先生」 ・コーラス ・ライアー演奏	日野原 重明 ■地 三郎 コールひまわり 福岡ライアーの会 光の樹	950
	21	水	第5回近畿フォーラム 同志社大学寒梅館ハーディーホール 14:00~16:30 若く健やかに生きる知恵と行動 ・前奏:「浜辺の歌」「バラが咲いた」「翼をください」 ・客演演奏:ハープ ・講演:「若く健やかに生きる知恵と行動」	京滋支部・兵庫支部コー ラスサークル合同演奏 内田 奈織 日野原 重明	1000
	28	水	北東北支部設立記念フォーラム 弘前市民会館大ホール 13:00~15:30 輝いて生きる ・合唱 曲目「ともしび」「千の風になって」「いざ起て戦人よ」「新老人の歌」 ・記念講演:「輝いて生きる」	コール・デル・ メディコ 指揮:川村 昇一郎 ピアノ:笹森 建英 日野原 重明	1450
6	5	木	山梨支部3周年記念フォーラム 山梨学院大学メモリアルホール 14:50~16:00 「生命(いのち)とどう向き合うか」 いま私が伝えたい大切なこと 特別講演:「生命(いのち)とどう向き合うか」	日野原 重明	488

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
6	6	金	「新老人の会」阪奈和支部5周年記念フォーラム 大阪国際会議場12階特別会議場 13:00~16:30 ・コーラス: 曲目「にんげんっていいな」「みんなで作ろう」「歌えバンバン」 ・講演: 「こころを耕す」 ・リトミック体操 ・講演: 「新老人を生かす生きがいとは」	三郷幼稚園 津嶋恭太 先生と年長ゆり組34名 山田 法胤 日野原 重明	400
	10	火	「新老人の会」山口支部発足記念フォーラム 萩市民会館 15:00~17:15 「健やかに生きるこつ」 若い人も誘っての新老人運動ビジョン ・オープニングコンサート 曲目: 「いい日旅立ち」「愛の賛歌」「ラ・クンパルシータ」「舟歌」 「高原列車は行く」 ・記念講演: 「健やかに生きるコツ」 若い人も誘っての新老人運動のビジョン ・みんなでうたいましょう 曲目: 「パリの空の下で」「初恋」「誰も寝てはならない」「チェルダッシュ」 「千の風に乗って」「新老人の歌」	後藤宏男と北九州ハー モニカトリオ 日野原 重明 ピアノ: 山根 浩志 サクソフォン: 安部 浩信	811
	11	水	「新老人の会」山口支部発足記念フォーラム 宇部全日空ホテル国際会議場 15:00~17:15 「健やかに生きるこつ」 若い人も誘っての新老人運動ビジョン ・オープニングコンサート 曲目: 「踊り明かそう」「ラ・クンパルシータ」「ダットン人の踊り」「ラルゴ」 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク第1楽章」 ・記念講演: 「健やかに生きるコツ」 若い人も誘っての新老人運動のビジョン ・みんなでうたいましょう	スピカ管弦四重奏団 日野原 重明 スピカ管弦四重奏団	1208
	27	金	旭川フォーラム 上川郡東神楽町ふれあい交流館 14:00~16:00 ・第1部: 男性四十奏「ナチュラルフォー」 ・第2部: 講演: 「各年代の新しい生き方」 新老人の会の発想もとにして	ハーモニ 音楽療法研究会 日野原 重明	376
7	19	土	群馬支部設立記念フォーラム 前橋市総合福祉会館 14:00~16:30 「輝いて生きる」 ・講演: 「輝いて生きる」 ・コンサート: 曲目: 「幸せを売る男」「人生に乾杯」	日野原 重明 芦野 宏	598
8	27	水	三重支部1周年記念フォーラム 前四日市市文化会館第一ホール 13:30~16:15 「生きがいある人生」 各年代層に訴えたいこと ・講演: 「生きがいある人生」 各年代層に訴えたいこと 三重ゆかりのミニコンサート ・プロローグ: 曲目「愛の挨拶」 ・コンサート: ・みんなで歌いましょう.....会場の皆様といっしょに	日野原 重明 司会: 若杉 洋子 クラリネット: 加藤 あゆみ ピアノ: 塩川 由華 合唱団あけぼの, 新老人合唱クラブ	1800
9	20	土	岡山支部1周年記念フォーラム 岡山市市民会館 13:30~16:30 「生きかたの選択」 新老人をモデルに ・アトラクション: コーラス ・講演: 「生きかたの選択 新老人をモデルに」	佐々木 英代 日野原 重明	1600
	28	日	鳥取支部3周年記念フォーラム 米子全日空ホテル2階飛鳥 15:30~17:30 「生き方の新しい選択」 そのモデルをどう求めるか ・講演「生き方の新しい選択 そのモデルをどう求めるか」	日野原 重明	550
10	1	水	東海支部6周年記念フォーラム 中央大学文化市民会館ブルニエホール 12:50~16:00 ~実り豊かな、文化の秋を~ ・記念講演: 「より若く、さわやかに生きる~各年代のかたがたのために~」 ・コンサート: 「愛・地球博」 シンボルアーティスト	日野原 重明 「愛・地球博」 記念市民合唱団 小沢 祐美子	1200

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
10	7	木	福島支部2周年記念フォーラム 福島県文化センター大ホール 14:00~16:00 ・講演:「私たちの生きる道 若さと平和が育まれる」 日野原先生とともに楽しいコラボレーション ・合唱: 曲目「みんなひとつの生命(いのち)だから」 「この(ほし)のゆくえ」「ふるさと」	日野原 重明 福島市立森合小学校 合唱クラブ (3~6年生35名)	1600
	18	土	「新老人の会」8周年記念講演会 シェンパツハ・サボー 13:30~16:30 (サークル交流会 12:00~12:45) ~共に力を合わせて生きるために~ ・サークル交流会 皆さん一緒に吟じましょう レッツ・フラダンス 日野原杯トロフィー授与 ・オープニング:「新老人の会」とは ・表彰式.....静岡支部(第2回「新老人の会」ジャンボリー開催協力) 熊本支部(自主制作演劇「医聖・宗巴は立ち上がる」の上演) ・講演1:「心が大人になる」 ・講演2:「心の若さを保つには」 ・ミニコンサート 皆さんと一緒に唄いましょう「新老人の歌」	石清水 由紀子 香山 リカ 日野原 重明 日野原重明 祝祭管弦楽団	625
11	9	日	島根支部3周年記念フォーラム 松江市総合福祉センター大ホール 14:00~16:00 ~講演と心のコンサート~ ・講演:「生きかたのモデルを求めて」 ~若い人とタイアップしての新老人運動の展開~ 第2部: 詩朗読 第3部: 音楽の部	日野原 重明 日野原 重明 ピアノ(作曲): 雁瀬 由香 ヴァイオリン: 木村 綾乃 ピアノ連弾:堀 貴史	280
	11	火	石川支部設立・北陸支部合同記念フォーラム 金沢文化ホール 12:30~16:30 ~輝いて生きる~ ・講演:「輝いて生きる」 ・コンサート:父と子の子の唄 曲目「知りたくないの」「今日でお別れ」「愛の賛歌」「忘れな草をあなたに」	日野原 重明 菅原 洋一 菅原 英介	930
12	4	木	熊本支部3周年記念フォーラム ホテル日航熊本 12:45~16:00 ~生き方のモデルを求めて~ ・講演:「生き方のモデルを求めて」 各年代層の方々へ 第2部:くつろぎのコンサート ~講演のあとは混声合唱のf分の1のゆらぎでおくつろぎを~	日野原 重明 デメーテル男性合唱団 フリーデ・コール ルーテルマミー コーラス 指揮:工藤 勇壺	1100
	20	土	兵庫支部6周年記念フォーラム 西山記念会館大ホール 13:30~16:30 ~生きがいのある人生を求めて~ いのちを輝かせる音楽とアートのふれあい ・混声合唱 曲目:「エーデルワイス」「組曲 ふるさとと四季」「Believe」 「クリスマス・キャロル」 ・フルートとピアノ 曲目:「タイスの瞑想曲」「虹の彼方に」「冬メドレー」「ホワイトクリスマス」 ・男声合唱 曲目:「シェナンドー」「竹田の子守唄」 「ああベツレヘムよ(クリスマス曲) イギリス民謡」「羊とともに」 「川の流れるように」「高原列車は行く」「明日に架ける橋」 「組曲「島よ」から」 ・講演:「生きがいある人生を求めて」 いのちを輝かせる音楽とアートのふれあい-	エーデルワイス 指揮:三木 比奈子 伴奏:田中 雅子 フルート:堀 彩 ピアノ:堀 早苗 クレセントハーモニー 日野原 重明	660

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
12	21	日	京滋支部6周年記念フォーラム 同志社新島記念講堂 14:00~16:45 ～生きがいある人生を求めて～ 音楽と芸術(アート)とのふれあい ・前奏:パイプオルガン演奏 ・客演演奏(パラグアイハープ) ・講演:「生きがいのある人生を求めて」-音楽と芸術(アート)とのふれあい- ・京滋支部・兵庫支部合同コーラス	丸田 恵都子 日野原 重明 指揮:吉田 百合子	620
1	26	月	沖縄支部発足記念講演会 那覇市民会館 19:00~21:30 ～輝いて生きる～ ・かぎやで風.....島袋千尋会 ・講演:「輝いて生きる」 ・「新老人の会」の歌 ・沖縄の歌.....曲目「芭蕉布」「ていんさぐぬ花」	島袋 光尋・ 島袋 君子 日野原 重明 ピアノ:川満 美紀子 合唱:女性合唱団 「星砂」	1460
	27	火	沖縄支部発足記念講演会 うるま市民芸術劇場 13:30~16:00 ～輝いて生きる～ ・かぎやで風 ・講演:「輝いて生きる」 ・「新老人の会」の歌 ・沖縄の歌.....曲目「芭蕉布」「ていんさぐぬ花」	国吉 安子・真由美 日野原 重明 ピアノ:鈴木 聖子 合唱:外間 早苗・ 安次富 あさみ 他8名	900
2	13	金	鹿児島支部1周年記念フォーラム 鹿児島サンロイヤルホテル2F 13:30~16:30 生き方の発想の発想の転換 各世代の方々に ・「新老人の会」熊本支部会員による演舞及び映写 演舞:「薩摩神刀自然流」 福住麗祥(薩摩神刀自然流・詩舞道師範), 松本祥瑩(門弟), 伊志嶺麗香(門弟), 奥田良樹(門弟) 映写:西南戦争秘聞・舞台劇「医聖宗己は立ち上がる」 映写:江上彰浩(ビデオ・CD担当), 世話係:徳永武久(交渉・会計等一切) ・講演:「生き方の発想の転換 各世代の方々に」 ・コーラス:「新老人のうた」合唱	挨拶:内野 元 司会:寿咲 亜似 日野原 重明 鹿児島支部会員有志 「カナリア会」	1000
3	13	金	阪奈和支部・和歌山ランチフォーラム 和歌山市民会館大ホール 13:30~17:00 ・講演:「若々しい脳を保つために」 ・音楽とのふれあい ・講演:「あなたの生き方のモデル」 ・合唱	板倉 徹 ハープ奏者: 内田 奈緒 フルート奏者: 岡本 果奈 日野原 重明 男声合唱「ほえーる」	1450
	20	金	宮崎支部3周年記念フォーラム in のべおか 延岡総合文化センター・大ホール 13:30~15:30 ～生きがいある人生を求めて～ ・ミニコンサート 曲目:「Seligkeit」「オペラ アンナ・ボレーナ」「春に寄せて」「いのちのうた」 ・記念講演:「生きがいある人生を求めて」	ソプラノ:國友 響子 ピアノ:津野田 淑 日野原 重明	1300

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
3	29	日	東北支部 5周年記念フォーラム 仙台サンプラザ大ホール 13:30~15:30 「生き方の発想の転換」 各世代の方々に ・ 歓迎の演奏 曲目:「崖の上のポニョ」 ・ 特別講演:「生き方の発想の転換」 各世代の方々に ・ 演奏 曲目「負けないで」 ・ ソシアルダンスのデモ ・ 演奏 曲目「トランペット吹きの休日」 「ポップス描写曲 メインストリートで」「上を向いて歩こう」	司会・進行: 井澤 祐香 アナウンス: 佐久間 裕子 ヒノハラ・キネン・ウィ ンド・オーケストラと 子供たち 日野原 重明 ヒノハラ・キネン・ウィ ンド・オーケストラ 指揮:浜田 茂 朝倉 隆夫 ヒノハラ・キネン・ウィ ンド・オーケストラ 指揮:浜田 茂	1900

開催回数合計 31回, 参加人数合計 32,892名

表3 第2回ジャンボリー
2008年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数
7	4	金	第2回ジャンボリー・静岡大会 1日目 新老人が若い人とどう手をつなぐか 第一部:講演会 グランドホテル浜松「鳳の間」 13:00~15:00 ・ 開会挨拶 ・ 祝辞 ・ 講演:「新老人が若い人とどう手をつなぐか」 ・ 「新老人の会」とは ・ 全員合唱: 曲目「新老人の歌」「ふるさと」 ・ 閉会/花束贈呈 第二部:会員研修会 グランドホテル浜松「孔雀の間」 15:30~17:30 ~支部自慢あれこれ~ ・ 本部からの活動報告 ・ 今後の展望, 会員動向のデータとともに ・ 兵庫支部: 会員の絆を強める支部運営 地区交流会の試み ・ 静岡支部: 認知症予防のためのボランティア活動 ・ 九州支部: 「地球を考える」 樹人千年の会から南半球にユーカリを植えるまで ・ 信州支部: 「いのちと平和の森」活動 ・ 北東北支部: 「われらの日々 戦前・戦中のこどもたち」 出版活動報告 ・ 熊本支部: 燃える想いを演劇に ・ 岡山支部: 「いのちの授業」 岡山支部の実例報告 ・ 静岡支部: 「いのちの授業」 感想文朗読と表彰状授与 ・ 総評	室久 敏三郎 (静岡支部世話人代表) 鈴木 康友 (浜松市長) 日野原 重明 (「新老人の会」会長) 石清水 由紀子 (「新老人の会」事務局長) 指揮: 日野原 重明 (「新老人の会」会長)	1291
			第三部: 会員懇親会 グランドホテル浜松「鳳の間」 18:00~20:00 ・ アトラクション	石清水 由紀子 (「新老人の会」事務局長) 松原 博義 (本部世話人) 富永 純男 (兵庫支部世話人) 志村 孚城 (静岡支部) 高口 貴子 (九州支部) 横内 祐一郎 (信州支部世話人) 吉田 豊 (北東北支部世話人)	203
			遠山詠一とゴールデンスターズ	小山 和作 (熊本支部世話人) 村岡 知子 (岡山支部世話人) 浜松市立・有玉小学校 日野原 重明 (「新老人の会」会長)	214
	5	土	第2回ジャンボリー・静岡大会 2日目 エクスカーション ・ 航空自衛隊浜松基地広報館見学 ・ ウェルネス浜名湖見学 ・ 東急ハーベストにて昼食 ・ つなぎパイ工場見学 ・ 浜松市楽器博物館見学		98

ヘルスボランティアの育成と活動

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

ライフ・プランニング・センター（以下、当センター）では、オフィスボランティア・血圧測定ボランティア・模擬患者ボランティア・「新老人の会」サポートボランティア・LPクリニックボランティア・ピースハウスボランティアの6領域で延べ230名のボランティアが財団のさまざまな活動をサポートしている。これらボランティアの教育は1982年から続くヘルスボランティア講座で行われてきたが、この講座は当財団内部での人材養成にとどまらず、病院・福祉介護施設・地域福祉の分野で活動するボランティアからも多くの参加者を得てきた。今年度はボランティア活動のための参考資料として『ひとりひとりの思いをこめて共に生きるということ』を発行し、当財団の基本となるボランティア活動の理念について改めて確認しあった。

I ヘルスボランティアの育成

1) ヘルスボランティア講座

2008年度は10月に基礎講座を4回連続コースとして、2月にアドバンス講座を3回連続コースとして開講した。

基礎コース / 医療と福祉の現場で働くボランティアのためのヘルスボランティア講座

- ・第1回 10月21日(火) 10時30分～12時30分
ボランティアのこころ - ボランティア精神の成り立ちとボランティア活動の姿勢について
野村 祐之 (青山学院大学講師)

国連の活動については一般に高い評価があるが、ともすると大所高所からものを見るハトの目になりがちである。ボランティアはアリの目で地道に行動し、試行錯誤を重ねながら、心の触れ合いを通じてその土地のためになるように働くことができる存在である。その体験を通して、自分を変えられ、われわれの属する世界が変わることは確かであり、外の世界が変わることで自分の内なる世界が喜びに満たされるという循環が生まれてくる。それがボランティア活動の醍醐味である。

- ・第2回 10月21日(火) 13時30分～15時30分
LPCのボランティア活動・ボランティアディスカッション
志村 靖雄 (ボランティアコーディネーター) 他

受講生と活動経験者がボランティア活動の問題点やこれからの展望について共に語り合う場を持った。

- ・第3回 10月28日(火) 10時30分～12時30分
聴くこころとボランティア
賀来 周一 (元ルーテル学院大学教授, キリスト教カウンセリングセンター相談室長)

長年、病や障害を持つ方々の精神面を支えてきた賀来講師は、まず人間の根元的な悩みを「存在論的領域 (在る)」「目的論的領域 (何のために)」「不条理の領域 (なぜ私なのか)」の3つに分類し紹介した。ことに三番目の不条理の問題に対する答えはなく、「なぜ私が」という問いだけがいつも残ってしまうことになる。それでも前に進むには、その問いを共有してくれる人の存在が必要で、がんの患者さんのように危機的存在にある人の問いかけは「誰にするか」ということがとても重要である。その方は問いかけたその人の生き方を見ている。ケアする人は、その問いから逃げないでほしいと思うと、傾聴の重要性について語った。

- ・第4回 10月28日(火) 10時30分～15時30分
輝いて生きる……ボランティア活動がもたらす力
日野重明 (当財団理事長)

日野原理事長の講演と講座参加者の体験を分かちあうことで、これからの活動における期待や望みを話し合った。

2) アドバンス講座

- ・第1回 2月20日(金) 10時30分～15時30分
援助する方のための傾聴とコミュニケーション (その1・2)
水野修次郎 (日本カウンセリング学会認定カウンセラー・認定スーパーバイザー 麗澤大学教授)

・第2回 2月27日(金) 10時30分～12時30分

喪失の援助者としての働き

賀来 周一 (キリスト教カウンセリングセンター相談室長・
元ルーテル学院大教授)

・第3回 2月27日(金) 13時30分～15時30分

インフォームド・コンセントの現状と問題点 世界的
視野から見たわが国の問題点

服部 裕之 (土浦協同病院 総合診療科)

アドバンス講座1回目は水野修次郎講師より傾聴訓練として実習を交えながらの講義を受けた。話を聴くことの全体構造は話を始める・聴く・焦点を絞る・探求する・情報の活用などの面から成り立つと考えられるが、構造化することによって見えてくるものと見えなくなるものとの裏表があるとし、人間関係の中では、あいまいさを共有化していくことも大切であろうと話された。

次いで2回目は前述の賀来周一講師から基礎コースと同様なテーマで講義をしていただいた。

3回目は服部裕之講師から、「インフォームド・コンセントの先進国、米国におけるその歴史は、20世紀はじめに医師が患者の同意なしに患者の治療をしてはならないと法的に規制されたのが始まりであり、1957年にはじめてインフォームド・コンセントという言葉が使われた。日本においては1981年に最高裁判決で医療行為に対する判決が出たものがある。今では医療者向けにインフォームのためのガイドラインが出ているが、推奨されているコミュニケーションの方法が患者や家族の意向と必ずしも一致しない調査結果もあり、新しいモデルとしてはShared decision-makingとして第三者が患者と医師の間を仲介しながらインフォームを行っていく方法も行われ始めている」と解説された。

2 血圧測定ボランティアの養成と活動

1) 血圧測定ボランティア養成(通信)講座

本講座の目的は、血圧測定の意義を理解し正しい知識と技術に基づいて自身や家族の健康管理を実践する能力を養う、血圧の正しい測定法(聴診法)を習得し、これを他の人に教える能力を養う、というものである。最近では、自動血圧計の普及により、聴診法による測定法を習得しようという人は少ない。しかし、血圧測定ボ

ランティアの若返りと活性化のために、本年は数年ぶりに開講した。

4月23日から5月20日まで5回にわたり、「血圧測定の知識と理解」「血圧とは、血圧の理解」「聴診法による血圧の測り方」「高血圧の予防と管理」などを指導した。

これをSPボランティアの6名も受講し、全員が修了証を授与された。今後、血圧測定ボランティアとして、自己測定の指導に加わって血圧グランドシニアにも参加していただくことになった。

また、通信講座として長野県中野市の保健指導員を対象に、「第13回中野市血圧測定ボランティア養成通信講座」を2008年12月11日～2009年2月5日の日程で開催した。

第1回スクーリングは、中野市へ5名の血圧測定ボランティアとともに教育担当者が出張し、17名の方々が受講された。中間にホームワークを郵送でやりとりし、第2回スクーリングは当センターに来所していただいた。都合で3名が欠席されたが、14名の方が所定の課程を修了し、テストにも合格され「血圧測定ボランティア認定証」を取得された。

2) 血圧グランドシニアの研修

血圧測定ボランティアとして登録している人たちを対象に継続教育の一環として年間5回開催している。2008年度も、メンバーの関心が高い「加齢によって起こってくるさまざまな健康問題」の中からグループごとにテーマを決めて学習したことをプレゼンテーションし、参加者から質問を受けディスカッションをする。これらに対して道場信孝先生に補足していただきコメントをもらうという方法をとった。

2008年度は6回開催し、延べ100名の血圧測定ボランティアが参加した。

3) 血圧測定ボランティアの活動

2008年度は21名が登録し、当センターの教育プログラムの中で、血圧の測り方を指導したり、血圧自己測定講習会の指導に参加した。例年のようにホームヘルパー2級養成講座の受講者20名を対象に6月17日と19日に、延べ10名のボランティアが実技指導にあたった。

最近では自動血圧計の普及により、聴診法で血圧の測り方を習得しようという人は少なく、年間を通じて血圧測定講習会に参加した人はいなかった。

本年度の活動者は延べ51名であった。

3 SP ボランティアの活動

1995年度から養成が始まった当センターの模擬患者ボランティア（SP）は、当初はSPの要請も少なく、当財団が行うセミナーなどに参加する程度で、年に2～3回ほどであった。しかし、2005年度から全国108の医学部、歯学部のある大学が4年生を対象に本格的に共通試験（OSCE）を行うことになり、当センターへの要請依頼も増え始め、2005年は22件、2006年度は51件に上った。活動延べ人数も2005年度115名、2006年度295名と倍以上に増えた。2007年度は大学等からの要請依頼60回、活動人数298名、2008年度は大学等からの要請依頼64回、活動人数349名と増加している。2008年度の依頼要請先は、医科大学1校、歯科大学2校、看護系大学専門学校11校、理学療法系大学1校で、看護系の大学からの依頼が増えている。

2008年度のSPの登録者数は59名であり、2004年度と比較すると3倍以上に増えている。女性47名、男性12名、平均年齢67歳、最高齢85歳、いちばん若いSPは37歳である。SPの数が増えたことで、医学部のOSCEのSP要請にもすぐに対応することができ、活動の機会が大幅に拡大した。

1) 活動内容

2006年度より東京医科大学医学部5年生の臨床実習に「SPとの医療面接実習」が組み込まれ、1年間継続して授業への参加が実施されている。学生はSPとのロールプレイを通して傾聴技術、患者や病状を理解するための技法、医療者の心理と患者の心理などを学習した。医学部におけるSPの役割もOSCEのツールとしてだけでなく日々の医学教育へ参画することで、一般市民としての声をより医学教育に反映でき、SP活動の意義を深められたと感じている。参加したSPはそれぞれに学生へのフィードバックの難しさを感じており、学生のプライドを傷つけずに患者の感情や心理状態が説明できるようなフィードバックの練習に力を入れている。

また、地域でのSP養成のためにベテランSPが大学のSP養成講座で講演を行ったり、片麻痺患者への基礎看護技術（食事介助、ベッドから車椅子への移乗など）の模範演技のための患者役となりビデオづくりに参加したり、一般病院の医師や看護師への研修に参画したり、活動の内容も広がっていることがあげられる。これらの活動はSPボランティアのやりがいにもつながるよい体験となっ



首都大学
東京での
活動



武蔵野大
学看護学
部での活
動

た。

看護学部からは、基礎的な看護技術援助のためのSP役としてだけでなく、血圧測定等バイタルサインのとり方からシーツ交換まで看護技術のOSCEとしてSPを活用する学校もあった。また老年看護学の一環として、認知症患者とのコミュニケーション演習依頼もあり、学生にとっては高齢者と触れ合うよい機会となり、また高齢のSPは自分たちが学生の役に立っていることに大いに満足している。

その他、歯学部、作業療学科（首都大学東京）からの依頼もあり、要請内容もコミュニケーション、試験、バイタルサインや関節可動域の測定など多様になっており、SPは臨機応変に教育側の要請に応えることが求められてきている。

また、神奈川県足柄上病院で事例のロールプレイを通して家族とのよりよいコミュニケーション技術を学ぶ研修も3回目となり、今年度は「認知症患者さんの入院に際しての家族へのインフォームド・コンセント」について研修を行った。医師、看護師、SPとも改めてコミュニケーションの難しさ、大切さを共に学んでいる。

SPの活動が、学生の教育だけではなく現場の医療従事者の教育にも今後大いに活用されていくことが期待される。

2008年度 SP 活動記録

2008年4月～2009年3月

日にち	大学名	内容	人数
4/4(金)	定例会		47
4/15(火)	東京医科大学	臨床実習	3
4/18(金)	スタッフミーティング		11
	明海歯科大学	医療面接打合せ	2
5/1(木)	明海歯科大学	医療面接授業	14
5/2(金)	定例会		49
5/8(木)	明海歯科大学	医療面接打合せ	2
5/10(土)	明海歯科大学	OSCE	9
5/20(火)	東京医科大学	臨床実習	3
5/21(水)	聖母大学看護学部	コミュニケーション	2
5/23(金)	スタッフミーティング		14
5/26(月)	北里大学看護学部	看護基礎実習	7
6/3(火)	東京医科大学	臨床実習	3
6/4(水)	県立よこはま看護専門学校	ベットから車椅子への移乗	3
6/6(金)	自治医科大学看護学部	がん患者インタビュー	3
	定例会		35
6/12(木)	自治医科大学看護学部	がん患者インタビュー	3
6/14(土)	フィジカルアセスメント	聴診器の使い方	2
6/20(金)	スタッフミーティング		14
6/26(木)	首都大学東京	関節稼動域	11
6/28(土)	フィジカルアセスメント	聴診器の使い方	10
7/1(火)	東京医科大学	臨床実習	3
7/4(金)	武蔵野大学看護学部	糖尿病患者への生活ケア	2
7/6(日)	日本プライマリ・ケア学会	OSCE 内科専門医認定試験	4
7/7(木)	北里大学看護学部	看護基礎実習	7
7/11(金)	定例会		42
7/14(月)	よこはま創英短期大学	看護基礎 (バイタルサイン・体位交換・寝巻交換・部分清拭)	6
7/15(火)	よこはま創英短期大学		6
	東京医科大学	臨床実習	3
7/18(金)	スタッフミーティング		17
7/23(水)	明海歯科大学	OSCE 打合せ	9
7/24(木)	明海歯科大学	OSCE	9
7/25(金)	石川県立看護大学	SP 養成について講義	1
7/29(火)	首都大学東京	OSCE	6
8/1(金)	定例会		39
8/15(金)	スタッフミーティング		15
9/5(金)	定例会		40
9/9(火)	東京医科大学	臨床実習	3
9/19(金)	スタッフミーティング		16
10/3(金)	定例会		42
10/7(火)	東京医科大学	臨床実習	3
10/9(木)	湘南短期大学	老年臨床介護	5

日にち	大学名	内容	人数
10/14(火)	神奈川県立よこはま看護専門学校	高齢者とのコミュニケーション	1
10/17(金)	スタッフミーティング		16
10/21(火)	東京医科大学	臨床実習	3
10/23(木)	湘南短期大学	老年臨床介護	5
10/29(水)	首都大学東京	徒手筋力	11
11/1(土)	埼玉県立大学	SP の活動について	1
11/4(火)	東京医科大学	臨床実習	3
11/5(水)	東京医科大学	12/3のワークショップ ビデオ撮り	2
11/7(金)	定例会		40
11/13(木)	湘南短期大学	老年臨床介護	5
11/14(金)	共立女子短期大学	認知症	4
11/18(火)	東京医科大学	臨床実習	3
	首都大学東京	ターミナルケアの症例検討	2
11/20	県立よこはま看護専門学校	高齢者とのコミュニケーション	1
11/21(金)	共立女子短期大学	認知症	4
	スタッフミーティング		17
11/26(水)	北里大学看護学部	看護基礎実習	7
11/28(金)	首都大学東京	OSCE	6
	横浜市立大医学部看護学科	ケアの科学コミュニケーション演習	20
12/2(火)	東京医科大学	臨床実習	3
12/5(金)	定例会		43
12/16(火)	東京医科大学	臨床実習	3
12/17(水)	北里大学看護学部	看護基礎実習	6
12/19(金)	スタッフミーティング		16
1/7(水)	首都大学東京	コミュニケーション	11
1/9(金)	定例会		41
1/13(火)	東京医科大学	臨床実習	3
1/14(水)	首都大学東京	OSCE (関節稼動域)	6
1/15(木)	首都大学東京	OSCE コミュニケーション	6
	横浜創英短期大学	基礎実習	6
1/16(金)	横浜創英短期大学	基礎実習	6
1/22(木)	湘南短期大学	老年臨床介護	5
1/23(金)	スタッフミーティング		16
1/27(火)	東京医科大学	臨床実習	3
2/6(金)	定例会		
	スタッフミーティング		
2/9(月)	石川県立看護大学	技術研修 1年生シート交換	3
2/10(火)	東京医科大学	臨床実習	3

日にち	大学名	内容	人数
2/13(金)	神奈川歯科大学	OSCE 打合せ	12
2/14(土)	神奈川歯科大学	OSCE	12
2/23(月)	首都大学東京	OSCE コミュニケーション	6
2/24(火)	東京医科大学	臨床実習	3
2/28(土)	東京医科大学	OSCE	20

日にち	大学名	内容	人数
3/5(木)	足柄上病院	臨床研修	6
3/6(金)	定例会		43
3/7(土)	日本神経学会	診察用ビデオ撮り	2
3/8(日)			2
3/27(金)	スタッフミーティング		20

4 第3回全国模擬患者学研究大会

日時 2008年12月13日(土) 10時～16時30分

場所 女性と仕事の未来館ホール

受講者数 163名

プログラム

- ・SPと医療従事者教育の歴史
日野原重明 ライフ・プランニング・センター理事長
- ・LPCSP ボランティアの養成について
松野 英夫 LPCSP ボランティア
- ・病院でのSPを用いた研修について
小西千代子 川崎医療生協 SP グループ代表
- ・歯学教育でのSPの活用
町野 守 明海大学歯学部教授
- ・作業療法、理学療法でのSPの活用
井上 薫 首都大学東京健康福祉学部准教授
- ・看護教育におけるSPの活用と問題点
屋宜譜美子 元横浜市立大学医学部看護学科教授
- ・ファシリテーターの役割とSPのフィードバックについて
滝 純司 東京医科大学病院総合診療科教授
阿部 幸恵 東京医科大学病院卒後臨床研修センター助教
- ・医学教育におけるSPの活用の問題点と今後の方向性
大滝 純司 東京医科大学病院総合診療科教授

北は北海道から南は沖縄まで、全国津々浦々からの参加者は153名に上った。参加者を職業別で見ると、大学教員・看護教員50名、当センターのSPボランティア40名を含めたSPが74名であった。その他事務職員が6名、災害救助隊が3名とさまざまな分野からの参加があった。

当センターは「模擬患者参加による教育法」にいち早く着目し、米国・カナダから講師を招聘して、これまでに5回の国際ワークショップを開催し、1995年より模擬

患者養成に携わってきた。その実践を踏まえ、2003年、2004年に全国の医学・看護学教育の担当者と模擬患者を養成しているグループと模擬患者が一堂に会して「全国模擬患者学研究大会」を開催した。それらの大会ではSPを医学・看護学教育の場でどのように活用しているか、SPを活用することでどのような教育効果が上げられるか、あるいは今後どのような課題があるかなど、SPに関する問題について率直な意見交換が行われ、ある程度の共通認識を持つに至った。

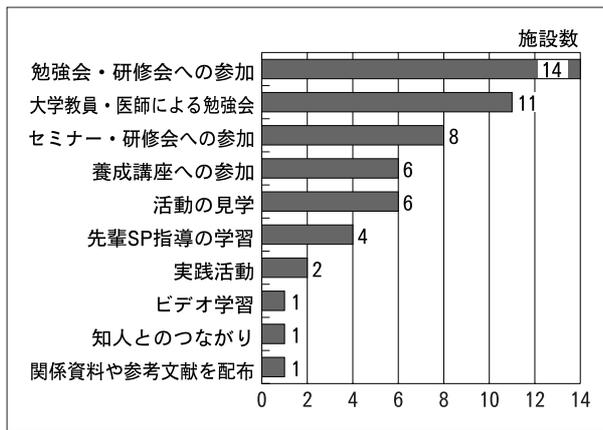
2005年には全国の医学部・歯学部でOSCE(客観的臨床能力試験)が導入された。模擬患者の要請は当センターにおいてもOSCEが導入されるまでは数件であったのが、2005年以後は50件余と数十倍の差がある。またSPグループの要請も医学部のOSCEのみでなく、医学部の授業、看護学部のバイタルサインの技術試験、高齢者とのコミュニケーション、さらには作業療法士、理学療法士、歯学部の教育など幅広く活用されるようになってきた。そこで第3回の本大会はSPグループの医学部でのOSCE以外のさまざまな活動をSPグループと教育側との双方向での発表とSPの資質を上げるよい学習の機会になる大会となるように企画した。

日野原重明先生の特別講演「模擬患者を活用した医療従事者教育の歴史」ではアメリカやカナダで1970年代から医学看護の教育にSPが取り入れられて大きな成果をあげていること、ようやく日本でも医学部の試験や医療者のコミュニケーションの教育に取り入れられるようになってきたこと、今後のSP活動はもっと健康教育という大きな枠の中でSPが使われるようになればよいと展望を述べられた。

当センターのSPグループからは、医学教育、看護教育、歯学教育、理学療法士教育、病院の研修など多岐にわたる活動の報告とSPの養成について報告を行った。

川崎医療生協の模擬患者グループからは、実際の医療の現場での事故の経験をもとにより医療従事者育成のた

表1 SP養成方法



めの院内研修としてSPが協力していることが発表された。

「歯学教育における模擬患者の活用」の報告では、従来の疾患中心から患者中心にシフトされた医療面接の流れがよくわかり、SPの果たす役割が明確に述べられた。

「作業療法分野における模擬患者の協力を得た学生教育の現状」からは心理的な問題を抱える方に対する作業療法面接で、模擬患者が行う学生へのフィードバックやディスカッションの重要性が述べられた。

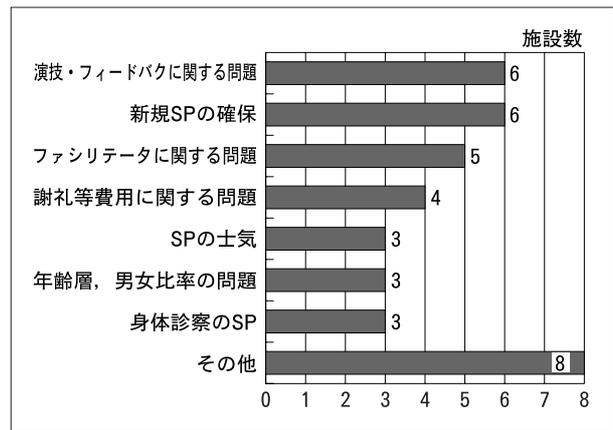
「看護教育における模擬患者の活用と問題点について」からは、看護学生にとって模擬患者との出会いは知らない大人との出会いであり非常に緊張を伴うが、その時のその人に合わせた看護ができるようになる、という看護教育の目的を効果的に学ばよい機会になっていること、また教育側の苦勞として効果的にSPを活用していくには綿密なシナリオづくりやSPとの事前の打ち合わせが大切であることなど述べられた。

午後からのワークショップは、事前に全国50のSPグループにアンケート調査を行い、SPグループの問題点の抽出を試みた。36グループから回答があり、その結果、どのSPグループも養成とSPの役割としての学生へのフィードバックの難しさが問題点として上がった(表1 SP養成方法、表2 SP活動の問題)。

ワークショップのテーマを「ファシリテーターの役割と模擬患者のフィードバックについて学ぶ」とし、SPグループが医学部5年生の医療面接の授業に協力している東京医科大学の大滝純司と阿部幸恵両講師にファシリテーターをお願いした。

効果的なワークショップを行うために「看護学生のバイタルサイン測定」「看護学生の体位交換」および「医

表2 SP活動の問題



学生の医療面接」の3場面を、実際の看護学生、医学生とSPのやりとりをビデオに収録し、SPとしてのフィードバックのあり方、ファシリテーターとしての教師のあり方について会場の参加者も含め意見交換が行われた。さらに阿部幸恵講師より「フィードバックに必要な資質」6項目が示された。「避けたいフィードバック」は、漠然とした表現、ないものねだり、欲張りな要求、場外(その場に関係のない感想など)、人間の尊厳を欠く、一般論・価値・善悪、自分の不出来・ネタばらし、ファシリテーターの視点の計8項目である。

「今、ここで起きていること」に焦点を当て、患者としてどう感じ、どう思ったかを、具体的に言葉で表すことの重要性が確認された。会場からの活発な意見に対する阿部先生の的確なコメントでさらに学びが深められた。

「医学教育における模擬患者の役割と今後の課題」では、医師が診断を下す思考過程で、抽象化する作業、言い換えによる動的な把握など「よりの確に意味づけした言葉で考える」ことの大切さ必要であると述べられた。また、模擬患者参加型医学教育のうち、コミュニケーション・トレーニングと臨床能力の評価が盛んな現状、OSCEの急速な拡大と問題点、医師国家試験を視野に入れたアドバンスOSCEの動向など示唆に富む講演であった。

教育担当の参加者からは、さまざまな教育場面でのSPの活用方法がよくわかった、模擬患者の多彩な活動を知ることができ興味深かったなどの感想が寄せられ、またSPグループからはフィードバックやファシリテーターの役割、違いが明らかになってよかったなど、それぞれの参加者にとって充実したセミナーとなった。

カウンセリング 臨床心理ファミリー相談室

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

カウンセリングの目標は自己の世界の確認と柔軟性の養成にあり、人の成長と発達への援助活動である。しかしカウンセリングを利用するクライアント層のうち子どもでは不登校や摂食障害、大人ではうつ等の気分障害や不安神経症など精神疾患的な問題を抱えた方が多いのが現状である。

ライフ・プランニング・センター健康教育サービスセンター（以下、当センター）のように医療機関の外で行うカウンセリングでは、精神疾患的な問題を抱えたクライアントを信頼のできる精神科医や他の医師にいかにかタイミングよくコンサルテーションできるか、医師と連携をとりながらカウンセリングを継続していくかが大きな課題となっている。カウンセリングの社会的役割に鑑みるとカウンセリングは、メンタルヘルスの予防、教育的な関わりなどを持つことが期待されている。

当相談室は個人カウンセリングから学校や企業でのカウンセリング活動を軸にカウンセリング活動を展開している。今年度も、聖路加看護大学でのカウンセリングを月2回、企業へのメンタルヘルス対策として病院、ヘルパーセンター、中小企業等で相談業務を行っている。

1 当センターの個別カウンセリングについて

当センターでの個別カウンセリングは複雑で多岐にわたるさまざまな相談が持ち込まれている。カウンセリング手法もケースバイケースである。TEG（東大式エゴグラム）による性格分析、SDS（うつ性自己評価尺度）をベースに必要と思われるケースにはMMPI（ミネソタ多面的人格目録）、BDI（ベック抑うつ質問表）を行い、カウンセリングのみで対応できないケースは精神科医へコンサルテーションをしている。これらの心理テストをベースに認知療法としての「自己の世界の確認と柔軟性の養成」を心がけている。

クライアント自身が自分で判断し道を選んでいくことを何よりも大切にしている。

2 聖路加看護大学の学生、職員を対象にしたカウンセリング

大学内での学生、職員を対象にしたカウンセリングは現在月2回大学内で実施している。

学内カウンセリングの実施で、これまでうつなど深刻なケースの相談であったものが、恋愛問題や人間関係など、「こんなことを相談してもいいですか」という気楽にカウンセリングを利用する学生が来室するようになった。相談室側としても継続してフォローができやすくなり、フィジカルな面での問題で今まで以上に健康管理室や校医との連携がとりやすくなった。カウンセリングが自殺やうつなど深刻な問題の予防として今後も役に立てればよいと考えている。

2008年度の学生の相談内容は、実習でのこと、指導教官とのこと、家族も含めた対人関係のトラブル、個人の性格に起因すること、うつなどの気分障害、が主な来談理由であった。また、さまざまなハラスメントの相談も持ち込まれるようになり、カウンセラーが学事協議会で「パワーハラスメントについて」実情の報告したり、FDミーティングで「相談状況から教職員として心がけること」と題するミニレクチャーを行った。

カウンセリングは学生の状況に合わせて行っているが、ブリーフセラピー（解決志向カウンセリング）を心がけ、できるだけ学生自らの問題解決能力を引き出すことを大切にしている。

心理テストはTEG（東大式エゴグラム）による性格分析、SDS（うつ性自己評価尺度）をベースに必要と思われるケースにはMMPI（ミネソタ多面的人格目録）、BDI（ベック抑うつ質問表）をさらに行いカウンセリングのみで対応できないケースは精神科医へコンサルテーションをしている。

3 企業におけるメンタルヘルス対策への取り組み

うつ病を中心とした勤労者の心の病は増加傾向にあり、今改めて企業のメンタルヘルス対策の見直しが求められている。特に30代の社員のうつ病や神経症が増加傾向にあることが指摘されている。

現在、聖路加国際病院、葉っぱのフレディヘルパーセンター他2カ所と提携し、職員へのメンタルヘルス対策に参加している。自発的にカウンセリングを受けたい方への無料カウンセリング、電話相談のほか、健康相談の一環としてTEGによる性格分析とSDSによるうつ度のチェックを行っている。問題があつての面談ではないが、明らかに抑うつ状態にあり精神科医にコンサルテーションしたケースを継続的にフォローしている。その他、職場での人間関係の持ち方や家族のメンタルな病気に対する相談や部下とのコミュニケーションの持ち方などの相談にも対応している。

表1 当センターカウンセリング相談件数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
16	13	16	15	13	17	13	17	12	16	13	9	170

4 聖路加国際病院カウンセリング

病院の広報誌『明るい窓』の「無料カウンセリングのお知らせ」の記事を見てカウンセリングを希望してきた看護師のほか、事務職やコ・メディカルの相談に対応した。

5 新老人のためのコンサルテーション

2004年度より新老人を対象にしたコンサルテーションを行っている。

身体的な問題についての相談や自分の問題以外に、息子のこと、嫁のこと、遺書の作成をどうしたらよいかという相談に応じた。

報告 / 福井みどり (健康教育サービスセンターカウンセラー)

国際フォーラム & ワークショップ

I LPC 国際フォーラム2008

テーマ 看護・介護・高齢者医療における QOL の確立
- 終末期医療の倫理問題にどう取り組むか -

日時 2008年8月2日(10時~18時)
3日(10時~15時15分)

会場 女性と仕事の未来館(港区田町)

参加者数 延べ213名

わが国でもようやく医療における倫理問題が専門家だけで議論されていた場から、一般市民を巻き込んだ社会に開かれたものとして認知されつつある。2007年度のLPC国際フォーラムでは、「いのちの畏敬と生命倫理」と題して、医学、看護関係者を招いて生命倫理という視座からの倫理問題にスポットをあてた学びを行ったが、2008年度はこれを受けて、終末期医療、看護、介護における倫理問題のわが国の現状および問題点とこれからの取り組みについて、米国・ハーバード大学関連の施設から招へいした2名の講師と、日本の実情に通じた2名の講師の講演により、具体的な事例を取り上げて論議を深めた。参加者にとっては多職種が参加するグループワークの中で意見を交換し、各講師からのアドバイスを受け

て、日ごろ抱えているさまざまな問題を解決するための考え方について啓発されるよい機会となった。

プログラム

第1日

開会の挨拶 日野原重明 当財団理事長

講演

・終末期における生命への畏敬 - 終末期医療への倫理的アプローチ ラックラン・フォロー

ハーバード大学メディカルスクール准教授

・治癒からケアへ - 終末期医療での安息

..... ジュリー・ノッブ

ベス・イスラエル・ディーコネス医療センター緩和ケア看護師

・わが国の終末期医療の問題点 恒藤 恒

大阪大学大学院医学系研究科緩和医療学教授

・終末期ケアに関わる倫理問題への取り組み

..... 長谷川美栄子 東札幌病院看護部長

第2日 事例をもとにしたワークショップ

ディスカッション

・患者のQOLの確立と倫理問題への取り組み

ファシリテータ 徳田 安春

聖路加国際病院内科副医長



フォロー講師(左)とノッブ講師

恒藤講師(左)と長谷川講師



- ・ 終末期における意思決定 - 倫理的枠組の中で患者と
その家族を支持する.....ジュリー・ノップ
- ・ 医療倫理と終末期医療.....ラックラン・フォロー

ベス・イスラエル・ディーコネス・メディカルセンター (BIDMC) における倫理的取り組みの歴史は、1972年に世界で初めて「患者の権利の章典」が定められたことで際立っている。以後、人道主義的医療を患者と家族のケアに展開し、全米の医療における倫理プログラムをリードしてきた。

フォロー講師は、「倫理というのは日常の業務のすべての瞬間の中にあり、ジレンマを解決したり、倫理的な問題について答えを見出したりする特別なことだけではない。また、倫理的に優れた医師や看護師はただ道徳的であるというのではなく、専門分野の高度な技術を身につけ思いやりのあるケアを行うことができるものである」と指摘。また、「倫理的アプローチとは義務ではなく、何をなすべきか、道徳的に優れていることは何なのかを考えることが重要」と講演された。そして、道徳的に満足し、誇りをもって仕事ができる環境では肯定的なエネルギーが生まれ、さらに自分のスキルアップも育まれるという上昇スパイラルが生まれていくと解説された。

終末期における米国での緩和ケアの概念は、もう一人の講師であるジュリー・ノップ講師から、BIDMCでの例を通して紹介された。BIDMCの緩和ケアのコンサルテーションサービスは2000年(年間127例)から始まり、2007年時点では586例のサービスの実績を持つまでに至っている。患者の内訳は約50%ががん患者、残りの50%はがん以外の疾患としての認知症、うっ血性心不全、肝疾患、脳疾患である。患者の紹介元は30%がICUから、20%が腫瘍科、50%が内科などからであり、平均年齢は74歳(22~102歳)の広い年代にわたっている。日本ではがん以外の病気を持つ患者を緩和ケア病棟やホスピスで看ることはごくわずかであるが、米国ではガイドラインを設けて緩和が必要な患者に的確な方法で医療が届けられていると講演された。

わが国でも2007年4月から施行された「がん対策基本法」ではこの方針は継承されている。しかし、これに携わるスタッフの数や経済的裏付け、人材の不足などにより現状ではごくわずかな対象にしか緩和医療・ケアが適用されないのが現状である。もっと広い範囲の患者にこれらのケアが提供できるような体制が早期に整うことを願いたい。

報告 / 平野 真澄 (健康教育サービスセンター所長)



ワークショップ
のファシリテ
ータをされた徳田
講師



総括をする
日野原理事長



ディスカッションでは活発な意見がとびかった

2 健康座禅ワークショップ

テーマ 生活座禅で長生き人生のススメ

日時および会場

2008年11月24日 (14時～16時・サンシティ横浜)

25日 (13時～16時・健康教育サービスセンター，
19時～20時30分・銀座イースト)

講師 朴 禧善 工学博士・元ソウル大学教授，元韓国
国民大学院院長，座禅実践者

日野原重明 財団理事長

参加者数 11月25日50名，11月26日52名・40名

朴禧善講師は現在の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の出身。1940年来日し，東北帝国大学工学部金属工学科で金属工学の世界的権威である本多光太郎教授のもとで学ばれ，その後，東京大学宇宙航空研究所で研究生活をされたという韓国を代表する金属工学の権威である。この研究生活中の1969年から1973年の5年間に，東京・奥多摩の徳雲寺住職の耕山大禅師のもとで座禅修練を重ね，大きな成果を得ることができた。その体験を科学的に究明し，『「禅・瞑想」 - 科学者の体験と実証 - 』という著書にまとめ，日本の出版社から発行された。

実は，朴講師は韓国で手にした日野原重明理事長の著書に感銘を受け，日野原先生に手紙をお寄せになったところからお2人の交友が始まり，2007年度の「新老人の会ジャンボリー」（松本市）に朴先生を招待した。その席で，日野原先生は，実際に朴先生の記憶力・集中力などの能力はご自身の考案した「生活座禅」によるものと知り，新たに日野原先生との共著により『生活座禅で長生き人生のススメ』（講談社刊）が刊行されることになった。

本書は，人間が本来の健康を保持し，潜在意識を開発して能率を向上させ，幸せな生涯を送るために，右脳を強化する方法として開発考案したものを紹介したものである。これを具体的に指導していただくために朴先生に来日していただき，当センターでワークショップを開催した。

思考は右脳と左脳のバランスがよく共同作業が成立することで最も能率的に行われるといわれているが，座禅によりこのような訓練を試み，潜在能力開発と自立神経の均衡をなしとげようとするものである。座禅を続けていると右脳機能が活性化され，エンドルフィン・ホルモ



ワークショップは日野原先生の解説と朴先生の実演で行われた



ンの分泌が促進される。

人間は愛や感謝の気持ちに満たされているときはエンドルフィンが多く分泌される。現代人は左脳重視，物質重視の生活の中でストレスを溜めているが，これを解消するには右脳の活性化が最も効果的である。東洋のヨガ，瞑想，座禅などは左脳を一時停止して右脳を鍛える訓練である。左脳の仕事は将来コンピュータが取って代わると考えられるが，人間の仕事の重要性は右脳的能力によって決まるのではないか。座禅こそ両脳転換の最も適切な修練方法であるが，座禅修練は指導者が必要である。座禅の性格を全般的に把握し，誰でもどこでも一人で座禅修練ができるように考案された「生活座禅」の演習を含めたワークショップで，宇宙の気を吸収すること，座る前の環境，身なり，姿勢，調身法座法（ピラミッド型姿勢のとり方），調息法，調心法について指導された。

朴講師は日野原先生の質問に答えて，80歳時にヒマラヤ単独無酸素トレッキングの成功，87歳でキリマンジャロ最高齢登山など，生活座禅によって獲得したご自分の体験を詳しく紹介された。

なお，同様のワークショップがサンシティ横浜および銀座イースト（いずれも高齢者マンション）でも実施された。

報告 / 石清水由紀子（「新老人の会」事務局長）

海外医療事情調査

「ブラジル日本人移住100周年記念事業」のブラジル政府の招聘により、「新老人の会」会員64名と共にブラジルの3都市を10日間にわたって訪問した。

ブラジルは日本の23倍にも及ぶ広大な国土をもつ国である。今回の訪問地は、日本から移住された方々の多く居住するサンパウロ市、ロンドリーナ市、そしてモジ市の3市を中心にしたもので、それぞれ講演会や交流会、移民館や老人・医療施設の見学であった。

「憩いの園」「日伯友好病院」「オスピタル・デ・コラソン」「ロンドリーナ画像診断センター」「イピランガ総合病院」の5施設について下に報告する。いずれの施設も日系人がブラジル社会に定着し、多大な貢献をしていることがうかがわれる近代的な設備を備えた充実した施設であった。

出張者 日野原重明

日程 2008年9月3日(水)～9月13日(土)

- 訪問施設
1. 社会福祉法人救済会憩の園 (サンパウロ) 9月4日(木)
 2. 日伯友好病院 (サンパウロ) 9月6日(土)
 3. オスピタル・デ・コラソン (ロンドリーナ) 9月8日(月)
 4. 画像診断センター (ロンドリーナ) 9月8日(月)
 5. イピランガ総合病院 (モジ) 9月11日(木)

1 社会福祉法人救済会憩の園

1942年カトリックの日本人救済会として発足、移民50周年祭の年(1958年)、現在の地に憩の園を開設、1990年に日系社会で初の高齢者介護施設として活動の拡大を行って現在に至る。また、地域・社会福祉の拠点としての役割も担っている。入居者の介護度は、要介護者が75%(66名うち完全介護者10名)を占め、見守りも含む半介護の方が25%(22名)である。入居者の平均年齢は86歳(2007年現在)。年齢構成は65歳から97歳までだが、うち90歳以上が30%を占めている。施設は本館(自立の方)とSEMI DEPENDENTE(半介護)とドナ・マルガリータ棟(全介護)の3つに分かれ、完全自立と半自立の方の居室は、全個室となっている。本館にはNHK国際衛

星放送が診られるテレビも置かれ、図書室には日本のテレビ番組や映画のビデオテープも揃っていた。半介護棟は現在17室である。要介護棟(ドナ・マルガリータ棟)は個室10室、2人部屋12室、4人部屋6室となっており、食堂兼ホールには台所があり、そこで配膳や調理を行っていた。広大な園内は穏やかな起伏を伴っており、池や樹木、草木、花を見ながら散歩できる素晴らしい環境であった。また、ボランティアによる音楽療法も活発に行われており、訪問時は入居者による演奏も披露された。

2 日伯友好病院

1979年従来国際協力事業団(現JICA)の運営から組織変更を行い、それと同時に名称を「日本人病院」から、医療によって日伯両国の架け橋となるという願いをこめて「日伯友好病院」に変更した。日伯友好病院はサンパウロ日伯援護協会の医療施設として、日本政府の資金援助も受けつつ、ブラジル日系社会が主となって建設・運営を行っている総合病院で、それ以後最新の医療施設を持つ総合病院として発展してきた。日本語が通じ、日本食も提供できる日系病院というだけでなく、すぐれた日本の医療技術および医療機器を導入し、地域医療に貢献することを目的とするばかりでなく、ブラジルの医療水準を押し上げ、日伯友好関係の一層の発展を図っていくことを目指している。施設は2階より上層階は病室になっており201床(集中治療室ICU、冠狀動脈疾患集中治療室CCUを含む)。診療科目は人間ドック、健康診断部門、各種検査室、手術室、救急外来(内科、外科、小児科)である。廊下は広く、壁面は淡いクリーム色で明るい印象で統一されている。内視鏡下手術・産科・小児科の評判がよく、近隣からの入院も多いとのことであった。

3 オスピタル・デ・コラソン

2003年に開院した、最新式の医療機器を備えた心臓病の専門病院。5人の専門医からなり、武田ロベルト、馬場ケンゴ両医師は、数多くの心臓移植手術に成功しており、世界的にも高い評価を得ている。この施設は、その高い医療水準を目当てにパラナ州内はもちろん、サンパウロ州奥地、マツグロソ州などからの患者が訪れる。

4 ロンドリーナ画像診断センター

今日わが国でも診断を専門とする施設が増えつつあるが、当施設では高圧酸素療法という特殊な治療も可能な点で特色がある。さらにロンドリーナ周辺の広い地域にわたって多くの医療施設とネットで連携して各施設の画像診断を一手に引き受けるだけでなく、それぞれの施設から紹介される要精査の患者の検査も数多く行っている。

その上、救急患者の診断にも重要な役割を果たしており、24時間オープンな診断施設として地域医療に重要な役割を担っている。訪問中にも随所で設備拡充の工事が行われており、この地域の医療に不可欠な存在としてさらなる発展が期待される医療施設であることは疑いない。

それぞれの専門分野を全てカバーし、診断にかかわる医師やコメディカルの人たちの自信にあふれた機敏な仕事ぶりが印象的であった。

5 イピランガ総合病院

1962年開院のモジ市と近郊都市の最大級の医療機関。すべての診療、診察を日本語で対応する病院として知られる。専門医師220名からなり、看護師などのスタッフの数は430名ほどになる。月平均の外来患者数と入院患者総数は15万人にものぼる。病床数は120床であり、月平均の入院患者数は620人とのことである。

報告 / 日野原重明 (理事長)



「憩いの家」で施設の方々と



日伯友好病院で説明を受ける



ロンドリーナ
画像診断センター

心臓血管専門のオスピタル・デ・コラソン

教育的健康管理の実践

ライフ・プランニング・クリニック

所在地：東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階

I クリニックの目指すもの

「医療とは健康教育とその実践である」とは1902年に東京・築地に聖路加国際病院を創設したルドルフ・B・トイスラー先生の唱えた予防医学的見地から見た医療のあり方であるが、それはまた1973年に設立されて以来本財団の根本的な理念でもある。これに基づき、(1)一般の人々がそれぞれに健康とは何かについてその意義を考え、理解してもらうこと、(2)健康を維持するためのよい生活

習慣とはどんなものかについての理解を深めてもらうこと、(3)生涯を通じて健康を維持するために各自に合った生活のデザインを工夫し、これを良い生活習慣として実践するための方策を共に考えること、の3つを柱とし、これを実践できるようにするための教育的支援を行うことが本財団の目標である。

このことは身体的な事柄だけではなく、心の問題についても同様である。そもそも、このような適切でない生活習慣に起因した疾病に対して、予防医学的見地から生

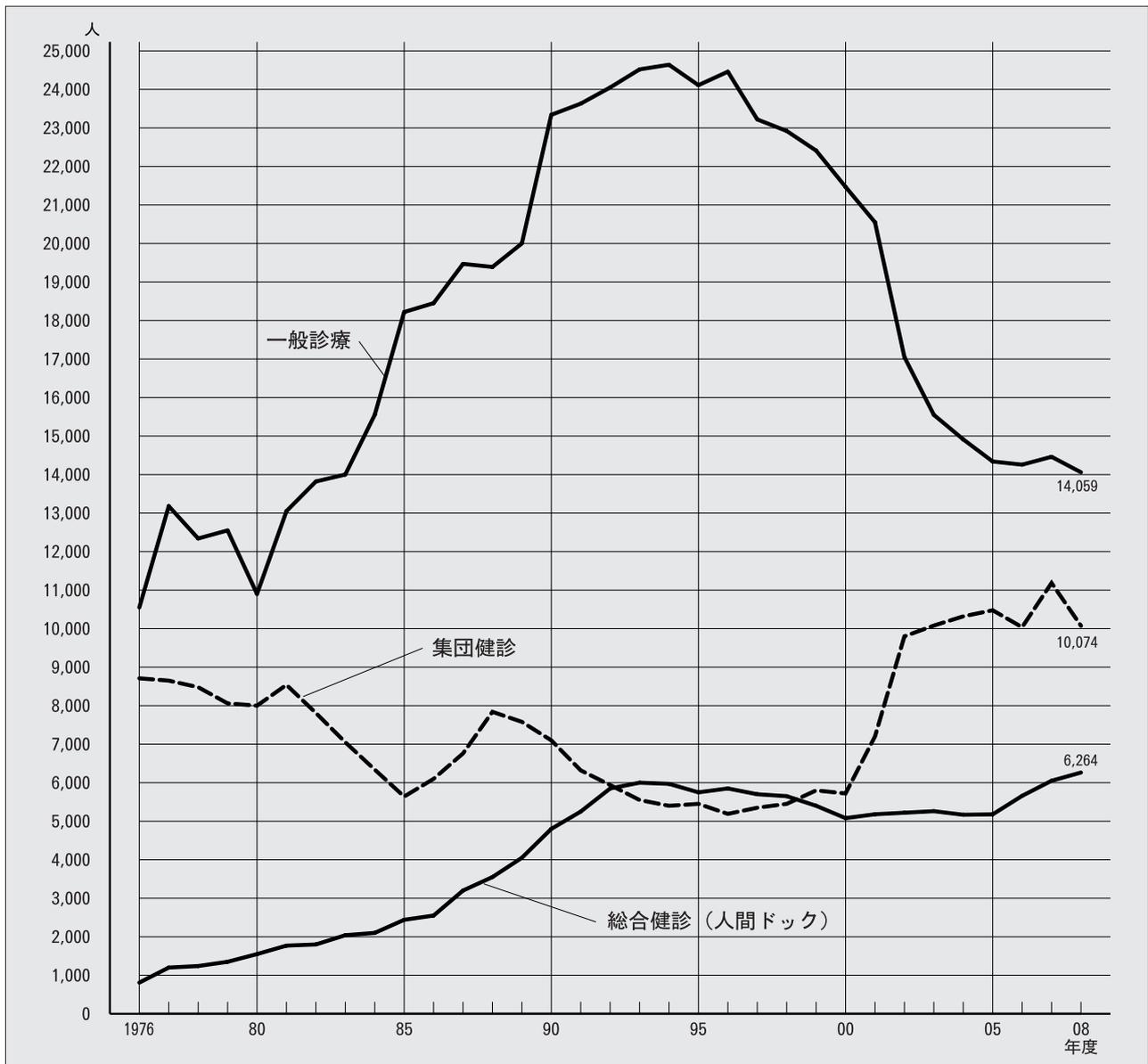


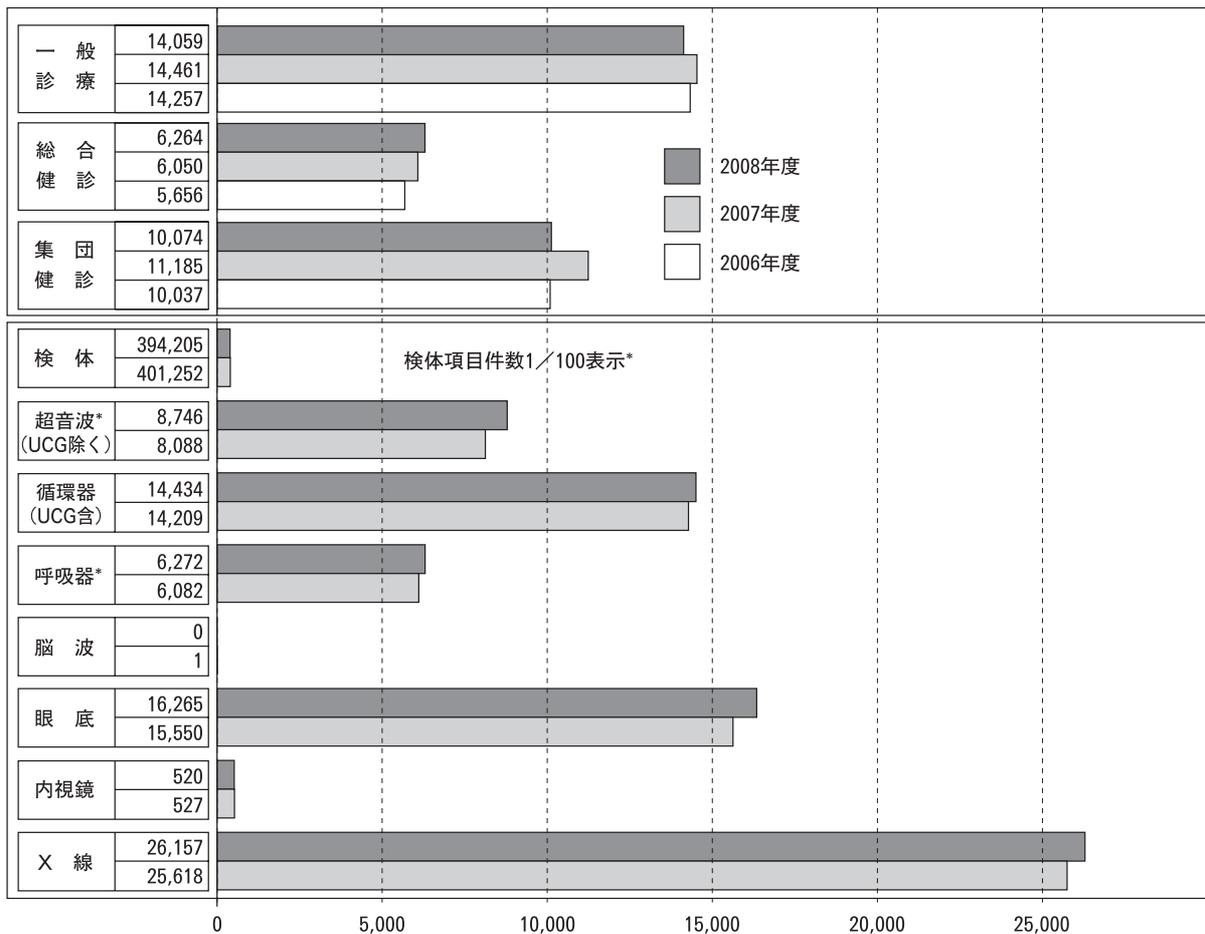
図1 受診者の推移

生活習慣病という名称を日本で初めて唱えたのは、当財団の日野原理事長であり、近年になってようやくこの名称が一般に広まったものである。

現在、わが国の死亡原因の重要な一つに動脈硬化を基にした心臓・脳血管障害がある。われわれは、35年前の当財団の発足以来、動脈硬化の危険因子である糖尿病、高脂血症（現在は脂質異常症と呼称）、高血圧、肥満、喫煙などの生活習慣に由来する病態（生活習慣病）を受診者から見出し、その結果をフィードバックして、受診者の生活習慣を健全な方向に導くように指導（教育的健康管理）してこそ総合健診（人間ドック）や一般健診を行う意義があると考え、日常の診療の中で実践してきた。また、最近の高齢者社会のニーズに応えるため、従来の人間ドックとは異なる高齢者特有の身体的および精神的問題をターゲットとした新しい内容のドックを新設し、「新老人ドック」という名称で2004年より行っている。

近年、医療制度改革大綱が決定され、生活習慣病予防の徹底を図るため2008年4月より医療保険者に対して上記の生活習慣病（特に腹囲測定を中心としたメタボリックシンドローム）に関する健康調査（「特定健診」）、および特定健診の結果により健康の保持に努める必要がある者に対する指導（保健指導）の実施を義務づけられることとなった。これらのことは、われわれの35年来の実践が決して間違っていないことを国も裏付けたことになる。

ただ、これらの指導の具体的実践にあたっては、単に一般的理論を押しつけるのみでは、個人の生活習慣はなかなか変わるものではない。したがって、個人それぞれの考え方、環境、嗜好などに配慮した、いわゆるオーダーメイドの指導が重要である。当クリニックでは2006年からパイロットスタディとして一企業と組んで、未病であっても体重減少と禁煙を希望する社員に対して3カ月の個



*超音波（上腹部，乳房，婦人科，甲状腺の検査）
*呼吸器（2004年度より肺気量分画測定とフローボリュームカーブをセットで1件とした）

図2 2008年度来所者数・検査件数

表1 総合健診の年代別受診者数

年齢区分(歳)	男性	女性	合計
29以下	36名 (0.8%)	20名 (1.1%)	56名 (0.9%)
30~39	1,022 (23.5)	304 (16.8)	1,326 (21.5)
40~49	1,336 (30.7)	501 (27.7)	1,837 (29.8)
50~59	1,052 (24.2)	446 (24.7)	1,498 (24.3)
60~69	658 (15.1)	342 (18.9)	1,000 (16.2)
70~79	203 (4.7)	155 (8.6)	358 (5.8)
80歳以上	48 (1.1)	38 (2.1)	86 (1.4)
合計	4,355 (100.0)	1,806 (100.0)	6,161 (100.0)

(新老人ドック受診者5名およびT事業所関係98名含まず)

表2 検体検査

項目 年度	血液・生化学	血清学	血液学	尿	便	細胞診	細菌・その他	合計 (件)
2008	261,986	44,217	16,639	47,334	21,398	2,619	12	394,205
2007	273,885	43,610	16,252	44,772	20,750	1,976	7	401,252

表3 循環器機能検査

項目 年度	E C G			そ の 他 (UCG 含まず)	合計 (件)
	安 静 時	ストレステスト	24時間モニター		
2008	14,249	41	37	11	14,338
2007	14,014	65	22	8	14,109

人面談、メール指導を行い、平均75kgの被検者の体重を平均4kg有意に落とすことに成功した。この成果を受けて2009年度も引き続きこのような計画的な方法論に基づいた保険指導を試みていくつもりである。

当クリニックにおける診療の特徴は、受診者が医師、看護師、栄養士その他の医療従事者やボランティアとの十分な対話を介した心の触れ合いの中で、自らの持つ健康上の諸問題を明確に自覚し、自らの生活習慣との関連を認識していただくよう指導することにある。このような診療方針に沿った具体的な方策として、受診者に関わるすべての職種の者がチームを組んで個々の受診者に対応し、それぞれの専門分野の立場から問題点に対しての意見を述べ、全人的かつ包括的医療がなされるように配慮している。今後もさらに試行錯誤を繰り返しながら科学的根拠に根差した新しい方法論を模索・開拓していくよう努力していきたい。

最後に、一昨年より当クリニックは、聖路加国際病院のサテライト・クリニックとしての位置づけにより、当クリニックと同病院との間の病診連携の一層の緊密化を図り、また当クリニックの医師は同病院でのカンファレンスに積極的に参加するなど、同病院との間に深い関係

を樹立しつつあることを追記しておきたい。

2 診療の概要

受診者数の推移を図1に示した。

診療の内容は、一般診療、総合健診(人間ドック)、ならびに集団健診に大別される。

一般診療は前年の14,461名に比べ14,059名となり、402名の減少となった。これは、長期間にわたる処方希望する患者が増えたことと、団塊の世代の定年退職により、職場を離れて自宅近隣の医療機関に変更する方が少なからず出現したことによると考えられる。

総合健診(人間ドック)は政府管掌健保(協会けんぽ)の扱いを始めたこともあり、また、既存の受診先の事業所が順調に受診者数を増やしたことにより、6,050名から6,264名と、214名(3.5%)の増加となった。

集団健診については、残念ながら11,185名から10,074名と1,111名(9.9%)の大幅な減少であった。これは、某企業の長時間残業者の健診の中止と某ゴルフ場への出張健診の廃止によるものである。

図2は2008年度の来所者数及び検査件数を前年・前々

年度と比べて診療種目別にしたものである。

表1は2008年度の総合健診（人間ドック）の年代別受診者数の一覧である。

3 各種検査数の推移

1. 検体検査（表2）

本年度の取り扱い件数は昨年の401,252件より7,047件（1.8%）減少し、総数394,205件である。これは、主として健診の減少によるものである。

表4 脳波検査

年度	項目	12誘導	合計（件）
2008		0	0
2007		1	1

表5 超音波検査

年度	項目	上腹部	乳房	婦人科	甲状腺	心エコー	合計（件）
2008		7,815	876	7	48	96	8,842
2007		7,353	686	11	38	100	8,188

表6 レントゲン検査（胸部間接は出張健診時実施）

年度	項目	胸部		消化管			乳房	骨量測定	その他	合計（件）
		直接	間接	胃部直接	胃部間接	注腸				
2008		15,490	0	7,802	943	0	1,449	455	18	26,157
2007		14,825	321	7,879	741	2	1,437	396	17	25,618

表7 呼吸器機能検査

年度	項目	合計（件）
2008	【ルーティン】 予測肺活量 1秒率 + FV曲線	6,272
2007		6,082

表8 子宮頸部がん細胞診

年度	異形度			a	b			合計（件）	
2008		680	1,098	11	32	1	0	0	1,822
2007		701	972	7	23	1	0	0	1,704

表9 子宮体部がん細胞診

年度	異形度			a	b			合計（件）	
2008		11	3	1	0	0	0	1	16
2007		11	1	2	0	0	0	0	14

2. 循環器機能検査（表3）

安静時心電図検査は1.7%増加、ストレス検査は37%減少した。

3. 脳波検査（表4）

脳波計の廃止により本年度は0件である。

4. 超音波検査（表5）（腹部、乳房、甲状腺、心エコーを含む）

超音波検査は8,842件と昨年の8,188件に比べ654件（8.0%）の増加である。この内訳を見ると、腹部が7,353件から7,815件と462件（6.3%）増え、また乳房エコーは686件から876件と190件（28%）の大幅な増加であった。今後も乳がん健診の必要性の認識に伴い、乳房エコーはさらに増加するものと思われる。

表10 総合健診後呼び出し項目別件数（率）（3ヶ月～6ヶ月後）

項目	エコー				肝機能	脂質	貧血	血糖	尿酸	白血球数異常	他血液	尿	腫瘍マーカー	X線胸部	X線消化管	乳房外来検	
	腹部	胆のう	肝	実数													
年合計	件数	39	3	2	43	21	19	35	3	11	30	13	158	42	19	9	3
	受診数	11	3	0	8	4	4	13	1	2	5	4	64	25	7	1	1
	率(%)	28.2%	100%	0%	18.6%	19.0%	21.1%	37.1%	33.3%	18.2%	16.7%	30.8%	40.5%	59.5%	36.8%	11.1%	33.3%

表11 総合健診後呼び出し件数（率）
男女別・受診回数別・伝達法別比較

項目	全体	性別		受診回数		伝達法別		
		男	女	初回	複数回	当日	後日	郵送
呼び出し数	375	253	122	78	297	200	9	166
受診者数	144	90	54	25	119	86	6	52
%	38.4	38.3	44.3	31.1	40.1	43.0	66.7	31.3

5. レントゲン検査（表6）

検査件数は昨年の25,618件より539件（2.1%）増えて26,157件となった。上部消化管造影（直接）はドック受診数の増加にもかかわらず減少しているが、必要な受診者には胃カメラを勧めているので、その差し替えによる影響と思われる。乳房（マンモグラフィ）が1,437件から1,449件と0.8%増、骨量測定は396件から455件と15%増であった。

6. 呼吸器機能検査（表7）

検査数は昨年より190件（3.1%）増え、総合健診増加分と同様であった。

7. 子宮頸部癌細胞診（PAP検査）、子宮体部癌細胞診（表8・9）

本年度、子宮頸部癌の早期発見のための細胞診を希望して行った件数は、人間ドックで1,035件、健診で607件、一般診療で180件であった。

細胞診判定の内訳は表8の通りである。クラス a・bは、専門医にて定期的に経過観察、または各病院に紹介した。

また、子宮体部癌検査（ホルモン補充療法時のチェック含む）は全体で16件、細胞診判定の内訳は表9の通りである。クラスは病院紹介し、手術。早期癌にて経過も良好である。

8. 眼底検査、上部消化管内視鏡検査

眼底検査（16,265件4.6%増）と内視鏡（7件・1.3%減）はほぼ横這いであるが、内視鏡は今後ピロリ菌やペプシ

ノーゲンの意味が一般に周知されるとともに増加していくものと推定される（図2参照）。

4 総合健診（人間ドック）

総合健診・結果伝達状況およびその内容

ドック結果について、受診者は希望によりおおよそ3通りの方法で受診者に説明・伝達される。

1つは、結果について受診当日に説明し、生活指導・その他を行う（完成された結果成績表は後日郵送する）。2つめは、健診日より1週間以降に来所し、結果説明を受けていただき、その場で結果成績表をお渡しする。3つめは、後日結果成績表を郵送する、という方法である（ただし、契約により3のみの健康保険組合もある）。

総合健診・人間ドック受診者6,264名の中で、当日結果説明可能者5,651名のうち2,884名（51%）が結果説明を受けた。

要経過観察者のフォローアップ状況

ドック成績の結果、3カ月～6カ月後に再検査・精密検査が必要なケースについては封書による案内を行っている。

2008年4月より2009年3月までの案内件数は375件で、うち受診に応じた方は144件（38.4%）、呼び出し内容については表10のごとくであった。また、男女別・受診回数別・伝達法別についての比較は表11に示した。

総合健診の異常発見率（表12）

総合健診の総合判定の結果から異常発見率の高い病態順に列挙する。

男性では、肥満、高コレステロール血症、高中性脂肪血症、肝機能検査異常、高血圧、高尿酸血症、糖代謝異常、肺機能検査異常、聴力異常、顕微鏡的血尿、貧血、便潜血陽性、尿中白血球増、尿蛋白陽性、の順であった。

女性では、高コレステロール血症、尿中白血球増、

表12 総合健診の異常発見率

性・数	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
男性	病名	肥満	高コレステロール血症	高中性脂肪血症	肝機能検査異常	高血圧	高尿酸血症	糖代謝異常	肺機能検査異常	聴力異常	顕微鏡的血尿
4,355名	発見率(%)	43.0	41.7	29.6	27.0	24.1	11.8	10.3	10.2	9.6	7.7
女性	病名	高コレステロール血症	尿中白血球増	顕微鏡的血尿	肥満	高血圧	高中性脂肪血症	肺機能検査異常	聴力異常	貧血	便潜血陽性
1,806名	発見率(%)	49.1	30.5	19.0	16.4	14.2	7.6	7.4	5.5	5.3	5.3

(新老人ドック受診者5名及びT事業所関係98名含まず)

表13 総合健診で発見された消化器疾患

(ドック：男性4,355名，女性1,806名)

	食道		胃		十二指腸	
	男	女	男	女	男	女
悪性腫瘍	0	0	0	0	0	0
悪性腫瘍の疑い	0	0	0	2	0	0
潰瘍	0	0	7	1	2	0
潰瘍の疑い	1	0	3	3	6	0
ポリープ	20	11	354	314	5	4
ポリープの疑い	7	6	71	26	9	0
粘膜下腫瘍	4	1	19	12	1	1
粘膜下腫瘍の疑い	0	0	14	4	1	0
胃炎，びらん	0	0	323	109	3	0
潰瘍瘢痕	0	0	17	2	75	4
合計	32	18	808	473	102	9

(新老人ドック受診者5名及びT事業所関係98名含まず)

顕微鏡的血尿，肥満，高血圧，高中性脂肪血症，肺機能検査異常，聴力異常，貧血，便潜血陽性，糖代謝異常，肝機能検査異常，尿蛋白陽性，高尿酸血症の順であった。

また，総合健診で発見された消化器疾患は表13の通りである。

5 集団の健康管理

上部消化管内視鏡検査 (表14, 15)

総合健診や一般健診からの精密検査，一般外来での経過観察，ヘリコバクター・ピロリ除菌後などで行われた上部消化管内視鏡検査は520例（うち病理組織検査184例・35.4%）であった。また，一部健保機関は健診時ペプシノーゲン検査を行い，その結果によって次年度の健診時に内視鏡検査が施行されるようになっている。

内視鏡検査，組織診断結果は表14，表15の通りである。このうち4例に組織診断，1例に内視鏡のみで

表14 内視鏡検査所見内訳

(被検者520名)

疾患名	例数
胃癌	4
胃潰瘍・十二指腸潰瘍	13
ポリープ	115
粘膜下腫瘍	33
食道静脈瘤	11
胃・十二指腸潰瘍瘢痕	75
食道炎	35
胃炎・びらん	301
十二指腸炎	6
その他	1
正常・正常範囲	31

表15 上部消化管病理組織診断結果

(被検者184名中)

例数	163	17	0	1	3

表16 腹部超音波検査結果

(総合健診時)

疾患名	男	女
胆嚢ポリープ	742	182
胆嚢ポリープ(疑)	5	5
胆石	217	79
胆石(疑)	11	4
肝嚢胞	586	346
脂肪肝	1,144	127
腎嚢胞	815	204
悪性腫瘍	1	0
合計	3,521	947

(新老人ドック受診者5名及びT事業所関係98名含まず)

悪性疑いが呈され，ただちに内視鏡担当医または主治医によりフォローアッププランが立てられ，専門医のいる医療機関に紹介された。

また，粘膜下腫瘍などについては継続的にフォローされている。胃・十二指腸潰瘍，潰瘍瘢痕においては，へ

表17 集団の健康管理（下記について継続的な健康管理を行っている）

	団体名	実施人数（名）	内容	担当医師名
1	モーターボート選手，実務者関係	609	登録更新検査 実務者入学時健診	朝比奈 他
2	一般事業所	8,996	職員定期健診（二次検査含む） 雇入れ時健診 家族健診	朝比奈 落合 他
3	出張健診	469	1事業所	矢澤 他

リコバクター・ピロリ菌の有無のための判定（ギムサ染色判定）を109例に実施，うち57例が陽性であった。さらに除菌治療・効果判定のため，尿素呼気テストの検査47例が行われた。

総合健診で発見された悪性腫瘍は，胃癌5例，食道癌1例，大腸癌3例，子宮癌1例，乳癌1例，前立腺癌2例，胆のう癌1例であった。上記数字は紹介先医療機関からの返答書で確認されたケースである。

腹部超音波検査結果は表16の通りである。

総合健診（ドック）以外の集団健診で継続的に健康管理を行っている団体は表17の通りである。

経過は緩慢だが，20年以内に約40%が末期腎不全となっている。自覚症状がないからといって放置しないことが大切である。

慢性腎臓病は無症状のことが多く，ゆっくりと機能低下し透析に至ることがある。現在予防法はなく，決定的な治療も未確立である。ただし進行を抑えるために血圧コントロールと食事療法が重要である。

糖尿病患者は放置すると3～4名に1名は慢性腎臓病になる。糖尿病患者で尿蛋白が陽性になった場合は慢性腎臓病の進行は避けられない。心血管病のリスクも増大するが，長生きすれば透析が必要な末期腎不全に進行するため適切な治療が必要である。

腎臓機能の評価としてeGFR（計算式）を用いる。

腎不全進行を抑制するための治療法として，糖尿病患者での血糖コントロール，厳密な血圧コントロール，ACE阻害薬またはARB拮抗薬の効果が認められている。

また，現在研究段階にあり，効果が証明されていないものとして，食事蛋白の制限，高脂血症薬，貧血の改善がある。

腎臓を守る食事療法は1日あたり塩分6g以内を目標とし，腎不全の進行を抑制する可能性が期待できるため，蛋白制限食とする。カリウム，リンなども制限が必要である。末期腎不全とは尿素窒素，水，カリウム，酸などを蓄積し，尿毒症症状が出現。GFR<10ml/minで腎臓の寿命を迎えた状態であり，透析療法が必要となる。

腎臓専門医に紹介する目安は，（2+）以上の蛋白尿，血尿（+）かつ蛋白尿（+），腎機能eGFR<50ml/min/1.73m²，血尿単独の陽性は泌尿器科医に紹介が適当である。

現在，慢性腎臓病は世界中で増えている“隠れた病気”であり，多くの日本人の腎臓の働きが低下している。自覚症状がない早期から治療を開始すれば病気の進行を遅らせたり，症状を軽くすることができる。治療の中心は生活習慣改善と血圧コントロールであり，早めに腎臓専門医へ受診を勧めることが重要である。

6 健康管理担当者セミナー

日時 2008年12月5日(金)

会場 笹川記念会館4階会議室

参加者 51団体58名

ドック，健診の受診先へのサービスプログラムとして毎年開催しており，今回で29回となった。

演題

1) 理解されていない言葉としてのメタボリック症候群

日野原重明（当財団理事長）

2) 当センターにおける特定保健指導の実例

朝比奈崇介（ライフ・プランニング・クリニック所長）

土屋由紀子（ライフ・プランニング・クリニック管理栄養士）

3) 慢性腎臓病（CKD）とは何か - 疫学・診断・治療 -

小松 康宏（聖路加国際病院腎センター内科医長）

慢性腎疾患患者は年々増大の傾向にあり，最近，心血管病によるリスクも増大することがわかってきた。自覚症状がないだけに，腎機能が低下しているまま放置されていることが多い。

日本人に多い腎臓病はIgA腎症である。40%は10～20代で発症し，70%が健康診断で偶然発見されており，

7 クリニックにおけるドックの特徴と看護師の役割

1) 総合健診 (人間ドック)

当クリニックでは、これまで予防的・教育的医療の見地から、総合健診 (人間ドック)、生活習慣病健診、一般外来診療において疾病予防のための教育や成人の慢性疾患の継続管理を推進してきた。当初は一般外来受診者が上回っていたが、年々ドック、生活習慣病健診受診者の数が上昇している。

当クリニックのドックはリピーターが多く、開設以来30年以上にわたってドックを受診されている方も少なくない。当クリニックのドックの特徴は、検査のみに留まらず、身体的、心理的、社会的など、包括的に問題点が抽出され、その問題点に対して個別性を重視した方針が立てられる点である。問題点を把握するために、検査を進めていく中で看護師が個別に問診を行う。受診者に前もって現在の治療状況や気になっている症状を記載してもらった問診表を元にインタビューを行うが、その目的はがんや生活習慣病などの早期発見、およびその予防に必要な指導を行うための情報や、検査データに現れにくい症状などの健康問題を把握することにある。医師はすでに得られている問診情報をもとに診察を行い、必要であれば十分な説明のあと、受診者の理解を得た上でさらに必要な検査を追加する場合もある。

結果の説明は当日に聞くことができる。結果の判定は単なる健康診査ではなく、得られたすべての情報 (問診情報や検査データ) をもとに個別性を重視した問題解決型の総合評価であり、その中には生活習慣の変容や治療、将来の見通しについての見解も加えられる。医師の結果説明の後に原則として問診した看護師が再度面接をして重要な問題点を整理して受診者の理解度、問題点が解決されたかどうかの確認をし、それらの解決に必要な手助けを行う。具体的には、再検査や精密検査の説明と実施のプラン、緊急な問題への迅速な対応 (問題点に応じた専門医への受診や他の医療機関への紹介) などについて看護師がコーディネートする。その他、禁煙外来への動機づけ、食習慣改善のための栄養相談 (管理栄養士による専門的な指導) 運動の実施、心理的・社会的カウンセリングなどについても必要に応じてアドバイスする。生活習慣変容後のフォローアップ検査も実施し、継続的に管理している。

ドックの結果で専門医受診となったケースに関しては、

クリニックで問題点に応じて専門医を受診することができ、病態の評価、生活習慣の変容も含めて、継続的に慢性疾患受診者として治療を継続することが可能である。その場合も問診した看護師がプライマリ・ケアに関わることで治療効果をあげている。

受診者の診療録にはすべての健康情報、問診情報、検査データ、治療経過、受診者自身で測定した情報 (血圧、体重等)、紹介した医療機関の返答書などがファイルされている。そのため長期にわたる受診者の経過を把握することができる。それがプライマリ・ケアを可能とし、リピーターが多い理由の一つにもなっていると思われる。これは、他の健診センターにはない当クリニックのドックの特徴である。

2) 特定保健指導

2008年4月1日より「高齢者の医療の確保に関する法律」により、40歳から74歳までの日本国民全員が対象の特定健診及び特定保健指導が開始された。その実施にあたり、決められた問診の実施、メタボリック判定と保健指導対象者の選別、健診及び保健指導の結果を決められた電子データにより提出しなければならない。実施に先がけ各部門で検討を行ってきたが、当センターにおいてはパソコンのシステムの開発及び納期の遅れがあり、10月より稼働した。現在、保健指導実施のための契約を終了した健康保険組合の該当受診者に対して栄養士が保健指導を実施し、6カ月後の評価まで至ったケースが数例という状況である。今後、需要の増加により看護師も保健指導を行っていく予定である。

8 システム開発

1) 特定健診システムの導入と稼働

2008年4月から特定健診保健指導システムを稼働させるべくシステムの検討を行っていたが、厚生労働省の仕様変更等が相次ぎ、システム変更が多発した関係で受け入れの体制が整ったのは6月となった。これにより従来の健診システムと連携を取りながら特定健診保健指導が運用可能となった。新規に特定健診保健指導システム用 Server の導入、インフラ整備を実施した。

2) 特定健診保健指導結果表の作成

特定健診保健指導システムが稼働した結果、新たに健診結果評価表が必要となり、これを作成するとともに評

価表の出力運用体制を確立した。

3) 視力計測機器リプレースに向けて

視力計が経年変化に伴い動作不安定になる状況となったため、機器のリプレースとオンラインインタフェースの変更などに対処する視力計変更委員会を設置し、検討を開始した。

4) 放射線機器リプレースに向けて

放射線機材をすべてデジタル化するために、内部にリプレース対応部会を設置し機器の選定および問題点の解消に向けての調査・検討を行い、メーカーとのヒアリング、インタフェース等の打ち合わせを実施した。2009年5月より稼働の予定である。

5) 眼底検査システムの構築

眼底写真の読影対応をスムーズに行うことで受診者へのサービス向上を図るため、対応する外部委託会社を変更した。これに伴い、情報漏えいに対応したWAN接続環境の構築、院内LANの敷設が必要となり、インフラ整備を実施した。その結果、迅速な結果報告ができるようになった。

6) 健康保険組合への結果のフロッピーでの提供

要請のあった健康保険組合へ結果データをフロッピー形式で作成し提供した。また、出力形式の変更等があったため、提供先にあわせてフォーマット変更を実施した。

9 食事栄養相談

1) 相談人数と相談内容

2008年度食事栄養相談人数は延べ684名であった。

総合健診（人間ドック）の当日結果説明で医師より栄養相談を受けるよう指示のあった受診者には当日実施している。結果表によって栄養相談の指示があった方は、後日予約をとって受けていただいている。また、必要なケースは栄養相談後、医師の支持のもとに再検査を実施している。一般健診においても、生活習慣病の問題点があれば栄養相談の案内がされる。

基本的には、最初の面談で改善目標をたて、2回目の面接及び採血で肥満、高コレステロール血症、高中性脂肪血症、高尿酸血症・肝機能異常などの改善を確認している。一般診療においても慢性疾患の栄養相談を継続し

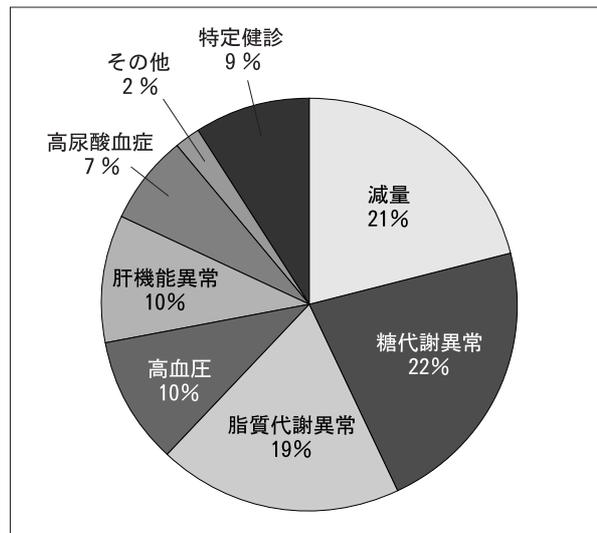


図3 病態別栄養指導の割合

ている。

2) 病態別栄養相談の割合 (図3)

減量21%、糖代謝異常22%、脂質代謝異常19%、高血圧10%、肝機能異常10%、高尿酸血症7%、その他（腎症、貧血、やせ、低LDL血症）2%、特定健診9%であった。

糖代謝異常・減量・脂質代謝異常が6割を占めている。

3) 年代別栄養相談

20歳代0.3%、30歳代14.9%、40歳代28.8%、50歳代34.4%、60歳代14.9%、70歳代5.8%、80歳代0.9%であった。

4) メタボリックコースの取り組み

2006年度からある企業と提携し、1月から3月の3カ月間ウエストダウンを主として生活習慣を自己チェックしていただき、食事内容に注意しながら健康的な生活を送るための健診・指導を行っている。

対象

20歳代から50歳代の自薦他薦の社員22名

(40歳代10名・50歳代7名・30歳代4名・20歳代1名)

方法

a. 初回集団指導

・医師・管理栄養士から講話

・減塩・低カロリー食を喫食しながらいつも食べている食事と味付け、量を比べていただく

- ・前年体験者からのアドバイス
- ・食行動アンケート・3日間の食事記録
- ・現時点での目標と目標達成に向けて具体的なアクションを3点決意表明する

b. 管理栄養士による1週間に一度のメールと月1回の面談(個別)

c. 3カ月後の健診・評価

結果

- ・体重減少平均 - 4.3kg (-0.1 ~ -12.6kg)
12kg減2名・5 ~ 9kg減7名
例) 76.2kg 63.6kg・78.5kg 66.3kg・81.7kg 77.3kg
- ・BMI 25以上.....22名中11名から5名に減少
例) BMI 29.5 24.8・28.4 25.6
- ・腹囲 85cm以上...22名中16名から6名に減少
腹囲減少平均 - 6.9cm (+2cm ~ -17cm)
例) 90cm 73cm・99cm 85cm・97cm 93cm
減量に伴い血清脂質・肝機能・尿酸値・血圧などのデータが改善された。

考察

22名中5名は事前の健診検査値に異常が見られなかった。そのうち3名が腹囲85cm以上だったが以内に改善された。前年に引き続き会社をあげてのサポート体制があり週1回のメールによる栄養指導、月1回の栄養相談で意識づけが継続されたと思われる。

参加者からは、食生活を見直してよかった、気づかせてもらえたなどのコメントがあった。

今後、リバウンドが起らないようにするためフォローを入れていきたい。

5) 特定健診・保健指導

当クリニックは開設以来生活習慣病予防を主体として人々の健康の維持、増進を援助し支えることを重視してきた。

2000年4月から「高齢者の医療の確保に関する法律」

により医療保険者に対して、特定健診・特定保健指導の実施が義務づけられた。当クリニックが長年取り組んできた生活習慣病予防のプログラムを、国をあげて行うようになったともいえる。

4) で紹介したケースは、企業の協力もあり、この特定健診・保健指導を先取りした形となった。

特定健診・保健指導状況

- ・健康保健組合4カ所と契約
- ・2008年10月31日より指導開始
- ・指導対象者(2009年3月31日現在)62名
- ・指導開始者.....動機付け支援 4名
積極的支援 25名
(実施率47%)

方法

- ・初回面接で60項目のセルフチェック実施
- ・個々に合わせた行動計画及び目標設定
- ・面接と電話で6カ月間の支援
- ・中間と最終自己評価
- ・最終検査結果と評価

10 禁煙外来

従来、当センターでは、禁煙教室・禁煙指導を自由診療として行っていたが、2006年4月にニコチン依存症管理料として禁煙治療が保険適用になったため、2006年12月より新しく呼気一酸化炭素濃度測定器を揃え、保険診療として開始した。各担当医師と専門ナースが中心となって、薬物療法を基本に面接指導を行っており、3カ月中5回の受診を限度として保険が適用される。2008年5月以降禁煙補助薬バレニクリンも使用可能になった。

2008年4月から2009年3月までに保険適用で指導を受けられたのは23名(男性19名、女性4名)であった。ドック・健診・一般診療中に勧められた方が15名、インターネットで当禁煙外来を知り受診した方が8名である。

報告/土肥 豊(ライフ・プランニング・クリニック所長)

ピースハウス病院 (ホスピス)

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000 - 1

ピースハウス病院は2008年に開設15周年を無事迎えることができた。独立型のホスピスとして主に終末期の癌患者に症状緩和、QOL 向上・維持のためのケアを提供している。

神奈川県西部の丘陵地帯の一角、西に富士、北に丹沢を望む高台にあり、庭には四季の花々が咲き、樹木が木陰を提供する。5,645坪の敷地に、大きな家を思わせる1,000坪余の建物がある。やすらぎの家として、全人的ホスピスケアの提供、家族の支援、チームワーク、およびモデル施設としての役割を果たすことを目指している。併設のホスピス教育研究所でホスピスケアについての啓発・普及や研究、教育などを行っている。

表1 入院状況

1) 入院患者数	246名
2) 性別 男性	114名
女性	132名
3) 平均年齢	72.3歳
4) 平均在院数	25.8日

表2 原発疾患

肺がん	64	乳がん	9	副鼻腔がん	2
胃がん	31	咽頭がん	7	口腔がん	2
結腸がん	19	膀胱がん	7	甲状腺がん	2
子宮がん	17	胆道がん	4	胆嚢がん	2
卵巣がん	15	唾液腺がん	4	前立腺がん	2
膵がん	14	食道がん	3	原発不明がん	3
肝がん	14	腎がん	3	その他のがん	13
直腸がん	14	脳腫瘍	3		

表3 患者住所

神奈川県	226 (92%)	川崎市	7	湘南西部	
東京都	14	横浜市	23	平塚市	37
静岡県	3	鎌倉市	3	伊勢原市	12
愛知県	1	横須賀市	3	秦野市	23
兵庫県	1	大和市	2	中郡	30
千葉県	1	綾瀬市	1	計 102 (42%)	
計	246	座間市	2	県西部	
		海老名市	4	小田原市	25
		厚木市	10	南足柄市	5
		藤沢市	10	足柄上郡	7
		茅ヶ崎市	5	足柄下郡	8
		相模原市	8	計 45 (19%)	
		愛甲郡	1		

ピースハウスのような専門施設を利用できる患者は限られているので、一般病棟や療養施設、福祉施設などにおいても、また在宅でも良質の緩和ケアを提供できるようにしていく必要がある。個々の事業体における努力も大切であるが、多種の関連事業体が有機的に連携して、必要としている者に最適の緩和ケアを最適の場所で最適の時期に提供できるような仕組み、地域緩和ケアネットワークを構築することが求められている。その一助として、近い将来に在宅療養支援診療所を立ち上げるべく準備を進めている。

I 診療

(1) 入院ケア (入院状況など付表1～4参照)

2008年度の入院患者は246名(前年比3%増)、延べ6,420名(2.4%減)であった。性別では、やや女性が多く、平均年齢は72.3歳と上昇した。平均入院日数は約20日で前年よりさらに短くなった。いつでも入院相談に応ずることができるような態勢を整え、希望する人をできるだけ受け入れようとした結果が、皮肉にも平均入院日数短縮化に結びついたものと考えられる。原発疾患については、最近の例に漏れず肺癌が最も多かった。患者住所は92%が神奈川県であり、その3分の2が湘南西部・県西部であった。

(2) 病院機能評価

2008年度は病院機能評価更新の年であった。8月18、19日訪問審査、および中間的な結果報告に基づく書類上の[補足的な審査]を経て、認定された。

(3) 遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究への協力

対象となった遺族の70%が第三者の研究者に回答を寄せた。平均値ではあるが、ほとんどの項目で全国平均以上の評価を得た。自由記述のコメントの中に、再検討や何らかの対処を必要とするようなものは見当たらなかった。

(4) 緩和医療専門医認定制度発足

2008年度中に申請し、2009年4月1日付で、非営利活動法人日本緩和医療学会認定研修施設(暫定指導医西立野研二)となった。

報告 / 西立野研二 (院長)

表4 紹介元

東海大学医学部付属病院	68	国立がんセンター中央病院	3
小田原市立病院	19	小澤病院	3
平塚共済病院	19	済生会平塚病院	3
東海大学医学部付属大磯病院	13	伊勢原協同病院	2
藤沢市民病院	9	聖マリアンナ医科大学病院	2
平塚市民病院	7	聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院	2
北里大学病院	7	東京医科大八王子医療センター	2
県立足柄上病院	6	聖隷横浜病院	2
秦野赤十字病院	5	横浜市立大学附属病院	2
国立病院機構神奈川病院	4	横浜市立市民病院	2
海老名総合病院	4	県立汐見台病院	2
山近記念総合病院	4	藤沢湘南台病院	2
神奈川県立がんセンター	4	湘陽かしわ台病院	2
済生会横浜市東部病院	4	癌研究会有明病院	2
		その他（1件ずつ）	42

2 ケア

1) 地域連携室（相談・外来・デイケア・往診）

ピースハウス病院のケアプログラムすべての始まりの窓口を担う地域連携室は、今年度、MSW 1名と看護師2名の体制で活動を始めた。

年間の相談・外来・デイケア・往診概況は、表5の通りであった。往診以外はいずれも前年より件数において増加した。「ほぼ毎日相談窓口を開き、タイムリーに相談を受け、連携看護師が病棟サポートに入って、タイムリーに入院を受けることにより、ピースハウス病院の利用率を向上させ、ホスピスケアを希望する方に多く利用していただけること」を目標にこの2年間は地域連携室を運営してきたが、結果として、患者家族にとってのよきタイミングでなく、「医療制度の都合とされる不本意な転院」を余儀なくされたケースも増加したのではない

かという反省も生じている。このことは、単に、最初の相談の窓口のあり方の工夫でコントロールできるものではなく、「必要とするだれもが、いつでも、どこでも良質なホスピス緩和ケアが利用できる」地域のあり方を地域の中で考える取り組みや、ピースハウス病院が連携する医療機関等との具体的な事例を介した“地域内での継続的なケアのあり方・体制づくり”の検討を地道に重ね、改善策を実行する必要性を痛感させられた。

今後のケアの提供の仕方に示唆を与えられたケースとして、年単位にまたがる外来・入院のプロセスを共にした方々が3名あった。体調のよい時期は、外来やデイケアを、症状マネジメントや気持ちの整理のために短期入院をし、最終的には入院ケアを受ける時期を適切に判断されたケースであった。

2) 入院ケア

通年で250名の方々の入院ケアを行った。平均在院日

表5 地域連携室

外来統計	(人)	(人)	(人)
患者総数	26		転帰 (26名)
外来利用者	16	延外来件数 65	ピースハウス入院死亡 18
デイケア利用者	3	延デイ件数 22	在宅死亡 2
往診利用者	12	延往診件数 46	継続中 4
*重複利用有			他院へ 2
相談統計	年間 (前年比)	月平均	
初回電話相談数	920 (+44)	76.7	
初回来院相談数	414 (+48)	34.5	
電話相談来院相談率	45 (+3.2%)	45.0	
入院患者数	250 (+11)	20.8	

表6 褥瘡発生率 (人)

退院患者数	236
新規発生数	26
発生率	11% (前年15%)

* 持ち込み褥瘡も合わせて、計71個の褥瘡をケアし、うち17個が治癒 (24%)

表7 しのが会開催状況

	2006年		2007年		2008年	
	第21回	第22回	第23回	第24回	第25回	第26回
対象患者数	91	94	105	95	115	132
出席家族数	22	32	33	26	31	43
出席人数	39	79	75	55	72	86
参加率	24.2	34.0	31.4	27.4	27.0	32.6

数が前年比5.5%減の25.8日となり、重症度・ケア度ともに重くなり、入院時の適切な包括的アセスメントとケア提供が求められ、地域連携室との連携をとりながら、多職種が協働してケアを行った。

また、退院数は246名で、そのうち236名(96%)が死亡退院であり、9名(4%)が在宅療養として外来通院や訪問診療で継続したケースであった。

看護部では、全身的なケアの観点から、スキンケアを含めた褥瘡予防ケアと浮腫に対するケア、可能な限り経口摂取により食を維持できるように摂食口腔嚥下ケアおよび排泄のケア、患者と家族を一つのユニットとしてケアする際の家族ケアについて重点項目として、学習およびケアの改善を行った。これら重点項目の取り組みにおいては、栄養士やボランティアの専門家をはじめとする多職種での取り組みである。

褥瘡ケアにおいては、表6の通りのケア実績であった。

3) ビリーブメントケア

ビリーブメントケアプログラムのうち、「しのが会」は、2008年5月24日(2007年6月1日～11月30日に亡くなられた方)と11月16日(2007年12月1日～2008年5月31日に亡くなられた方)に開催した。ご遺族とスタッフが、久しぶりの再会をしてお茶を共にしながら、今は亡き方々を偲んだ。「しのが会」開催概況は表7の通りであった。ピースハウス病院入院患者数の増加とともに、対象となる方々の数も増加し、現在のように年2回の開催形式が妥当なのかどうか課題が残った。

報告/二見 典子(看護部長)

3 ボランティア活動

2008年9月、ピースハウスは開院15周年を迎えた。これを記念する行事を立案遂行するために結成されたワーキンググループにはボランティア代表も参加し、多彩な行事が行われた。「ありがとう15年」をテーマとしたピースハウス活動報告『ふれんず』第14号の発行、過去3年間ピースハウス友の会会員として寄付を継続して下さっ

た方々と過去に500時間以上活動してリタイアしているボランティアを招いて開催した「ご支援に感謝する会」、地元中井町の「美緑フェスティバル」への参加、院外のサポーターを招いて行った「仲間たちの会」、歴代スタッフ・ボランティア名簿の作成などが主要なものである。新生ボランティアの会は2期4年目を迎え、活動の充実を図るとともに、組織や活動内容の見直しを行い、7年ぶりに『ボランティアハンドブック』の改訂に取り組んだ。

2009年4月1日現在のボランティア登録者数は89名(うち男性14名)で、その実態は次の通りである。平均年齢は58.2歳(最高齢79歳、最低齢25歳)と0.7歳若返り、年齢構成は70代14名、60代33名、50代23名、40代12名、30代5名、20代2名となっている。県内在住者が75名(84%)を占め、うち59名(66%)が秦野、平塚、大磯、小田原など15km以内に住んでいる。活動期間をみると6年以上のベテランが31名(35%)いるが、この1年を振り返ると入会者が13名、退会者21名と、はじめて減少に転じ、活動の中核は徐々に若手に移りつつある。その結果、2008年度のピースハウスボランティアの総活動時間は26,318時間、前年度比-416時間1.6%減となった。

2008年度達成累積活動時間によるピースハウスボランティアの表彰者は23名(16,000時間1名、15,000時間1名、9,000時間1名、3,000時間3名、2,000時間4名、1,000時間6名、500時間7名)である。

1) ボランティアの会の活動

活動として特に目新しいものはなかったが、曜日間の連携強化に努め、日々の活動のあり方について改善に努めた。2008年度は総会1回、幹事会8回、役員会4回を開催して会の運営に当たった。各曜日ごとに意見を出し合い、幹事会・役員会で決定するというリーダー制が定着した。

2) ボランティア活動資金収支とフレンズショップ会計

活動資金の主な収入は前年度繰越145万円、募金箱68万円、府中はなみずき寄付10万円、パザー30万円、支出

はティータイム食材費53万円、美容費34万円、当財団への寄付7万円、行事費12万円などで次年度に140万円を繰り越している。

2008年度は従来病院が負担していたアートプログラム経費、アロマオイル代などを新たにボランティア資金で賄うことにした。フレンズショップ会計は、前年度繰越68万円、売り上げ52万円、支出は仕入れ23万円で、次年度繰越126万円となっている。

3) 特技ボランティアの状況

毎週日曜日の午後、4名チームで行われているアロマセラピー、水曜・金曜のナイトケアで実施されるマッサージ、火曜午後のアニマルセラピー、その他に、園芸や庭園の環境整備に関わるボランティア、一級建築士による営繕活動、設備関係の保守管理やパソコンなどIT関係のメンテナンスに関わるボランティアなどその活動は多彩である。また、ナイトケアが、現在、月・火、水・金、土の各曜日に行われている。ボランティアによるシャトルバスの運行は水・土のみ実施されている。引き続き運転ボランティアの確保に注力したい。

4) 機関紙『花水木』の発行

『花水木』は第46号～第49号が刊行された。写真、投稿などを幅広く集め4ページ以上の読み物として内容も充実させた。

5) 見学・交流の実施

2008年度の見学は11月27日(木)星野富弘美術館見学ツアー(参加者33名)1回のみで留まったが、日本病院ボランティア協会の総会や関東地区病院ボランティアの会には積極

的に参加し交流を行った。

6) ボランティアアドバンス講座への参加

アドバンス講座は昨年同様5回開催した。テーマと参加人員は次の通りである。

7) 高校生、学生の夏期ボランティア体験実習指導

2008年度は7月下旬から8月下旬まで1か月にわたりボランティア体験実習を受け入れた。今年は、高校生は2校から11名(秦野曽屋高校4名、七里ヶ浜高校7名)、大学生は2校から4名(北里大学保健衛生専門学院1名、ルーテル学院大学3名)の計15名の実習指導を行った。

・七里ヶ浜高校生の体験学習報告書から

「(前略)死と向き合うことは簡単なことではありません。しかし、人間には向き合わなければいけない時が必ずやってきます。今回のホスピスでの体験は、今まで深く考えたことのないようなことを1から考える機会となり、様々な仕事をやらせていただいて“ボランティア”というものの多くを勉強することができました。『何年間もボランティアを続けてこれるのは、患者さんの笑顔やありがとうという言葉からパワーをもらっているからなのかもね』、こんなボランティアさんの言葉を聞いて、私も将来、看護やボランティアの仕事に携わりたいと強く思いました。(後略)」。

近年、福祉を中心に校外体験学習を取り入れる高校が増え、七里ヶ浜高校も事前学習を実施するなどして学習効果の向上を図っている。

8) アートプログラム・ティータイムサービス

日曜・祝祭日、年末年始、ボランティアアドバンスト

表8 ボランティアアドバンス講座

開催日	テ ー マ	参加人数
4月16日(水)	・ボランティアの会総会 ・講演「終末期患者のスピリチュアルペインと援助者のあり方」 講師 賀来周一氏	42名
7月14日(月)	・「共に学ぼう看護の技術」-不安なくケアに携わるために アドバイザー 看護部 瀬戸ひとみ・米山由希子 感染予防院内研修会 米山由希子	43名
12月11日(金)	・ピースハウス交流会 院長講話、DVD鑑賞「ホスピス緩和ケアのあゆみ」、 グループワーク「私のエンドオブライフ」 ・忘年会 大磯プリンスホテル	36名
1月20日(火)	・「共に学ぼう看護の技術」-不安なくケアに携わるために アドバイザー 看護部 瀬戸ひとみ・米山由希子 感染予防院内研修会 米山由希子	39名
3月25日(水)	・「ホスピスケア」家族について考える。 家族がホスピスを訪ねるとき(パネルディスカッション) 私と家族 家族への思い、ケアの思い	33名



「ピースハウスの四季」ピースハウスボランティア・増淵志計男さん撮影

ボランティアはチームメンバーの一員として活動しています



朝のミーティング



看護技術を学ぶ



「しのぶ会」お手伝い

講座開講の日を除き、毎日行ってきた。アートプログラムの内容は、押し花(月)、絵と書(火)、フラワーアレンジメント(水)、ゆび編み・さをり(木)、歌う会(金)、庭さんぽ(金)、折り紙(土)、いなご会《俳句・川柳》(月1回)。開催回数は251回(前年度比-34回)、参加者は延べ1,722名(前年度比-11名)で一回平均6.9名(前年度比+0.8名)、そのうち患者・家族の参加者は654名(前年度比-29名)、1回平

均2.6名(前年度比+0.2名)であった。

ティータイムサービスは毎日午後3時~4時ティールoungeで行われ、合計285日(前年度+1日)、一日の中で最も楽しいひと時を演出してきた。そのうち5回がボランティアの演奏家を招いてティータイムコンサートという形で実施された。

報告/志村 靖雄(ホスピスボランティアコーディネーター)

ピースハウスホスピス教育研究所

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000 - 1

ホスピス教育研究所の主な活動は、1) ホスピス・緩和ケアに関する一般への啓発・普及活動、2) ケアに従事する専門職・ボランティアを対象とする講座・セミナー・ワークショップの開催、3) ケアの実際を臨床の場で体験する研修生の受け入れ、4) 各種研究会の開催、5) 研究所会員への文献案内サービス、6) 機関紙の発行、7) 国内外のホスピス緩和ケア関係者との情報交換、8) 神奈川県西部地域における緩和ケアネットワーク構築に向けた活動などである。

また、「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として、年次大会・理事会・総会・専門委員会の開催、全国の緩和ケアの現状調査、セミナーや講演会の開催、ニュースレターの発行など、並行して行っている。

I 活動の全体像

1) ホスピス緩和ケアの啓発・普及

ホスピス緩和ケアについての正しい理解を広め、ケアを有効に活用していただくことを目的に、一般の方を対象とした「ホスピス公開セミナー」を開催し、多くの参加を得た。また、地域で活動する民生委員、ボランティアなど、グループを対象とした見学会を開催し、ホスピスケアの紹介とともに地域の方々との交流の場を持つことができた。

2) 講座・セミナーの開催

ホスピス緩和ケア講座では、ピースハウス病院の医師と看護師の協働により、がん性疼痛マネジメントを中心とした講義と事例提示をし、一般病院や訪問看護ステーションの看護師など、参加者との質疑応答、意見交換が活発に行われた。

ホスピスセミナー、ワークショップでは、緩和ケアの最近の動向を受けて、高齢者の看取りの問題、がん患者に対するリハビリテーションやリンパ浮腫のケアなど実践的な課題、また、地域で暮らす人々に焦点を当てた家族ケアのあり方などをテーマとし、多数の参加を得た。

ボランティアの育成、特に、ピースハウス病院で活動しているボランティアを対象とするアドバンス講座では、看護技術の習得とともに、スピリチュアルケアや家族のケアについて学び、また、自己の死生観について考

える場を持つなど、ホスピスケアのチームの一員としての自覚と責任感を高める機会にもなったと考える。

3) ホスピス国際ワークショップの開催

第16回を迎えたホスピス国際ワークショップは、イギリスのサリー大学にて認知症患者の看護の教育や研究に携わっているグリーズ氏、プリンセスアリスホスピスのソーシャルワーカー部門責任者のレイス氏を招聘し、「エンドオブライフ（終末期）ケアの実際 - 家族構成員に目を向けて -」をテーマに開催し、全国から緩和ケアに関心を持つ多数の医療関係者の参加を得た。わが国の、ホスピス緩和ケアは主に成人のがん患者を対象に提供されているが、高齢化時代を迎え、高齢者の終末期ケアや認知症の問題は今後取り組んでいくべき重要課題であり、グリーズ氏の研究に裏付けられた講義はたいへん興味深く、有益であった。一方、ソーシャルワーカーとして臨床経験豊かなレイス氏は、家族の悲嘆の問題、特に、親を亡くす子どもへの関わり方について、事例紹介も含め具体的な説明をされ、今後の日本での取り組みにもたいへん参考になる内容であった。また、参加者同士の経験の分かち合いや意見交換の場を持ち、学習の場を深め、参加者からも本ワークショップは非常に有意義であったとの感想が多く寄せられた。

4) 研修の受け入れと派遣

高校生のボランティア体験実習、医学・看護学生の臨床実習、緩和ケアに従事する医師や看護師の研修など幅広く受け入れ、ホスピス緩和ケアの実際を体験学習できる場を提供することができた。研修生との交流は、院内のスタッフやボランティアにとって、自分たちのケアについて自ら説明をし、逆に、客観的なフィードバックを受けるなど、学習の機会となっている。

一方、院内のスタッフを学会や研究会、研修などに派遣し、新たな学びや気づきを得たスタッフから研修報告を受けることは、ピースハウス全体のケアの質の向上に繋がっていると考える。

5) 研究会の開催

事例検討会、ホスピスケア研究会、Study Day など、各種研究会ではプレゼンテーションをスタッフが交代で

担当することになっている。2～3カ月前から発表に向けた準備を始め、その過程での学びがあり、さらに、当日は、医師・看護師・栄養士・チャプレン・音楽療法士・ボランティア・ハウスキーパーなど、それぞれの視点からの意見交換があり、互いに多くの気づきや学びを得ている。

6) 地域緩和ケアネットワーク事業

神奈川県2次医療圏における湘南西部・県西圏域を主な対象地域とし、がんなどにより緩和ケアを必要とする患者・家族が、住みなれた地域で病気をもちながらも最期までその人らしく生活できるよう支援するために、地域の医療福祉関係者の連携を強化し、緩和ケアネットワークを構築することを目的に、2007年度より病院全体で本事業に取り組んでいる。その活動の一つとして、近隣の医療福祉関係者との協働で開催する「地域緩和ケア研究会」がある。

今年度は、緩和ケアの提供形態別のテーマとし、それぞれの場の働きの現状と課題を検討した。地域全体を視野に入れた継続ケアのあり方について課題を共有することができ、ケアの実践における協力関係強化にもつながりつつある。

表 講座・セミナー

講座名	日時	日数	講師(所属)	参加者数
ホスピス緩和ケア講座	2008年10月～11月	2	西山野研二 (ピースハウス病院院長) 他7名	延98
ホスピスセミナー 緩和ケアのりハビリテーション	2008年7月	1	増田 芳之 (静岡県立がんセンター理学療法士)	63
ホスピスセミナー 高齢者の終末期医療と看取り	2008年9月	1	福岡 誠之 (洛和会ヘルスケアシステム医師)	83
ホスピスセミナー 家族への支援 -療養中のケア,そして遺族のケア-	2009年2月	1	中山 康子 (在宅緩和ケアセンター‘虹’代表理事)	69
ホスピスワークショップ リンパ浮腫のケア	2008年11月	1	佐藤佳代子 (後藤学園付属リンパ浮腫研究所所長)	76
春期ボランティア講座	2008年5月～7月	8	志村 靖雄 (ピースハウス病院ボランティアコーディネーター) 他7名	13
秋期ボランティア講座	2008年11月～ 2009年1月	8	志村 靖雄 (ピースハウス病院ボランティアコーディネーター) 他7名	6
ボランティアアドバンス講座	2008年4月～ 2009年3月	5	賀来 周一 (キリスト教カウンセリングセンター相談所長) 他8名	延214
ホスピス公開セミナー (対象:ホスピスケアに関心を持つ個人など)	2008年4月～ 2009年2月	11	瀬戸ひとみ (ピースハウス病院がん性疼痛看護認定看護師)	延158
ホスピス公開セミナー (対象:民生委員,ボランティア団体など)	2008年7月～ 2009年1月	4	森口 恵子 (ピースハウス病院ハウスキーパー) 他2名	延77

2 教育研究活動の実際

1) 講座・セミナーの開催(下表)

2) 第16回ホスピス国際ワークショップの開催

開催日 2009年2月7日(土)～8日(日)

開催場所 ホスピス教育研究所

テーマ エンドオブライフ(終末期)ケアの実践

- 家族構成員に目を向けて -

講師 Dr. Kay de Vries

PhD, MSc (Education), PGCEA, BSc (Hons), Dip Nursing, Cert Community Health, Reg Midwife, RGN Faculty of Health and Medical Sciences, Division of Health and Social Care, University of Surrey Senior Lecturer, Princess Alice Hos-



講師の Dr. Kay de Vries (左) と Ms. Margaret Reith



ホスピス緩和ケア講座



ホスピスワークショップ
「リンパ浮腫のケア」
佐藤佳代子講師



ホスピスセミナー
増田講師(中), 福間講師(右),
中山講師(下)



pice, Esher, Surrey, UK
Ms. Margaret Reith
M.Phil, BA (Hons), Certificate of Qualification in Social Work (CQSW), Advanced Award in Social Work, Social Work Team Manager, Princess Alice Hospice, Esher, Surrey, UK

内 容 第1日目

- ・終末期ケア 英国における最近の動向
- ・家族のケア：愛する人の死ぬとき
- ・悲嘆(グリーフ)と死別(ビリーブメント)
理論と実践の統合

第2日目

- ・認知症者とその介護者の死別と喪失の問題
- ・子どもを支える：家族を亡くす時
- ・ストレス - 自分のケア

参加人数 125名

3) 研修生の受け入れ

医療職のためのホスピス研修(計10名)
鶴巻温泉病院 医師(1), 遠藤医院 医師(1), 東京医療センター 医師(4), 平塚市民病院 医師(1), 手稲溪仁会病院 医師(1), 国立成育医療センター 医師(1), 横浜市立病院 看護師(1)
緩和ケアナース養成研修(計14名)
日本看護協会「緩和ケアナース養成研修」(14名)
(株)日立製作所日立総合病院(1), さいたま赤十字病院(1), 茨城東病院(1), 同愛記念病院(1),

杏林大学医学部付属病院(1), 東京大学医学部付属病院(1), 相澤病院(1), 兵庫県看護協会すまいる訪問看護ステーション(1), 岩手県立久慈病院(1), 総合病院山口赤十字病院(1), 上都留賀総合病院(1), 栄光病院(1), 福井県済生会病院(1), 名古屋市立東部医療センター守山市民病院(1)

神奈川県看護協会緩和ケア認定看護師教育課程研修生, 教員(32名)
専門職のためのホスピス研修(1名)
手稲溪仁会病院 栄養士(1)
医学生のためのホスピス研修(3名)
東海大学医学部(3)
看護学生のためのホスピス研修(2名)
慶應義塾大学看護医療学部(2)
ホスピス体験実習(計14名)
神奈川県立七里ヶ浜高等学校生徒(6), 神奈川県立秦野曾屋高等学校(5), 北里保健衛生専門学院(1), ルーテル学院大学(2)

4) ピースハウス見学者への対応 53件 343名

主な見学団体

German Hospice Foundation, ホスピス・マレーシア 医師, 医療法人東札幌病院, 財団法人神山復生病院, 武蔵台病院, 湘南東部総合病院, 横須賀共済病院, 松が丘内科クリニック, 自治医科大学看護学部・大学院, 国際基督教大学, 女子栄養大学大学院, 東海大学チャレンジセンターボランティアプロジェクト, 小田原高等看護専門学校, ホスピスケア研究会, 日本財団, 東

京都港区みなと保健所，神奈川県医療社会事業協会，ピースハウスを応援する会横浜，平塚花水公民館サークル森々会，前シンガポールアシシホスピスボランティア，Circus 叶高，東城山ハンドベルグループ，テルモ(株)研究開発センター，戸田建設本社医療福祉部計画課，(株)コプラス コンサルティング事業部 など

5) 研究会の開催

事例検討

期 間 2008年4月～2009年3月(10回)

延参加者数 228名

主なテーマ

- ・意識障害のある患者のニーズの理解とそのケア
- ・過活動型せん妄のある患者への対応 - 患者のことに立ちつくむとき -
- ・終末期における家族ケア - 「モルヒネがいい薬だなんて！」妻の言葉から考えること -
- ・生きる希望を支えるホスピスケア - 化学療法に希望を託した患者とそれを支えた家族から学ぶ -
- ・その人らしさを支えるケア - ケアを拒否する患者との関わりを通して -

・入院期間の短縮化とホスピスケア - 今，求められること -

・在院期間短縮に伴う栄養ケアの現状と今後の課題

・地域連携室の現状と今後の緩和ケアネットワーク

ホスピスケア研究会

期 間 2008年5月～2009年2月(5回)

延参加者数 29名

主なテーマ

- ・「あれ，ちがう…」と思った時，私は…。
- ・患者・家族の感情に向き合う
- ・旅立ちを創る - カトリックも禅宗も捨てた男 -
- ・「患者さんと共に泣く」ということ
- ・希望と平安に生きるために

Study Day 症状マネジメントを学ぶ

期 間 2008年5月～2009年3月(5回)

延参加者数 85名

主なテーマ

- ・症状マネジメント - 疼痛 -
- ・ターミナル後期の呼吸器症状の緩和 - 喘鳴へのケアを中心に -
- ・せん妄症状をもつ患者の看護 - 本当にこれでいいの？もう一度立ち止まってみよう -

・これで作らない！褥瘡ケア

・家族ケア - ピースハウス病院におけるケアの実際から考える -

地域緩和ケア研究会

期 間 2008年4月～2009年1月(5回)

延参加者数 269名

主なテーマ

・神奈川県西部地域における地域緩和ケアネットワーク

・がん診療連携拠点病院における緩和ケアチーム

・ホスピス緩和ケア病棟におけるケアの実際と今後の課題

・在宅療養支援診療所におけるケアの実際と今後の課題

・一般病院におけるケアの実際と今後の課題

医師のための緩和ケア研究会

期 間 2008年5月・7月(2回)

延参加者数 13名

主なテーマ

・乳癌術後，骨転移のある患者の症状マネジメント - 疼痛緩和，終末期のせん妄対策を中心に -

・癌による苦痛の和らげ方 - 痛みの評価と治療薬について - 痛みを和らげるためにできること -

6) 図書・文献整備

購入図書 11冊

定期購読雑誌 14誌(洋雑誌7誌・和雑誌7誌)

7) 研究所会員制度(図書貸出，文献検索サービスなど)

会員数 27名(医師8名，看護師7名，ソーシャルワーカー

2名，音楽療法士1名，大学教職3名，パストラルケアワー

カー1名，牧師1名，生活指導員1名，ボランティア1名，

その他2名)

8) 機関誌発行

ピースハウス活動報告(ふれんず Issue No.16) 5,000部

3 学会等参加活動

1) 学会発表

・坂本恵，田中美江子，張修子，二見典子，西立野研二，松島たつ子：地域緩和ケアネットワークの構築 - 学習の場の共有と実践を通して - ，日本死の臨床研究会年次大会，2008.10.4 - 5，札幌市

・中武さやか，平野真澄：ホスピスにおける在院期間短

縮に伴う栄養ケアの対応と今後の課題，日本死の臨床研究会年次大会，2008.10.4 - 5，札幌市

2) 学会参加

- ・日本緩和医療学会，2008.7.4 - 5，静岡県，尹良紀，二見典子，伊藤真実子，伊部千恵子，江森由紀子，松島たつ子
- ・日本ホスピス・在宅ケア研究会，2008.7.12 - 13，千葉市，米山由紀子，西田真理
- ・日本褥瘡学会，2008.8.29 - 30，神戸市，張修子，山内かおり，竹中麻里子
- ・日本臨床死生学会，2008.9.6 - 7，札幌市，瀬戸ひとみ，松島たつ子
- ・日本摂食・嚥下リハビリテーション学会，2008.9.13 - 14，千葉市，遠藤直美
- ・家族看護学会，2008.9.13 - 14，藤沢市，田中美江子，安住和夏，清水直子
- ・日本死の臨床研究会年次大会，2008.10.4 - 5，札幌市，小早川晶，岩本貴子，坂本恵，蛇川真紀，平野真澄，中武さやか，松島たつ子
- ・日本サイコオンコロジー学会，2008.10.9 - 10，東京都，白石桂子

3) 研究会・セミナー参加

- ・ホスピスケア研究会，2008.7.12 - 13，東京都，山本とも子，高木由美子，岸由希子
- ・NPO 法人日本ホスピス緩和ケア協会年次大会，2008.7.19 - 20，仙台市，西立野研二，二見典子，張修子
- ・日本病院ボランティア協会総会，2008.10.30，京都市，志村靖雄
- ・神奈川県神経難病の呼吸ケアを学ぶセミナー，2009.1.24，横浜市，瀬戸ひとみ

4) 研修参加

- ・神奈川県看護協会研修会・管理者研修，2008.10.21・22・24，白柳朱美

5) アジア太平洋ホスピス緩和ケアネットワーク (APHN)

- ・アジア太平洋ホスピス緩和ケアネットワークカンファレンス・理事会，2008.9.24 - 26，ベトナム ハノイ，西立野研二

4 「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として

協会は，1991年に「全国ホスピス緩和ケア病棟連絡協議会」として発足し，その後，緩和ケアの提供形態が病棟だけでなく，緩和ケアチームや在宅ケアとしても提供されるようになり，2004年，「日本ホスピス緩和ケア協会」として改称した。また，2007年10月にNPO 法人として認可され，1) ホスピス緩和ケアの啓発普及に関するセミナー，講演会等の開催事業，2) ホスピス緩和ケアに従事する者に対するセミナー・講座・研修会等の開催事業，3) ホスピス緩和ケアの質の確保と向上に関する調査・研究事業，4) ホスピス緩和ケアに関する広報活動，情報提供，情報交換事業，5) 内外の関連団体との連絡，連携に関する事業などを行っている。

2008年度の活動の一つとして，世界のホスピス緩和ケア関係団体が参加する「世界ホスピス緩和ケアデー」を最終日とする1週間(2008.10.5 - 11)を「ホスピス緩和ケア週間」とする啓発普及活動への取り組みがある。2006年度より活動しているが，本年度は，厚生労働省の委託事業である「緩和ケア普及啓発活動“オレンジバレーンプロジェクト”」との協力事業としても位置づけ，会員施設以外のがん診療連携拠点病院や緩和医療学会員へも呼びかけた。日本各地で，講演会・施設見学会・展示会・コンサートなどさまざまな関連イベントが開催され，事務局では全国の活動をとりとまとめ，イギリスの本部に日本の活動を報告し，世界の人々と情報交換を行った。

また，緩和ケアの提供の間が広がっている一方，ケアの質の向上が伴っていないという問題もあり，ケアの質の確保と向上は重要課題となっている。2007年度は，ホスピス緩和ケア病棟および在宅療養支援診療所における緩和ケアの実態調査を行い，今後の活動の方向性を検討することとなり，事務局業務はますます広がっている。

報告/松島たつ子(ピースハウスホスピス教育研究所所長)

訪問看護ステーション千代田

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

2008年度は常勤看護師4名、非常勤看護師2名、うち2名がケアマネジャーを兼務、事務1名（平成19年4月採用）のメンバーで始まったが、途中3名の看護師の退職と事務職員の退職が重なり、人員確保で業務が大きく左右された1年であった。まずこの人員確保とその影響について記す。

I 看護師人員とその影響

年度当初から4月に事務職員、6月に看護師1名の退職がそれぞれ予定されていたので補充のための募集は前年度より行っていた。事務は6月に採用となったが看護師の応募は全くなく、さらに事務不在の間看護師が事務業務も兼務せざるを得ず、業務効率が悪く、新規利用者獲得にも影響が出る状態であった。

6月に1名の看護師退職後は、残った人員で訪問看護スケジュールを支えてきたが、健康上の問題を理由に9月に1名、その後結婚を理由に12月に1名の看護師退職の申し出が続いた。看護師募集はさまざまな方法で継続して行ったが、10月まで応募が全くなかった。それでも現在の利用者に看護師としての責任を果たすべく、利用者各々のケアマネジャーに相談し、それぞれの在宅療養計画、および看護計画を見直し、ヘルパーに依頼できることは依頼をする、また訪問する上での移動時間まで考慮して、残った人員で訪問看護が提供できるように努力を行った。しかしそれでも私たちが責任を持って看護を提供できないケース（当ステーションから遠方であること、かつ1週間に複数回の訪問が必要であり、そのため訪問効率が悪いこと、緊急時に対応が困難となること等が理由）は療養者の近所のステーションに訪問を依頼した。最後まで看取りを行いたかったケースであるが、人員の関係上やむを得ない方法であった。数名を他のステーションに依頼したかったが他のステーションも少ない看護師でやりくりをしているのは同様で、これ以上の引き継ぎ依頼は断念した。

訪問看護ステーションの看護師が不足しているのは当ステーションに限ったことではない。訪問看護協議会を通じ他のステーションと連携および情報交換を行っているが、どこも看護師不足に悩み、看護師の退職とともにやむなく利用者を他のステーションに引き継ぎ依頼、新

規の利用者を断るなどで、業務縮小を余儀なくされている。なかには退職が続くも看護師補充が困難で、設置人員2.5名を守ることができず閉鎖したステーションもある。

当ステーションも12月末で常勤看護師3名、うち2名がケアマネジャー兼務の上で看護師常勤換算すると1.8名となり設置人員を確保できない状態が予測できた。看護師応募の全くない状況で訪問看護ステーションと利用者を守るためにはまず人員確保を考えなければならず、そのためにケアマネジャー業務を一時休業することとした。ケアマネジャー業務を外すことにより常勤換算2.5名を確保できるからである。これを10月には正式に決定し、ケアマネジャーとして担当している方々とそのご家族に説明し、今後担当可能な居宅介護支援事業所を探し、12月までに引き継ぎを行った。

こうして看護師設置人員は確保し、少ない人員で看護の質を維持しながら訪問看護を提供することに努力を続けた。そのような中、11月に1名常勤看護師、年明けの1月に非常勤看護師を採用することができ、常勤看護師換算4.0名となった。ここに至るまで新規利用者獲得など積極的な営業は困難であったが、不思議なことに看護師を確保できた時点で新規依頼申し込みがあった。しかしながら年間を通じ利用者数、訪問件数が減少したのは看護師人員の大きな影響であり、以下に記される数値に表れている。

看護師もさまざまな事情で離職していく。なかには厳しい勤務のために休憩をとる目的や次のステップアップのために離職するケースもある。看護師が働き続けたいと思うあらゆる意味で魅力ある職場としていくのは今後も引き続き課題となることである。

厚生労働省は在宅療養を推進しており、在宅医療制度の中でも医師への診療報酬は手厚いが、訪問看護についてはまだ不十分といえる。特に看護師がいなければ在宅療養と看取りは不可能である。在宅療養を推進させるためにも、看護師への報酬と人員が確保されることを強く望んでいる。

2 訪問看護業務

1) 利用者の利用保険別推移

利用者の保険の内訳は表1、表2に示す通りであった。例年通り介護保険利用が主であり、医療保険の利用者は全体の1割から2割であった。医療保険の内訳は神経難病とがん末期の利用者である。難病の利用者は一昨年度後半から増え、引き続き訪問看護を利用しながら在宅療養を継続していることが現れている。今年度は年間を通してさらに利用者は減少した。今までの利用者がさらなる高齢化と天寿を全うされるなどで訪問看護終了者が続いたことと、先に述べた通り看護師の人員による影響が大きい。難病による医療保険利用者のうち1名に午前、午後と1日2回の訪問看護を提供していたが、看護師不足により1日1回の訪問看護提供となったことも訪問件数が減少した理由である。

高齢化による心身機能の低下をできる限り予防して健康で自立した生活を進めていくための予防介護制度の利用者は延べ2名であった。まだまだ少ないが今後も予防の観点から訪問看護を利用してもらうために、予防介護の中心拠点である地域包括支援センター（前在宅介護支援センター）とも今まで以上に連携をとっている。具体的な方法としては要介護状態であった利用者が状態改善し要支援に認定されるケースは、引き続き訪問看護の利用を計画してもらうように働きかけている。この逆の場合もある。要支援の方が要介護に認定されるケースもあり、同様に訪問看護の継続利用を働きかけている。

他に地域包括支援センターからは医療アセスメントをはじめとした相談を受けることも増えた。同様に他の居

宅介護支援事業所のケアマネジャーから相談を受けることもあった。

ケアプランに必要とされるサービス担当者会議を必ず行うことがケアマネジャーに義務づけられているが、これによりサービス担当者会議への出席依頼が増え会議に時間を割く回数が倍増したが、よりよいサービスへと意見が反映されることも多くなった。しかしながらこの担当者会議を義務化されているがために必ずしも必要ではない場合にも担当者会議が開催されることも多い。少ない人員でスケジュールをやりくりする訪問看護ステーションにとっては担当者会議出席も負担となる面もある。

千代田区は高齢化が進んではいるものの住民が少ないという現状があり、新規依頼はあっても介護度の重い場合やがん末期の場合など亡くなるケースも多いので、安定した利用者数を確保することは困難な一面もある。今後は人員が安定したら千代田区ばかりでなく、隣接する港区においても利用者を増やすことを検討していきたい。

介護保険制度が改定されるにつれ制度の中で提供できる訪問看護にも制限が出てくる。それでも利用者からの要望に応えるべく自費の訪問看護を設定している。その件数を表1に示した。看護内容はたとえば訪問看護は最長1時間30分までの利用が認められているが、訪問中に状態変化があり診察を必要とし、そのために医師に連絡したり、時には救急車で病院搬送の手配を必要とすることが起こる。この場合1時間30分では時間が足りず延長になるが、この延長分は保険で認められなくなり自費訪問となった。他には利用可能な限度額を越えてしまっている訪問看護を希望する利用者がいて、保険外訪問が増えたこともある。

表1 訪問看護件数の推移

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計(件)
医療保険(件)	63	57	73	49	104	48	68	57	40	63	63	88	633
介護保険(件)	196	195	218	249	194	186	188	156	165	156	160	190	2,253
自費訪問(件)	0	3	1	6	7	6	1	2	2	2	1	0	31
総訪問件数	278	267	304	304	251	251	247	188	205	189	212	220	2,917

表2 利用者人数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
医療保険(人)	7	9	8	6	6	4	6	4	5	5	7	4
介護保険(人)	51	49	53	53	50	49	44	42	41	42	41	42
利用者総数(人)	58	58	61	59	56	53	50	46	46	47	48	46

今年度の利用者数は628名であった。

表3 訪問時間（介護保険）内訳

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
訪問回数（30分未満）	40	38	60	59	52	45	49	37	47	46	42	49
（30分～1時間）	132	129	131	166	128	122	111	89	93	84	95	109
（1時間以上）	27	28	27	24	16	21	27	24	25	25	23	30
緊急時訪問看護加算	28	28	31	32	29	28	25	25	25	24	22	23
特別管理加算	8	9	9	9	7	7	8	8	8	7	7	9

表4 2008年度訪問看護利用者の内訳

介護度	人
自立	1
要支援1	1
要支援2	2
要介護1	10
2	6
3	9
4	3
5	15

表5 2008年度の介護保険利用者の介護度

年齢	人
30～40	0
40～49	0
50～59	1
60～69	3
70～79	12
80～89	21
90～99	25
100歳以上	2

利用者は後期高齢者が多い。

表6 主な疾患

疾患名	人
循環器系	26
脳血管疾患	12
骨・筋系疾患	8
呼吸器疾患	7
消化器疾患	3
内分泌・代謝疾患	10
認知症	27
難病	5
悪性新生物	6
腎・泌尿器疾患	7
精神科疾患（老人性うつ他）	3
その他	5

2) 介護保険利用者の利用時間内訳と年齢別・疾患別内訳

利用者が減少したのでそれぞれの訪問回数も減少している。訪問看護の利用者は介護度が重く、ケアをはじめ医療処置等で訪問に少なくとも1時間は要することが多い。30分の訪問看護利用者は比較的介護度が低いケースが多く、体調管理をはじめとする健康相談等である。

緊急時訪問看護加算は24時間看護師と連絡可能なシステムであり介護保険の中では任意契約になる。この利用者は介護保険利用者のうち半分の契約である。安心のために契約する方もあれば、医療ニーズで必然的に契約している方もいる。どちらにせよ24時間看護師と連絡可能なシステムは安心して在宅療養すること必要な支援といえる。しかしこれも一時期に比べ契約者は減少している。その理由は先にも述べた出費を抑えることが関連している。

実際の緊急訪問は1カ月に0～5回程度であり、日々の看護がこの回数に影響する。つまり予測してケアをする、事前にケア方法を説明する等の配慮が安心感につながり緊急訪問回数を少なくさせる。実際には電話相談だけで安心していただくことも多い。

特別管理加算とは医療処置や管理を必要とする場合で、もっとも多いのは胃ろう管理である。他にカテーテル類や在宅酸素管理などがあげられる。これは任意契約でなく、処置を行っている場合には必然的な契約となる。利

表7 看護の内容

病状・身体状況の観察	全利用者
生活・介護相談	ほぼ全利用者
保清・排泄	19
リハビリ	13
医療処置・指導等 （排泄コントロール・薬の管理も含む）	14
ターミナルケア	6

（重複あり）

用者の1～2割が医療管理を受けながら在宅療養をしている。

訪問看護の利用者は介護度の重い方が多く、また後期高齢者が多い。高齢者の特徴として複数の疾患をもって療養していることが、表5、表6、表7からわかる。

3) 看護内容と連携

他に傾聴や家族支援といった形には現れない必要不可欠なケアも多く、何らかの形でほぼ全利用者に提供している。利用者本人ばかりでなく、家族への健康状態確認等も行っている。訪問看護師による医療処置や看護技術の提供は業務のごく一部であり、看護業務で多くの時間を費やすのは在宅療養を軌道に乗せるためのマネジメントである。

病院から在宅へ移行してくる場合、疾患の説明と本人家族の受け止め方、在宅療養することへの考えや不安や希望、医療処置の実際等を退院前から病棟看護師と連携するのは在宅療養支援として欠かせないことである。病院側も退院支援の窓口を設置しそこに看護師を配置するようになり以前よりも連携は取りやすくなった。ただこの連携のために病院へ行くことについては医療保険では通常1回、難病や重症管理加算のつく利用者（例えばがん末期）の場合は2回、退院時共同加算として加算がつくようになっているが、介護保険では全く算定することができない。これはステーションにとって経営的に厳しい。しかしながらこの連携の必要性を理解しているからこそ持ち出しでも看護師を病院に派遣している。実際派遣するためにすでに決定しているスケジュールを調整し看護師を派遣することは容易なことではない。しかも病院へ行きカンファレンスに参加するだけで2時間は要する。2時間あれば通常2件の訪問看護を行うことができ、かつそれは約2万円の収入になる。退院してくる療養者の多くは介護保険の利用なので介護保険においては次回の改正を待たなければならない。在宅療養を支える訪問看護師としてこの点の制度改革を強く希望したいところである。

その他訪問看護におけるリハビリの実施については区の高齢介護課介護予防係に理学療法士である相談員が在席しているので、多くのケースで相談しアドバイスをいただいている。また難病ケースは保健師や行政の支援担当窓口と連携を取って支援している。

4) 紹介先

新規ケースの紹介先はケアマネジャーが主である。医療相談室からの直接の依頼は、医療依存度の高いがんのターミナルケースが多い。1月に都内の大学病院から末期の方への訪問看護依頼があったが、緊急を要するケー

表8 2008年度新規利用者の紹介先（10名）

紹介者	人
ケアマネジャー	7
医療機関（病院相談室他）	2
利用者・家族	0
その他（支援センター他）	1

表9 ケアプラン作成数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
ケアプラン	3	3	3	3	3	3	2	1	0	0	0	0

スと判断し当日に訪問したこともあった。

このよう場合あわせてケアマネジャーの依頼もあるが、年度後半からは看護師業務に専念したために居宅介護支援事業所を紹介することとした。

現在多くのケアマネジャーの多くが福祉職を基礎資格としている。福祉職出身のケアマネジャーは医療アセスメントには慣れていないが、必ずしも看護師に医療面の相談をするわけではない。しかしこの点をケアマネジャーとうまく連携しないとケアに影響するので、今まで良好な連携をとれたケアマネジャーを紹介し、円滑に療養を支援できるようにしている。

5) 集団指導

昨年度は実施指導を受けたが、2008年度は東京都福祉局による集団指導のみであった。

ステーションの運営規定の確認

看護師の人員配置と勤務実態

契約書の確認

訪問看護業務の確認

訪問看護指示書の有無、訪問看護計画書・訪問看護報告書の有無と医師・利用者への提出とその確認

請求業務と請求内容確認

利用者からの負担金徴収方法の確認

事務所内の配置と使用物品確認

以上の点について半日を要して東京都職員から説明を受けたのだが、昨年度の実施指導の中で予防給付に関する業務に携わっていることを運営規定に加えること、緊急訪問看護加算について利用者の同意を得ているが書面でも同意を残すことを指導された。昨年度多くのステーションがこの項目で指導を受けたとの結果報告がなされた。その他は説明通りに運営できていることが集団指導で確認できた。

6) 居宅介護支援事業所としての業務

先記の通り2名の訪問看護師が兼務でケアマネジャーとして利用者のケアプランを作成してきたが、看護師の退職が続き、訪問看護ステーション設置に必要な2.5名を確保するために12月末で居宅介護支援事業所を一時休業した。医療職をベースとするケアマネジャーが減少している中、残念ではあるがこのような選択となった。居

在宅介護支援事業は法令で定められ業務や作成しなければならぬ書類が増え、サービス利用の規制も厳しくなり、その中で本人の望む自立へのケアプラン作成には困難も生じ、さらに多くの時間を要するようになっている。このような中、看護師と兼務することは困難となり、多くの訪問看護ステーションが居宅介護支援事業所を兼ねる場合、専任のケアマネジャーを配置する方向に変化してきている。当ステーションも業務再開に向けてはさまざまな点から考える必要があると思われる。

7) その他

訪問看護ステーション協議会に所属

看護サービスの質の向上や情報収集、情報交換、他の訪問看護ステーションとの交流に努めている。

カンファレンスの実施

毎月1回、日野原理事長指導のもとでケアカンファレンス(事例検討)を行っている。この内容は2002年7月から日本看護協会出版会発行の『コミュニティケア』誌の取材を受け隔月掲載されている。カンファレンスには医師、看護師、ケアマネジャーなど、在宅に関わる方々の出席があり、意見交換を行うとともに、訪問に生かせるアドバイスをいただいている。

在宅療養支援診療所医師とのカンファレンス

ステーション千代田の多くの利用者の主治医であり在宅支援診療所コンフォガーデンクリニック木下医師と2カ月に1回治療方針・看護方針を確認し、情報交換に努めている。

中間サマリーによる看護の振り返り

年度末にサマリーを記録することにより各々が看護の振り返りと見直しを行っている。この記録を残すことで、急な入院時に病院へのサマリーを早急に準備することもでき大変役立っている。

勉強会

毎月1回業務終了後に勉強会を行っている。スタッフが交代で担当しテーマは看護に限定せず実施している。

千代田区内ステーション連絡会

区内に3カ所のステーションがあり、連携と情報交換を行い、共同の勉強会も行っている。年に3、4回実施している。

訪問看護協議会で実施される訪問看護体験実習を受け入れている。これは病院に勤務する看護師やソーシャルワーカーに在宅の現場を体験してもらい、今後の病院との連携に役立てようというねらいのものである。

報告 / 中村 洋子 (訪問看護ステーション千代田所長)

訪問看護ステーション中井

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000 - 1 (ピースハウスホスピス病院内)

開設10年目を迎えた訪問看護ステーション中井は管理者が変更し、常勤看護師5名(うちピースハウスとの兼務者含む)、非常勤看護師2名、うち2名が居宅介護支援専門員を兼務、そして事務員1名のメンバーで業務に取り組んだ。

以下に2008年度の統計および活動について報告する。

用が6～7割、医療保険が3～4割であった。当財団の訪問看護ステーション千代田と比べると医療保険の利用者の割合が高いことがわかる。利用者数は昨年に比べると減少したが、訪問看護回数は横ばいであったことから、医療依存度やケア頻度の高い利用者が多くなり、一人当たりの訪問看護回数が増えたことがうかがえる。以前は祝日や年末年始の訪問はそれほど多くなかったが、最近では1日あたり2～3件、多い日は10件近くある日もあり、数名が休日出勤をして訪問に当たることがよくあった。

表3から見ても介護度の高い利用者が多いので、ある

I 訪問看護利用者の状況と利用状況

利用者の保険の内訳は表1、表2の通り、介護保険利

表1 訪問看護件数の推移

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計(件)
医療保険	67	75	98	96	79	58	57	70	66	79	75	60	880
介護保険	192	176	188	198	199	199	205	174	201	190	196	209	2327
研究事業 ^{注1}	7	7	9	8	8	9	8	6	8	7	7	9	93
自費訪問	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総訪問件数	266	258	295	303	286	266	270	250	275	276	278	278	3301

注1：在宅人工呼吸器使用特定疾患患者訪問看護事業の略

表2 利用者人数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計(人)
医療保険	14	13	15	14	13	11	11	13	11	14	13	11	153 (27)
(24時間対応体制加算)	14	13	15	14	13	11	11	13	11	14	12	11	152
(重症者管理加算)	6	5	6	6	7	5	4	6	6	6	4	3	64
介護保険	37	37	36	39	37	38	38	36	37	36	38	37	446 (48)
(緊急時訪問看護加算)	32	31	30	32	30	32	32	30	31	29	31	30	370
(特別管理加算)	5	6	6	7	6	7	7	7	8	7	9	9	84
研究事業	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12
利用者実数 (年間実数)	49	48	49	52	49	50	49	49	48	50	49	49	591 (75)

表3 利用者の介護度内訳

介護度	人数
要支援 1	2
2	2
要介護 1	3
2	12
3	15
4	19
5	16
非該当・自立	6

表4 利用者の年齢分布

年齢	人数
30～39	2
40～49	2
50～59	3
60～69	15
70～79	23
80～89	19
90～99	11

表5 利用者の住所分布

住所	人数
中井町	39
二宮町	17
秦野市	6
平塚市	4
小田原市	7
その他	2

表6 主な疾患

疾患分類	人	疾患分類	人
脳・神経疾患	20	呼吸器疾患	5
悪性新生物	21	内分泌・代謝疾患	0
循環器疾患	1	腎・泌尿器疾患	3
運動器疾患（脊椎損傷等）	8	精神疾患	0
難病	5	認知症	12

表7 訪問看護内容（重複あり）

内容	人
病状の観察	75
リハビリケア	45
服薬指導	45
清潔・排泄ケア	46
医療処置	24
家族支援	75

表8 業務時間外の電話相談件数と緊急訪問件数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
電話相談（件）	8	9	7	16	7	2	1	13	7	1	5	7	83
緊急訪問（件）	2	5	4	10	2	0	1	4	1	0	3	5	37

表9 紹介者

紹介者	人
他事業所ケアマネージャー	26
地域包括支援センター、在宅支援センター	8
医療機関（ソーシャルワーカー、開業医等）	11
ピースハウス	5
行政（福祉課、保健師等）	9
本人・家族から直接の申し込み	13
その他	3

部分で致し方ない部分であり、「自宅での介護は当たり前」という地方ならではの風習も関係するのかもしれない。介護度では2006年度から開始された予防訪問看護だが、利用者は少ないものの、利用によりADLの拡大につながった実績が示されつつあるので、それをもとに予防という観点から利用者や地域包括支援センターへの働きかけをしていきたい。

現在人工呼吸器をつけている利用者に訪問看護を行っているが、この利用者が2つの訪問看護事業所を利用しており、他方のステーションが入ると、緊急訪問体制をとっている当ステーションが緊急で呼ばれた場合、実費負担となってしまう。そのため状態が悪くても呼ばないことでさらに状態悪化という悪循環が生まれたため、神奈川県から承認を受け、在宅人工呼吸器使用特定疾患患者訪問看護事業の導入に至った。現在は利用者1名だけであるが、今後対象者があれば導入検討をしていきたい。

また利用者年齢は平均年齢75.7歳で、当ステーションにおいて利用者年齢は大きく変化はしておらず、悪性新生物の利用者に限ってみても71.2歳と大きな差は見られなかった。

主な疾患は表6に示したが、脳神経疾患と悪性新生物が二分しているのが当ステーションの大きな特徴である。これはピースハウスとの連携施設ということとその実績

の結果、ピースハウスが主治医でなくてもがんの末期ならそちらにと依頼してくるケースが増えている。10年の積み重ねが地域の事業所からの信頼につながっているので、今後も質を落とすことなく、看護の提供を行ってきたい。また今年度（2009年度）は介護保険で質の高いケアを提供している事業所にサービス提供体制強化加算がつくようになるので、それを申請し、恥じることのないようなケアの提供を目指していきたい。

主な看護内容については表7に示したが、満遍なくケアが行われており、病状の観察や家族支援はもちろんのこと、他にも本人・家族の精神的支援や医師やケアマネとの連絡調整などにも大きく時間を割いている。訪問看護の利用が始まる時、表9の通りケアマネージャーから主に第一報がくるが、それだけではなく病院の退院支援窓口のスタッフや医師、そして本人・家族と綿密な調整のもと開始される。調整がないまま開始されると、開始後にばたつき、ご本人やご家族が大変な思いをされてしまう。そのためそこにかかなりの時間を割いてはいるものの、なかなかその部分が制度として反映されてこないの、制度改正に期待したい。また私たち看護師は予防的視点を持ちながらケアを提供することが大切であり、その部分にも時間を割いている。本人やご家族が困った際、24時間相談ができ、場合によっては訪問をする体制をとっている（24時間対応体制加算もしくは緊急時訪問看護加算）が、その際看護師がどれだけその予防的なケアが行えているかで、電話相談だけですむのか、もしくは夜間でも段取り通りに連携することができるかなど大きく変わってくる。当ステーションは医療保険でほぼ100%、介護保険でも80%以上の方が24時間対応体制加算もしくは緊急時訪問看護加算を契約されているが（表2）、利用者の状態にもよるが緊急訪問が月3回程度に納まっている（表8）のは予防的視点のもと看護が行えている結果といえる。

2 がん末期の利用者について

利用者の保険の内訳は表1、表2の通りだが、医療保険の3～4割のうち、がん末期の利用者は全体の2割を占めた。医療保険だけでいうと半数以上はがん末期の利用者だったことになる。これはおそらくかなり高い割合と予想できる。上にも記載したが、ピースハウスの利用者だけでなく、他病院にかかりながら、当ステーションでケアを受けたいという利用者や、これまでの実績でケアマネージャー等が当ステーションを紹介して下さるケースが増えた結果である。

今年度がん末期の利用者の利用は21名だったが、入院して亡くなったのは13名、在宅で亡くなったのは4名であった(表10)。また今年度はピースハウスが主治医として在宅で看取るケースはなかった。来年度はピーウハウスの医師の体制の問題もあり、さらに少なくなるのが予想されるが、できる限りの支援をしていきたいと考える。

3 居宅介護支援

当ステーションでは訪問看護師が兼務でケアマネージャーとしてケアプランの立案を行っている。現在は業務の効

表10 悪性新生物の利用者の転帰

転 帰		人数
病院で死亡	ピースハウス	8
	一般病院	5
在宅死	主治医がピースハウス	0
	主治医がピースハウス以外	4
存命		4
合計		21

表11 平均請求回数

	回(年12回)/年
全体(平均年齢75.1歳)	6.1
悪性新生物以外の利用者(77.9歳)	8.5
悪性新生物の利用者(70.9歳)	2.3

表12 ケアプラン作成数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計(件)
請求人数	17	16	15	17	16	13	12	16	15	15	18	18	188 (33名)

率を考慮し、訪問看護の利用者に限って行っている現状である。居宅介護支援専門員の仕事は月1回自宅を訪問し、心身の状況を尋ねたり、サービスの実施状況を確認するなどモニタリングを行い、サービス事業所との連絡調整をしながらケアプランを作成しているが、この業務については一昨年のコムスン事件があったため、かなり厳しく法令順守が謳われ、業務負担がかなり多くなった。

しかしながら当ステーションでは、訪問看護と同様、がん末期の利用者が多く、「訪問看護と一緒にケアプランも」という前期高齢者や、第2号被保険者の比較的年齢が若くそれまで介護保険サービスを利用したことがない方の利用者が多いので、かなりスピーディーなサービスの調整を行うものの、すぐに終了となってしまいう状況であった。

また要支援に対するケアプランも市町村からの委託を受け行っており、今後もどのケースにも対応できるよう、ケアサービスの向上を目指していきたい。

今後当ステーションの特徴を生かしつつも、利用者のQOLを考慮した支援をしていきたい。

4 その他

- ・今年度よりピースハウスの看護部の配属となり、委員会活動にも参加した。倫理委員会には月1回参加し、倫理について考える機会となり、今年度ステーションの倫理綱領を作成した。
- ・地域緩和ケア研究会では事例発表だけでなく、地域の緩和ケアネットワーク作りにも参加している。研究会終了後に発表ケース以外でのクリニカルカンファレンスを行い、ピースハウス以外の医師・スタッフとの振り返りが行えた。
- ・訪問看護、居宅介護支援ともに、積極的に研修に参加し、伝達講習を行った。
- ・日本看護協会、神奈川県看護協会等からの研修の受け入れを行った。

学会参加活動

学会発表

- ・朝比奈崇介：患者状態適応型パス統合システム (PCAPS) による糖尿病地域連携パスの作成 - 連携ノートの作成 - , 第51回 日本糖尿病学会年次学術集会, 2008.5.22~24, 東京都
- ・朝比奈崇介：The efficacy of social support to body weight reduction program of employees in a company, 23RD BIENNIAL CONFERENCE OF THE IHEPA, 2008.10.30~11.1, 中国北京

講演

- ・福井みどり：SP (模擬患者) の活動の実際とその育成, 石川県立看護大学, 2008.7.25, かほく市

学会・研究会・セミナー参加

- ・甲斐なる美・三井英己：第49回日本人間ドック学会, 2008.9.10~12, 徳島市
 - ・福井みどり：日本カウンセリング学会 第41回大会, 2008.11.23~24, つくば市
 - ・朝比奈崇介・三井英己・関口将司：日本総合健診医学会 第37回大会, 2009.1.23~24, 静岡市
 - ・朝比奈崇介：日本糖尿学会 第43回糖尿病の進歩, 2009.2.20~22, 松本市
 - ・相澤寛子：日本消化器がん検診学会 第41回放射線部会総会, 2009.2.21, 宇都宮市
 - ・落合秀宣：ACC Annual Meeting Orlando2009, 2009.3.29~4.1, 米国オーランド
- (なお、ピースハウス病院およびピースハウスホスピス教育研究所の学会参加活動は「ピースハウスホスピス教育研究所」の「3. 学会等参加活動」の項に掲載した。)

会 員

1 健康教育サービスセンター会員

健康教育サービスセンターの会員構成および地域分布を表1および図1, 2に示した。

「新老人の会」サポーター会員枠を設け65歳以下の会員増強に努めていること、長年、健康教育サービスセンターの会員を継続して下さっていた方が年齢に伴い「新老人の会」会員へ変更する傾向にあること、さらに2009年1月より、健康教育サービスセンターの会員に対して、継続月に「新老人の会」会員へ移行ができる旨の案内を始めたことなどにより会員数は減少している。

なお、「新老人の会」会員には、健康教育サービスセンターの会員特典が適用されており、なおかつ毎月、機関誌『教育医療』と併せて「新老人の会」会報が送付されることやサークル活動にも参加できるなどのプラス材料が加わっている。

表1 会員職種別内訳

会 員	男	女	合 計
一 般	63	490	553
専門職	医 師	0	6
	看護師	1	101
	その他	2	34
学 生	0	1	1
男女別合計	72	626	698

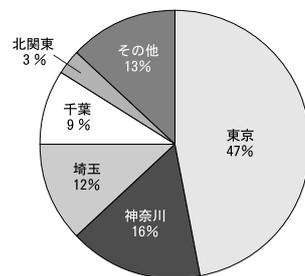
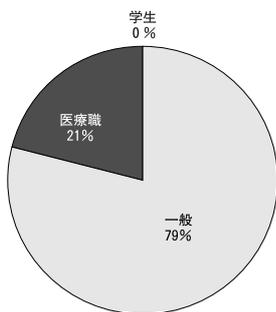


図1 健康教育サービスセンター会員構成

図2 健康教育サービスセンター会員地域別分布

また、2008年度の新規入会会員は52名で、こちらも昨年度60名、一昨年度の59名に比べて減少傾向にある。

2 健康教育サービスセンター団体会員

団体A会員 (合計7団体)

- 中野市健康福祉部健康長寿課
- 聖路加看護大学
- 御茶の水歯科
- 入間市医師会立入間准看護学校
- 音楽療法研究所所長
- 成蹊学園健康支援センター
- 西東京市医師会訪問看護ステーション

団体B会員 (合計7団体)

- フランシスコ ヴィラ
- 医療法人社団カレスサポロ
- 計機健康保険組合
- (社)全国労働衛生団体連合会
- 東京地下鉄株式会社人事部保健医療センター
- 株式会社 中山書店
- 株式会社 ポピンズコーポレーション

3 団体維持会員 (合計10団体) 2009年3月31日現在

- ティーベック(株)
- ドクター・フォーラム本部
- (財)野村生涯教育センター
- 日本精密測器(株)
- エーザイ(株) 医薬部
- (株)東機貿
- 東芝メディカルシステムズ(株)東京支社
- (株)ブリカ
- 医療法人財団慈生会 野村病院
- (株)メディカル・ジャーナル社

4 個人維持会員 合計107名 (うち1名氏名未掲載希望)

印今年度入会者2名

2009年3月31日現在

秋 山 ちえ子 芦 野 宏 井 口 辰 子 石 井 倫 子 井 田 孝 子
 伊 東 五 郎 稲 岡 寛 井 上 清 和 岩 佐 瑛 子 岩 佐 倫 雄

植田イツ子	海老沢利春	緒方笑子	加藤朝子	兼松真澄
川合幹夫	川尻泰子	北川恵子	杵家智恵子	杵家完子
木下照嶽	木村一朗	久保田光吉	久保田美代	黒沢マツ江
郷内繁	郷内延子	国領久江	小寺富美代	小西正子
小林薫	斉藤和子	齋藤正彦	佐伯正博	櫻田イソ子
作山京子	櫻井裕子	佐藤君代	沢田章男	笹井秀治
笹井淳子	塩原きよ	芝功子	芝良計	清水護
神野たづ子	末信幸	菅野日龍	末沢紀子	鈴木とき子
鈴木康子	鈴木利助	住田啓子	須磨礼子	高岡邦子
高野實代	館若菜	田中一成	辻恵美	筒井千枝子
辻貞子	堤きよみ	寺岡美由喜	寺田朝子	寺田平太郎
寺田保信	外池いづみ	外池めぐみ	外池百合子	時本信明
中平健吉	中村福子	中村真理	西尾寅夫	野村侃司
橋本美也	馬場敏雄	濱田俊子	原恵子	広嶋信子
藤野貞子	藤崎和子	布戸春介	布戸哲太	布戸春
古澤たけ	福田容子	星野喜世子	松下眞美	光廣知子
三富正義	宮川菊枝	宮崎明子	宮原和子	村山美知子
村尾麟一	村尾洋	村田正和	森本俊子	山田三栄
山田礼子	山本幸子	山本和	横山澄子	吉田澄枝
若林健				

5 2008年度「維持会員の集い」から

2008年5月12日(月)、個人維持会員の集いが開催された。会員とその家族や関係者33名、財団から事務局長、所長はじめスタッフ14名が参加し、47名の集いとなった。

日野原理事長のテーマは「いま伝えたい大切なこと」であった。

講演の要旨は下記の通りである。

維持会員へのサービスとして紹介が必要な場合には聖路加国際病院へ早期に適切な紹介を行っている。

一般に、医療機関の診療では一人の医師が診療する患者が多く、病歴を十分に聞いて診療を行うことは困難な状態にある。そのために、検査や薬の処方が適切に行われていないことが多く、無駄な医療費を費やしてしまっているのが現状である。

当クリニックの外来においては、患者を診察する前にナースによる問診でよく病歴を聞き取り、さらに診察時に病歴を参考に診断内容を深めていくことで患者の病態を把握している。患者の問題をよく聞き取ることを行わないと、適切な診断ができない。病歴を聞き取ることによって病気の大部分は解決できると考えている。

当クリニックでは、聖路加国際病院への紹介に当たっては、患者の問題にきちんとフォーカスを当てた上で適切な医師に紹介を行っている。維持会員の皆様にはこのシステムを十分に利用していただき、健康上問題が生じた場合には躊躇せずに電話で相談をしてほしい。そしてまた、当クリニックのやり方を家族や知人の方たちに紹

介していただきたい。

また、2000年9月に発足させた「新老人の会」は、75歳以上を「シニア会員」、60歳から74歳を「ジュニア会員」、それ以下で20歳以上を「サポート会員」とし、どの年齢の方でも入会可能として会員増員を図っている。

「新老人の会」の本部では30種以上のサークル活動が行われている。その中のひとつに「俳句療法」がある。俳句療法のリーダーである木下星城氏は、序列をつける俳句ではなく、生活に密着した俳句を勧め、それを療法に結びつけるということで、「俳句療法学会」を2008年11月に結成された。

急激な高齢化を迎えた日本の現状について、65歳の定年後の生活を年金で支えていくことは困難を極めている。定年後の生き方は次世代に向けて何を伝えていくかを考えていったほうがよい。また、短い睡眠でも起床時に爽やかさを感じられる生き方をしてほしい。

人間は誰でも欠陥がある。しかし、欠陥があっても自分の気持ちか健やかであれば爽やかな人生を送ることができる。糖尿病や高血圧など病気をもっている人もよくよ悩んでいないで、人間として健やかな人生を送ることを考えて人生を歩んでほしい。

自著『いま伝えたい大切なこと』(NHK出版刊)から、皆さんにお伝えしたいことは、命をどう考えていいか、平和とは、時間とはそれぞれ何かということを考えていることであり、これはつまり使える時間が命であるとい

うことを伝えたい。各自が持っている時間をどのように使っていくかが、命である。特に65歳以上になると自由な時間を持つことができる。その時に自分の人生を集約していくような時間の使い方をすることが若さにつながり、各自の命となる。さらに10歳の子どもに向けて命の大切さを伝えた『十歳のきみへ - 九十五歳のわたしから』(富山房インターナショナル刊)もぜひ手にとっていただきたい。それは国民、他国民の命の大切さ、そして、「救す」ことの大切さを伝えたものである。「あなたが変われば、世界が変わる」「健康とは健康感があること」なのである。

つづいて保健管理部の甲斐なる美看護師より、年に一回の「人間ドック」受診のお勧め、特にきめ細かなナーサスの問診と検査に現れない病気の発見のために、熟練した医師が個別に対応していること、また三井英巳渉部長より、ドックの個人受診者には1～4月上旬まで割引のサービスがあることが紹介された。

6 「新老人の会」会員の動向 (図3, 4)

2008年度は、会員の倍増とサポート会員(59歳以下)を増やすことを目標に、各支部が会員増強のための目標数を設定し、さまざまな戦略をもって実行してきた。特

に日野原会長の講演がある全国の支部フォーラムでは、新入会員の加入に力を入れ、入会コーナーを広くとり、目立つところに設置するなど工夫した。また11月からは、フォーラム会場で新たに入会した方に、日野原会長直筆の言葉を印刷したカレンダーをプレゼントすることも効果を上げた。その成果は数字となって現れ、本年はフォーラムを重ねるごとに新入会員の記録が達成され、会員数も昨年度末の6,038名から8,424名へと2,386名の増員となり、サポート会員の割合も7%から13%へと増加した。

目標の倍増へは大きな課題を残したが、今後もいかに「新入会会員」を増やすかが戦略の中心となる手応えを得た。

地方支部の設立

2008年度は4月に山陰支部から独立し23番目の支部として発足した山口支部を皮切りに、5月に東北支部から独立した北東北(岩手, 秋田, 青森)支部, 7月に群馬支部, 9月に石川支部, そして2009年1月には27番目の支部として沖縄支部が発足した。支部の活性化のためには、さらに地域性や交通の便などを配慮したきめ細かな交流や親睦が望まれており、そのための各支部の方策と、他方で各支部間のダイナミックな交流をいかに画策していくかが課題となっている。

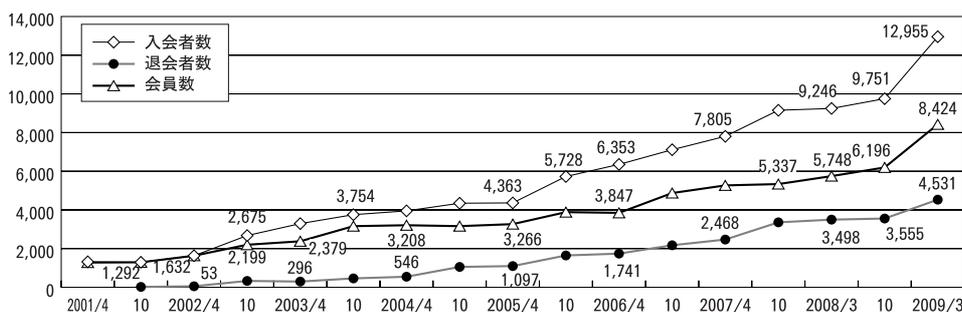


図3 会員数の変動 (2009年3月末)

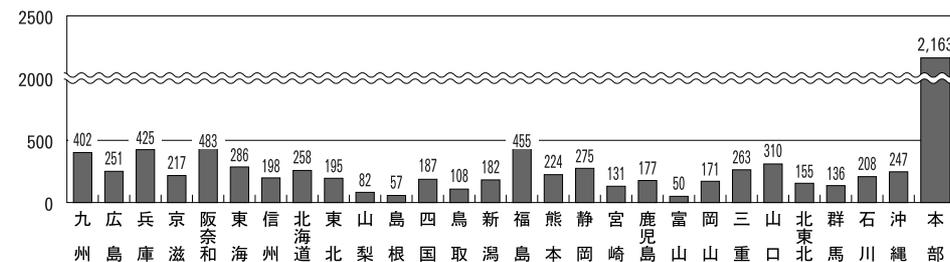
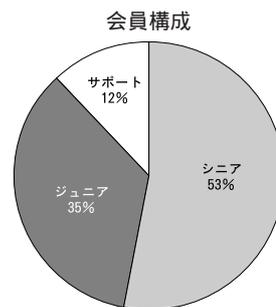


図4 支部別会員数 (2009年3月末)

役員

2009年3月31日現在（五十音順）

理事長	日野原 重 明	非常勤	聖路加国際病院理事長・名誉院長
常務理事	朝 子 芳 松	常 勤	当財団事務局長
理 事	朝比奈 崇 介	非常勤	朝比奈クリニック院長，ライフ・プランニング・クリニック前所長
同	石清水 由紀子	常 勤	当財団健康教育サービスセンター「新老人の会」事務局長
同	岡 安 大 仁	非常勤	元日本大学医学部内科教授，ピースハウス病院最高顧問
同	紀伊國 献 三	非常勤	財団法人笹川記念保健協力財団理事長
同	久 代 登志男	非常勤	日本大学医学部教授
同	児 島 五 郎	非常勤	聖テレジア病院名誉院長
同	新 福 尚 武	非常勤	精神医学総合研究所所長
同	道 場 信 孝	非常勤	当財団研究教育部最高顧問
同	土 肥 豊	常 勤	ライフ・プランニング・クリニック所長，埼玉医科大学名誉教授
同	西立野 研 二	常 勤	ピースハウス病院院長
同	平 野 真 澄	常 勤	当財団健康教育サービスセンター所長
同	松 井 昭	非常勤	前ピースハウス病院院長，聖路加国際病院胸部外科診療教育アドバイザー
同	松 島 たつ子	常 勤	ピースハウス病院ホスピス教育研究所所長
監 事	立 石 哲	非常勤	前当財団常務理事
同	寺 田 秀 夫	非常勤	聖路加国際病院内科顧問（血液学），昭和大学名誉教授
評 議 員	岩 ■ 榮	非常勤	特定非営利活動法人卒後臨床研修評価機構専務理事
同	植 村 研 一	非常勤	聖路加国際病院特別顧問，松戸市病院事業顧問
同	大 谷 藤 郎	非常勤	財団法人予防医学事業中央会理事長
同	小 川 秋 實	非常勤	伊那中央病院院長
同	行 天 良 雄	非常勤	医事評論家
同	小 山 勝 一	非常勤	高石内科胃腸科医院内科医，元東京慈恵会医科大学教授
同	高 久 史 麿	非常勤	自治医科大学学長
同	高 橋 美 智	非常勤	株式会社日本看護協会出版会取締役副社長
同	苔米地 行 三	非常勤	前ブルーシー・アンド・グリーンランド財団会長
同	長谷川 和 夫	非常勤	認知症介護研究・研修東京センター長
同	平 山 峻	非常勤	聖路加国際病院形成外科顧問，東京メモリアルクリニック名誉院長
同	本 多 虔 夫	非常勤	横浜舞岡病院内科医師，前横浜市立脳血管医療センター長
同	前 田 大 作	非常勤	ルーテル学院大学名誉教授・学術顧問
同	山 下 真	非常勤	山下クリニック院長，ライフ・プランニング・クリニック内科医
同	湯 浅 洋	非常勤	財団法人笹川記念保健協力財団顧問，前国際らい学会会長

財 団 報 告

2008年3月31日現在

I 評議員会・理事会報告

1. 第17回評議員会・第81回理事会

(平成20年6月2日開催)

第1号議案 平成19年度事業報告の件

「平成19年度事業報告書」に基づき、財団の各部門の活動報告について各部門長より報告がなされ承認された。

第2号議案 平成19年度収支決算の件

「平成19年度決算報告書」に基づき、以下の報告がなされ承認された。

(1) 収支の状況

全体の収支は、1,997万円の黒字であった。なお、クリニック改装積立金3,000万円およびピースハウス修繕積立金1,000万円の計4,000万円を加えると実質5,997万円の黒字であり、前年比5,312万円の好転。好決算の主因は、事業収入増加の一方で事業費および管理費を削減できたことに加え、寄附金収入が好調であったことによる。

LPクリニックの収支は、3,590万円の黒字。

ピースハウスの収支は、1,825万円の黒字。

訪問看護ステーション千代田の収支は、732万円の赤字。

訪問看護ステーション中井の収支は、116万円の赤字。

本部・健康教育サービスセンター・ホスピス教育研究所・「新老人の会」の収支は、2,570万円の赤字。

「新老人の会」のみの収支は、98万円の黒字。

19年度収支1,997万円の黒字に前期繰越収支差額5,764万円を加えた7,761万円を次期繰越収支差額とする。

(2) 平成19年度決算報告書

18年度より公表しているフロー式正味財産増減計算書では、当期経常増減額は1,579万円の減少、経常外増減額は7万円の減少で当期一般正味財産額は1,586万円の減少であり、期末の正味財産残高は9億8,444万円である。キャッシュフロー計算書では事業活動によるキャッシュフロー収支が8,841万円の黒字、投資活動によるキャッシュフロー収支が9,047万円の赤字である。

(3) 資産・負債の状況

平成20年3月31日現在の資産合計額は12億250万円、

負債合計額は2億1,806万円、差引正味財産額は9億8,444万円である。

平成20年3月末現在のリース残高は1億1万円で前年同月比233万円の増加である。

なお、監事より平成19年度決算において公認会計士により外部監査が実施されたことが報告された。

第3号議案 笹川医学医療研究財団に対する平成20年度助成金交付申請に係る件

「ホスピス緩和ケアナース養成研究」として600万円、「地域緩和ケアネットワークモデル事業」として1,000万円、総額1,600万円を申請したい旨の説明があり、承認された。

第4号議案 厚生労働省に対する平成20年度助成金交付申請に係る件

前年度に引き続き「平成20年度がん患者に対するリハビリテーションに関する研修事業委託費交付」（基準額15,123千円）を申請したい旨の説明があり、承認された。

第5号議案 平成20年度収支予算案修正の件

日本財団の助成金確定による修正と期初予算案作成後の諸要因の変化を織り込んだ修正がなされ、収入、支出ともに11億9,252万円で期初予算比4,089万円増加の修正案が提示され承認された。

第6号議案 規程の制定に関する件

個人情報を含めた広い意味での情報を管理する基本規程となる「情報管理規程」を制定したいとの説明があり、承認された。

第7号議案 役員選任の件（評議員会のみ）

任期満了となった理事11名と監事1名のうち辞任の申し出があった岩塚徹理事を除く理事10名と監事1名の再任が承認され、新たに朝比奈崇介氏および平野真澄氏の理事就任および寺田秀夫理事の監事就任が承認された。

第7号議案 理事長、常務理事選任の件（理事会のみ）

日野原理事長及び朝子常務理事の再任が承認された。

2. 第18回評議員会・第82回理事会

(平成20年10月24日開催)

第1号議案 平成21年度事業計画並びに収支予算案に関する件

資料に基づき、平成21年度の事業計画が承認され、また予算規模11億9,252万円で前年度比1億4,590万円増の

収支予算案が承認された。

第2号議案 日本財団に対する平成21年度助成金交付申請に関する件

助成事業助成金について平成20年度と同様に(1)国際フォーラムの開催、(2)健康教育・ボランティア教育の啓蒙普及並びに調査研究、(3)ターミナル・ケアの研究と人材の育成の3つの助成事業に加えて、(4)ピースハウス病院大規模修繕3,000万円をそれぞれ個別に申請するが、申請総額は5,590万円。また基盤整備助成金については平成20年度と同額の9,500万円を申請したい旨の説明があり、承認された。

第3号議案 役員選任の件(評議員会のみ)

任期満了となった石清水理事及び西立野理事の再任が承認された。

2 寄 附

本年も財団各部門の運営支援のために多くの個人、団体からのご支援をいただいた。

受領部門	金 額
本部・公益部門	1,112,000円
LPクリニック	74,210,449円
ピースハウス病院	12,354,884円
訪問看護ステーション千代田	778,960円
「新老人の会」	2,393,100円
合 計	90,849,393円

3 ピースハウス友の会

「ピースハウス友の会」は独立型ホスピス「ピースハウス病院」の運営を支援していただくために設立された組織で、会員の方々から年1回会費の形で寄付を継続していただいている。平成20年度は、197件、361万円のご支援をいただいた。内訳はさくら会員(1万円)149件、ばら会員(3万円)24件、はなみずき会員(5万円)14件、かとりあ会員(10万円以上)7件で、前年度と比較すると件数で11%、金額で3%減少している。

ピースハウスは昨年開院15周年を迎え、友の会会員や退会ボランティアなどさまざまな支援者をお招きして記念行事を行った。その際にお祝いをいただいたりしたが、昨年後半から始まった急激な景気悪化が影響しているものと思われる。会員の皆様にはこれまでのご協力に感謝し、引き続きご支援、ご協力をお願いしたい。

4 第23回 LPC バザー

1. 開催日 2008年11月18日(火)
2. 開催場所 砂防会館5階 健康教育サービスセンター
3. 来会者数 約80名
4. 当日協力者数 ボランティア約50名(LPCボランティア約30名・サポートボランティア約20名)・職員10名
5. 献品者 約80名
6. 講演会
演 題 年代を越えての交わりの大切さ
講 師 日野原重明財団理事長
参加者 72名
7. 収益額 77万8,960円
8. 概 観

今回も9月中旬にバザー準備委員会を1回開催し、バザー委員はじめ、開催準備のためのすべての確認を行った。決定されたことは、印刷済みの「開催案内ちらし」の配布先、ボランティア部署別担当売場、当日前2日間の献品の種別分け・値付け担当者を10月末までに決める、買上品を入れてもらう紙の手提げ袋を持ち寄る、販売場所としてロビーが食料品、ボランティアコーナーがピースハウスボランティア、実習コーナーが「ホスピスサポートチーム」「府中はなみずき」、「新老人の部屋」が雑貨、衣料品とする等。

バザー献品の搬入は、原則として11月初めから開催前日までの約2週間をお願いしていたが、「新老人の会」サークル活動で砂防会館に出入りされる方々は、来られるたびに持参されたため、都度、受領書を発行し、献品者リストに加えていく形をとった。開催当日はボランティアが10時30分(生鮮食料品が8時)、職員は通常時間で集合し、12時開始に備えた。また、11時45分に当日役割をもつ職員・ボランティアが集合し、確認事項を打ち合わせた。

開催日は例年通り開始時間の1時間前から買い物客が集まったが、待合室に集めて順番に入場させたため、特に混乱はなかった。しかし、近年、年間を通して各地でバザーが開催されていること、買い上げにより支えて下さっていた会員の高齢化もあり、来客数は減ってきている。

世の経済状態もあり献品も多いとはいえなかったが、衣類の中古品の売上の伸びと、売上金の全額を寄付して下さった業者もあって、当日売り・後売りを含

めて昨年よりも10万円以上の収益を得ることができた。

バザーの開催に関して、当日協力して下さったボランティアによるアンケート結果はほぼ問題ないようであるが、協力者の高齢化のため、協力の規模は減少の方向にあるといわざるを得ない。

5 第25回 LPC 美術展

1. 会 期 2008年6月17日(火)～7月15日(火)
2. 開催場所 健康教育サービスセンター「新老人の部屋」
3. 出 展 数 37点
4. 出展者数 42名 (合作2点 / 「新老人の会」会員33名・LPクリニック利用者4名・ボランティア3名・健康教育サービスセンター会員1名・元職員1名)
5. 作品内容 作品タイトル
絵画の部 (17点)
薔薇, 春の光, 月見草, 腰越漁港, ワンちゃんの休日, 合掌造りの里, 炎夏, 人物 (習作・1999年), キンレイ花, St. Thomas, バレリーナ, 裸婦, クリスマスローズ, Mさんの打った能面, 素描, スペインの街並み Toredóの町角 (Nov. 2007), 村祭り スイスの山村 (Aug. 1, 2006・RIGI-Kaltbad)
写真の部 (4点)
桜田門の桜 (5月初め), 流星, 五彩池 (四川省・九寨池), 涼風
そ の 他 (16点)
書 (4点): 和漢朗詠集「無常」かな, 聖書の言葉, 古今集二首, かい書・行書・草書の練習
俳画 (2点): 鹿の子百合, 鯛
書画 (1点): 古硯銘 (唐庚)
画装 (1点): 金婚式によせて「春蘭」
和紙絵画 (1点): 花しょうぶ
ちぎり絵 (3点): ロシアでペンナーレ, 友情の絆 - ALOHa!!, 椿
木彫 (1点): 鎌倉彫 折鶴
陶器 (1点): 花の美 (ほほえみ)
パソコン制作 (1点): パラ窓 (教会の窓のイメージ)
似顔絵 (1点): もったいない!!のマータイさんと
6. 概 観:
出展数は昨年より更に4点増えた。
初めて出展された方が10名で、全員「新老人の会」

会員であった。「新老人の会」会員が占める割合は出展者総数の80%近い。

会期の最終日にもたれた理事長を囲む茶話会では、出展者の半数以上が出席され、作品と関わった動機、制作の苦労話や作品についての思い出が語られ、質問や評価もあって、参加者同士のよき出会い、励まし合いの場となっている。

6 『研究業績年報 (2007)』 (28) の発行

2008年10月、今年度の職員および関係者の研究業績をまとめ、道場信孝研究教育部最高顧問の監修により通巻28号を発行した。

総説11編, 研究8編, 症例研究3編を掲載した。総説ではケアや評価に関わる本質論や問題意識, そして解決策などが論じられている。研究ではがんのみならず脆弱高齢者にも終生期の緩和ケアが適用されるべきという問題が提起されている。

また, 財団設立当初より一貫して行われている生活習慣変容の研究教育活動も依然として取り扱われており, 本誌においてもメタボリック症候群の病態論や, 糖尿病を対象とした問題解決へのパスモデルが地域医療連携ベースで展開されている。

ライフプランは生活の設計であり生き方のプランでもあることから, 当財団関係者の研究についてもこの特徴を生かして進めていきたいと考える。

7 memento mori 2008の開催

日本財団主催, 笹川医学医療研究財団と当財団が共催するホスピスセミナー「memento mori 2008 『死』をみつめ, 『今』を生きる」が, 鳥取市と長崎市の2会場で開催された。

2カ所とも当財団の日野原理事長が講演を行い, ピースハウス病院ホスピス教育研究所の松島たつ子所長が鳥取の会場でのディスカッションのコーディネーターを務めた。

なお, memento mori は1999年長崎に始まり, 2008年まで全国30カ所で開催してきたが, 10周年30回の長崎開催が最後となった。

第29回 memento mori 鳥取

日 時 2008年5月11日(日)

会 場 鳥取市民会館

参加者 1,200名

プログラム

講演

- ・与えられた人生、いかに生き、老い、痛み、死を迎えるか

日野原重明 (当財団理事長)

講演とディスカッション

- ・死をみつめ、今を生きる～ホスピス緩和ケアの現場から～

石垣 靖子 (北海道医療大学大学院、看護福祉学研究所教授)

徳永 進 (野の花診療所院長)

松島たつ子 (ピースハウス病院ホスピス教育研究所所長)

第30回 memento mori 長崎

日時 2008年10月12日(日)

会場 浦上天主堂

参加者 800名

プログラム

講演

- ・つながるいのち～悲しみを生きる糧に～

柳田 邦男 (ノンフィクション作家・評論家)

講演

- ・いのち・平和への願い

日野原 重明 (当財団理事長)

音楽と語り～子どもたちへ～

・ガボット (J.S. バッハ)

・G線上のアリア (J.S. バッハ)

・アヴェ・マリア (J.S. バッハ/グノー)

川井 郁子 (ヴァイオリニスト・作曲家)

松本 俊穂 (オルガン伴奏：長崎純心大学児童保育学科学准教授)

8 ボランティアグループの活動

ライフ・プランニング・センターのボランティア活動は、健康教育サービスセンターに属するオフィスボランティア、血圧測定ボランティア、模擬患者ボランティア、新老人サポートボランティア、ライフ・プランニング・クリニックを活動拠点とするLPCクリニックボランティア、それにピースハウス病院(ホスピス)を活動拠点とするピースハウスボランティアの6部門に分かれて展開されている。財団の活動は多岐にわたって展開されている。

そのため日常的には部門間のボランティアの交流はない。そのため、財団の理念を共有する目的でいくつかの行事が定例的に行われている。

1) ボランティア登録者数 (2009年3月31日現在)

総数 190名 (女性164名, 男性26名)

内訳

LPC クリニックボランティア	22名
-----------------	-----

健康教育サービスセンター	
--------------	--

オフィスボランティア	27名
------------	-----

血圧測定ボランティア	21名
------------	-----

模擬患者ボランティア	48名
------------	-----

新老人サポートボランティア	15名
---------------	-----

ピースハウスボランティア	89名
--------------	-----

*複数部門で活動しているボランティアがいるため総数とは一致しない。

オフィスボランティアは、健康教育サービスセンターの会報発送やPR・広報分野などが主な活動内容になっているが、近年、新老人運動の伸展とともに活動の場が急拡大している。模擬患者ボランティアは、医科系大学で需要が急増しており、活動人員もこの1年で20%近く増えた。年齢幅も広がりボランティアの質の向上を図るため研修会を重ねながら期待に応えている。

ピースハウスは年度末に十数名の退会者が出た。この1年間でみると入会者13名に対し退会者が21名あり、初めてボランティア数が減少に転じた。

全部門とも高齢化が進んでおり若返りは共通の課題となっている。

2) 年間活動時間 (2008年4月1日～2009年3月31日)

総計 35,878時間

内訳

LPC クリニックボランティア	4,624時間
-----------------	---------

健康教育サービスセンター	
--------------	--

オフィスボランティア	1,374時間
------------	---------

(血圧測定ボランティアを含む)

模擬患者ボランティア	3,254時間
------------	---------

新老人サポートボランティア	307時間
---------------	-------

ピースハウスボランティア	26,319時間
--------------	----------

ボランティアの活動時間集計は、自己申告に基づいて集計されている。財団では、毎年、財団設立記念講演会

を開催する日に併せて前年度に規定する奉仕時間を達成したボランティアを表彰している。

3) 2008年度の主な活動記録

- 2008年4月9日 第1回 LPC ボランティア連絡会議
各部門の新連絡員の顔合わせと年間活動行事に関する活動計画を協議した。
- 5月31日 ボランティア表彰式(笹川記念会館
レストラン「菊」にて開催)
40名が表彰された。詳細後述。
- 7月11日 第2回 LPC ボランティア連絡会議
財団の諸行事の案内、バザー日程の
確認、各部門報告などが行われた。
- 9月17日 第23回 LPC バザー準備会議
開催目的を前年同様「さらなる
LPC の発展のために」と決定、山
村恵美子バザー委員長の原案に基づ
き準備日程、役割分担、会場設定、
開催内容など詳細を協議決定した。
- 11月18日 第23回バザー開催
高齢化で来会者の入場数は減ったが、
当日の講演会参加費も含めて78万円
(前年比10万円増)の収益を上げた。
- 12月17日 LPC ボランティアクリスマス会
例年通り笹川記念会館4階会議室で
開催され、ボランティア38名、来賓
(主としてホスピスサポート活動を永年
にわたり続けているグループ)31名、
財団職員約20名が参加、生憎、日野
原理事長は体調を崩され欠席された
が、感謝と交流の実をあげることが
できた。
- 1月21日 第3回 LPC ボランティア連絡会議
LPC ボランティア研修会(2月16日)
計画、新年度のボランティア登録ス
ケジュール、財団の講座案内、各部
門の活動報告が行われた。
- 2月16日 健康教育サービスセンター視聴覚室
で開催
グループワーク「ボランティアの始
め時、続け時、辞め時」と日野原理
事長の講演「LPC ボランティアの

理念の継承」があった。

- 3月13日 第4回 LPC ボランティア連絡会議
LPC ボランティアグループ活動記
録の廃刊、LPC ボランティアニュー
ス(季刊)の発行、2009年度 LPC
ボランティアグループスケジュール、
役員交代などが話し合われた。

9 LPC ボランティア研修会

日 時 2月16日(月)13:30~16:00
会 場 健康教育サービスセンター視聴覚室
参加者 59名

講 演

・LPC ボランティアの理念の継承

.....日野原重明(当財団理事長)
1982年にはじめて財団活動にボランティアが参加して
以来、連綿と受け継がれてきた活動の精神と技術の再確
認を行った。

グループワーク

・ボランティアの始め時、続け時、辞め時

ボランティアに定年はないが、ボランティアの活動の
柱である自主性について照らし合わせ進退を考えたりす
ることは多くのボランティアが経験することである。志
半ばで辞めていった仲間、見事に卒業していった先輩か
ら学んだことは何かなどについて語り合った。

グループワークの前半は「ボランティアの始め時、続
け時、辞め時」をテーマに7組に分かれてグループワー
クが行われ、日野原理事長は「ボランティアはその活動
をやっている人に出会い、自分にはない生き方を発見す
ることによってスタートする」「ボランティアは一つの
運動であり流れである」「ボランティアは自分で自分を
彫刻することである」「ボランティアは選択であり、い
つ辞めるかは難しい」、そして、年をとったら世話され
ることを遠慮しない。提供するケアから受けるケアに移
行する仕方が水の流れのようにできるなら素晴らしいこ
とであり、ボランティア活動は人生という旅の道連れで
あると後半の時間で講話された。

10 ボランティア表彰式

日時 5月31日(土) 11時30分～13時
会場 笹川記念会館5階 レストラン「菊」
参加者数 28名(被対象者23名, 職員5名)

プログラム

理事長挨拶, 表彰, 各部門長の謝辞, ボランティアコーディネーターのことば, 被表彰者のお礼のことば

内容

昨年は、財団設立記念講演会とは切り離し、健康教育サービスセンター近くのレストラン「キャピトル・カフェ」で表彰対象外のボランティアの出席もいただいて行ったが、今年は、また、笹川記念会館国際会議場で開催される第35回財団設立記念講演会に併せて、同会場内にあるレストラン「菊」で被表彰者のみを対象に行った。

表彰時間数と人数は、500時間15名、1,000時間7名、2,000時間5名、3,000時間5名、4,000時間3名、6,000時間1名、7,000時間1名、14,000時間2名、15,000時

間1名の、9段階・合計40名であった。

特徴としてはピースハウス病院の受賞者が増えて32名(前年度27名)となり、また男性受賞者が9名(前年度5名)と約倍増したことがあげられる。

出席者は被表彰ボランティアが23名で58%、それに職員5名の合計28名であった。

表彰式では日野原理事長から、挨拶とともに一人ひとりに感謝状と記念品(「V」と刻まれた和光のシルバースプーン)が授与され、続いて西立野ピースハウス病院院長、朝子財団事務局長から感謝の言葉が述べられた。また、今回は、春の叙勲で24年にわたり犯罪者の厚生保護に保護司として尽力しその功績が認められて藍綬褒章を受けた中嶋久喜子さん(今回14,000時間達成で表彰)に対し、日野原理事長から特別記念品と労いの言葉が贈られた。

受賞者を代表して中嶋久喜子さん他5名の方々からお礼の挨拶があった後、記念撮影が行われ、例年にないテーブル着席の祝賀の昼食会で日野原理事長を囲み和やかな歓談が行われた。

報告/朝子 芳松(財団事務局長)

財団法人ライフ・プランニング・センター
年報 2008年度 (平成20年度 2008.4 - 2009.3) ・ 36

財団法人 ライフ・プランニング・センター
理事長 日野原重明

〒108-0073 東京都港区三田 3 - 12 - 12
笹川記念会館11階
電話 (03) 3454 - 5068 (代) FAX (03) 3445 - 1035
URL:<http://www.lpc.or.jp>

2009年 5月発行 (株)ブリカ

財団法人 ライフ・プランニング・センター

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階

電話 (03) 3454-5068 FAX (03) 3455-1035

■ ライフ・プランニング・クリニック

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階

(03) 3454-5068 FAX (03) 3455-1035

■ 健康教育サービスセンター

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

(03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■ 「新老人の会」事業部

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

(03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■ 臨床心理・ファミリー相談室

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

(03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■ 訪問看護ステーション千代田

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

(03) 5211-5330 FAX (03) 5211-5636

■ ピースハウス病院 (ホスピス)

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1

(0465) 81-8900 FAX (0465) 81-5520

■ ピースハウスホスピス教育研究所

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1

(0465) 81-8933 FAX (0465) 81-5521

全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会事務局

(0465) 80-1381 FAX (0465) 80-1382

■ 訪問看護ステーション中井

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1

ピースハウス病院地下1階

(0465) 80-3980 FAX (0465) 80-3979